
依存者の望み

圭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

依存者の望み

【Nコード】

N1908R

【作者名】

圭

【あらすじ】

王道展開で転生することになった俺が転生するのは、ネギまの世界。第二の人生なんて正直、面倒だけどある意味では俺にとって大きなチャンスだ。元の世界で秘密にしていた俺の望み、それが叶えられるかもしれないなら、俺は何だってしよう。原作？知るかそんなもん。

特定のキャラを愛でる為だけに書かれています。テンプレ&mp:こ都合主義が苦手な方は注意してください。追記：アンチありとなりました。苦手な方はお気を付け下さい。また、主人公性格が

酷く危ういので、嫌悪感を感じた方は読み進めないことをお勧めします

王道展開で転生します

side 彰

見渡す限り白い世界、なんてことは無くて俺がいるのは、殺風景な狭い部屋。

ちなみに床は畳だ。そして見事に散らかっている。片づけた痕跡はあるが、一か所に纏めただけで片付けたうちに入らない。

「……で、まあ聞きたいことは山ほどあるんだけどさあ」

「……」

「まず第一に、お前、なに？」

分らないだろう人たちのために説明しよう。俺の目の前には今、土下座をした美人さんがいる。部屋の主かはいざ知らず、随分とミスマッチなことこの上無いがそんなのはこの際無視だ。

「……………せん」

「は？」

「まっことに申し訳ございませんでしたあああああ……！」

……………土下座体勢で謝罪してきた美人さんの話によれば、俺は『死んだ』らしい。

いまいち実感が沸かない。ので、色々と思いだそうとしてみれば確かに死んだんだ。思い出したくも無かったけど。

ここで、今更ながら俺について説明しよう。俺の名前は瀬野彰という、どこにでもいる普通の大学生だ。

大学では理系を専攻していて、実家から離れた大学だったために一人暮らしをしていた。仕送り以外に金を稼ぐためにアルバイトをしていて、夜中のコンビニで働いていた。

そしてここからが重要で、俺が死んだのはコンビニに来た強盗のせいだ。正直、怯えまくりで手が震えすぎて強盗犯に対して恐怖なんて無かったけど、まさかその震えのせいで銃が撃たれるとは思わなかった。撃たれた銃弾はピンポイントで俺の心臓を直撃、俺は呆気なく死んだわけだ。そしてなぜだか知らないがここにいる。

「本当なら貴方はあの場は無事に済むはずだったんです。ただ、私がちよっと運命の糸を弄っていたら間違って切れてしまつて……」

「つまりお前の不注意が原因で死んでしまった、と」

「その通りです。いやもう、本当に申し訳ないですごめんなさい」

顔を上げては下げて忙しなく謝罪してくる美人さん。俺はどうするべきだ。

一、ぶんなぐる。

二、笑って許す。

三、途方に暮れる。

一は反省している女性に対して過激すぎるな。二は流石にそんな軽い問題でも無いから却下。三は現在進行形。

しょうがないし、新たな選択肢を開拓するしかないか。

「謝るのはもういいからさ、この後の俺がどうなるのかを教えてください」

「それは……貴方は既に死んでいるので、元のいた世界に戻すことは不可能です。ただ、その……別の世界に転生させることは、出来ません」

予想はしていたが、ご都合主義& a m p・王道展開だな。笑えもしない。

「転生先は俺の世界の漫画から選んだり、とかか？」

「その通りです。今現在、転生可能なのは『ネギま』の世界のみなので、貴方にはそちらに……」

「……まあ、いいや。どうせ死ぬか生きるの選択肢しか無いんだし」

第二の人生なんて正直、面倒くさいことこの上ないけど。ネギまも齧った程度の知識しかないけど、それでも、条件次第では俺の夢が叶う。叶わないと思ってた俺の夢が。

「転生させるなら、いくつか条件をつけさせてくれ。それくらい構わないだろ？」

「構いません。元より、転生先が戦闘などの危険が付き纏う世界なので、こちらの方で能力を付加します」

「どんな？」

「最強クラスの戦闘能力と、無限の魔力と気でどうですか？」

「俺がつけたかった条件と一致だな、良いぜ。あと他に二つ、物を創造する力をつけてくれ」

「……生き物を創造することは難しいですが、それでよければ」

「無機物ならどんなものでも創れば良い」

「了解しました。最後の一つは？」

「俺の望んだ場所と時代に転生させる」

ネギまの世界に転生するなら、俺がしたいことは一つ。俺の夢を叶える、それだけだ。そのためにはこの最後の条件が重要になる。

美人さんは頷くと、ポンと畳を叩いた。なにもないそこから出て来たのは重厚な木の扉で、開かれたその向こうは七色に光っているだけで何も無い。

「この扉をくぐれば貴方が望む場所と世界に転生されます。ついでなので、年齢も貴方が望んだ通りになるようにしておきますよ」
「そいつは助かる。赤ん坊から人生再開なんて、洒落にもならないからな」

扉の前に立って、俺は笑った。ここにきて初めて浮かべた笑みだった。

「じゃあな、美人さん。今度は間違っ て殺すなよ」

「本当にごめんなさい。第二の人生、楽しんでくださいね」

見送る美人さんに背を向けて、俺は光に身を投じた。そして望んだのは、俺の夢への始まりとなる場所。

薄れゆく意識の中で最後まで、そこだけを思い続けた。

王道展開で転生します（後書き）

あとがき

そんなこんなで初めましてみなさん。正直、ネギまの展開なんてそんな覚えてない作者です。

単行本も売ったしなあ…とりあえず、修学旅行編まではやりたいのが本音です。出来れば学園祭もやりたいけれど、続けば良いですね。始まったばかりですが、よろしく願います。

最初から最強です

sideとある烏族

俺たちの里に人間たちが襲撃してきた。お頭が随分と喧嘩好きなのに代わってから数十年、冷戦をぶち破ったのはこっちだ。若い奴が一人（いや、一羽か？）人間の集落を襲いやがった。そりゃ、向こうも怒るだろうよ。だが展開が早過ぎる。今じゃ俺たちの里は血と炎の海だ。

「まったく、おれゝ酒が飲みりゃよかったんだがよ」

文句を言っても仕方がない、早いところ終わらせたいものだ。ぶつとい槍を一薙ぎすりゃ、それで何人も人間が勝手に死んでくれる。神鳴流とかいうのは厄介だが、後はただの雑魚ばかりだ。

「んん？」

何人も固まってる人間共を薙ぎ払った先に、予想外のものを見つけてしまった。そいつも人間だったが、童だ。黒い髪の毛、人間で言う十歳程度の童がいた。だが俺が驚いたのはそこじゃない。こいつが垂れ流しているこの、溢れている気の量が、あり得ないかった。

「……死んだ、な」

槍を構えれば、童も構えた。きっと俺は死ぬだろう。

side 彰

周りの人間が倒れたと思ったら、でかい槍を持った烏族がいた。どうやら俺の望んだ場所にはこれらしい。もう一つの問題は時間の方だが、周りを見れば烏族と人が争っていて、血と炎の海だ。おそらく俺の望んだ時間のはず。

「なら、急がないとな」

目の前で槍を構えている烏族をまずはどうにかしなければならぬ。とりあえずは正当防衛が成立するはずなので、こちらにも拳を構える。そして、地面を蹴った。

「眠っててくれ！」

突撃してきた俺に向かって槍を振ろうとした烏族の懷に潜りこみ、鳩尾を一発。たったそれだけで俺とは比べ物にならないくらいに巨体が吹っ飛び、家にぶつかって全壊させる。それには俺も驚いてしまったけれど、今は考えるよりも行動を起こす時だ。

走り出した俺は気を張り巡らせ、気配を探す。探すのは人でも烏族でも無い、混じりものの気配だ。そしてすぐに見つけ出したその気配は、俺の進行方向から発せられていた。

「走り抜けられるか…」

走る。落ちてくる瓦礫や巨体、流れ弾なんかは全て避けて、俺は村はずれを目指した。ちなみに、全速力で走っている俺を見つけれるのはそういないはずだ。怖いくらいの勢いで回りの景色が移り変わって行き、数分と経たずに俺は戦闘区域から抜け出せた。

更に走り続け、辿り着いたのは小さな家。中からの気配は目的の気配と、後は人間と死んだものの気配が二つ。

「（先を越されたかつ）」

思うが早いか飛び蹴りの勢いで俺は扉を蹴り破って家に突入する。中にいたのは刀を構えた人間と、白い翼を持った女の子。

「なにもげぶらあ!？」

「悪いけどおっさん退場!!」

おっさんのすぐ傍で着地した俺は何も言わせる間もなく回し蹴りを食らわし、その体を家の外へと吹っ飛ばす。これで邪魔者はいなくなり、俺の目的を達成しやすくなるわけだ。

俺は、目の前に座りこんだ女の子を見下ろした。だが女の子の様子が可笑しい。目線を同じくらいまで下げてその瞳を見ると、虚ろに彷徨っていた。覗き込んだ俺の顔が見えているのかすら危うい。

仕方なく立ち上がって俺は後ろを振り向いた。倒れているのは女の子の両親であろう、烏族と人間の女性。二人とも死んでおり、刀傷から見るにさっきのおっさんが殺したんだろう。幼い女の子の目の前で、両親を殺したのだ。

「……………ム力つくなあ」

鳥族と人間の争いなんて、正直、どうでもいいんだ。俺はついさっき転生したばかりで、事情なんて知らないから。ただ、今目の前で死んでいるうちの片方は人間だ。あの男は同じ人間を殺したというのか。

「よいしょつ、と」

考えても仕方がない、さつき男はぶん殴った、だからこれ以上、無駄に時間を浪費する必要はない。

俺は鳥族と女性の亡骸を抱え上げる。殴ったり蹴ったりで実感していたが、本当に凄い力だ。全然、重いと感しない。

二人の体を抱えて上手いことバランスを取りながら、俺は女の子の前に戻る。流石にしゃがむことは出来ないので、見下ろしたまま声をかけた。

「おい」

「…」

「お前の親が死んだのはショックだろうが、今ここにいたら、死ぬぞ」

「…」

嘘を吐いた。ここにいるても女の子は死なない可能性が高い。なぜならこの女の子は原作キャラだからだ。でも、俺は嘘を吐く。

「もうすぐここにもさっきの奴みたいなのが来るだろう。どうする、それを待って死ぬか？」

「…」

「俺としてはそれは困るんだけどな。この辺の地理には詳しくないから、どうやったら逃げられるのか教えてもらいたいんだけど」

「…」

「あと、この二人の墓を作りたいんだ。だから丁度いい場所を教え
てくれないと、適当にその辺にぶん投げることになる。それでも良
いか？」

「……」

ピクリと女の子の体が反応した。ゆつくりと顔を上げて、その瞳が
俺を見る。それを待つて俺は口元に笑みを作つて告げた。

「一緒に来い。ここから逃げるんだ」

女性の体を担ぎあげ、手を伸ばした。

side 白翼の少女

人間と、人間が抱えた母様と父様と一緒に、森の中を歩く。後ろか
らは引つ切り無しに爆発とか、悲鳴とかが聞こえて来ていた。

隣を見れば人間は、母様たちを抱えてるのに全然平気そうな顔をし
て歩いていた。ときどき後ろを気にしながら、それでも急ぐことは
しなかった。うちの足に、合わせてくれてるんだ。

母様と父様が人間に殺されて、何も分からなくなっていた時、この
人間が来た。人間はうちに、一緒に来い言つて手を差し出してきた。
なんでそんなことを言ってくれたのか分からないけれど、うちはそ
れが嬉しかった。母様と父様を弔ってくれる言うし、何より、この
翼を見て殺そうとせず、そう言ってくれたのが嬉しかった。

「……ここを抜ければ、山の反対側に出られる」

「分かった。念の為に入ったら入口は塞ぐか……出口には誰もいないみたいだな」

「…分かるん？」

「心配でな」

うちには全然、そんなの分からんけど人間は分かる言う。洞窟を少し進んだところで、人間は足を振り上げて天井の一部を壊してもうた。触れてもいないのに、どうやって壊したんやる？

「……人間、凄いなあ」

「お褒めに預かり光栄ってな。ちょっと待ってるよ、今、明り作るから」

作るって言われて、首を傾げた。確かに真っ暗やけど、材料も無いのに明りを作ることって出来るんやるか。

そしたら人間は何やら黙って目を閉じて、次の瞬間にはポンッって地面に明りが出てきた。ガラスの中に火の灯った蠟燭が入っていて、驚いてうちは小さく声をあげてもうた。

「な、なんや!？」

「ランプ…ランタンだっけ？まあ明りだよ。悪いんだけど、持ってくるか？」

「ええけど……どっから出したん？」

「それは後で教えてやるよ。ほら、行くぞ」

人間が歩きだして、うちも慌てて追いかける。ガラスについた取っ手を持って歩いて、人間を見上げた。さっきといい今といい、人間は、凄い人や。

物の創造を初めてやってみたけど、上手くいった。どうやら俺が頭で考えた物がそのまま出来上がるみたいで、出てきたランタンは俺の想像とまったく同じ物だった。

「（今のところ、順調だな）」

転生してから、俺が考えた通りに動いている。美人さんが付加してくれた力も問題ないし、目的の女の子も隣にいる。そう、俺の目的はこの女の子だ。ちなみに俺にロリ趣味は無い。あるのはちょっと歪んだ望みだけ……決して、ロリコンではない。

「見えたで」

明りが見える。出口が近いようで、緩やかな坂になっている道を上り、俺は思わず感嘆の声をもらした。

洞窟から出た先に広がっているのは見渡す限りの木々と、昇り始めた太陽。大自然の贗す絶景が、暗闇から抜け出した俺と女の子を歓迎してくれた。

「ここまでくれば、たぶん誰も追ってこないはずや」

「なら、この辺りで誰も来ない場所を探そう。この二人の墓も、あまり故郷から離れた場所では寂しいだろうからな」

「……せやな」

無言のまま歩き出す。順調だったけれど、まだ立ち止まることは出

来
な
か
っ
た。

最初から最強です（後書き）

転生したことに対する戸惑いも何もふっ飛ばしての最強主人公。次は色々すすつとばして行こうかな…？

俺と女の子

side 彰

俺と女の子が洞窟を抜けてから時間は進み、今俺たちがいるのは鬱蒼と生い茂る木々に囲まれた小さな広場。俺たちはそこに二人の墓を作って、今は黙って休憩中……というよりも、女の子が何も言ってくれない。でも俺としてはそろそろ話したいので、こちらから行動を起こそうと思う。

「さて、と……まずは、自己紹介でもしようと思うんだけど、良いか？」

「ええけど……」

ああ、さっきまではもう少し懷いてくれていたのに……いや、極限状態故の苦肉の策で俺に着いて来ていただけなのかもしれない。怯えというか戸惑いの混じった瞳が痛い。

「俺は瀬野彰。普通の人とちょっと違った力を持ってるだけの人間だ」

「……うちは、刹那や。えっと……」

やっぱり、間違っていなかった。女の子が桜咲刹那であることは俺の望んだ通りだ。そもそも俺があの場合に転生したのも、俺が『桜咲刹那に接触出来る場所』を望んだからだった。

「……刹那がハーフなのも、白い翼が禁忌なのも知ってる」

「っ」

刹那が息を呑む。それはそうだ、原作での彼女も随分と気にしていたし、ハーフであることや白い翼であることは彼女のコンプレックスだ。そして、だから俺は彼女に接触することを望んだ。

「綺麗だけどな、その翼」

「……………え？」

「翼も髪も、真っ白で綺麗だ。翼は気持ちよさそうだし……………触っても？」

「ええ、よ……」

のそのそと近づいて翼に触れる。柔らかくてふわふわしていて、癖になりそうだ。惜しむらくは少々血で汚れていることだが、後で綺麗にしなければならぬ。

俺が触っている間、刹那は終始くすぐったそうにっていて、かわいらしいその表情に思わず頭を撫でてしまった。

「ひゃっ！！」

「おお、悪い悪い。驚かせたな」

ビクッと跳ねたことに手を離し笑いかける。なんとも庇護欲を駆られる…俗に言う守ってあげたいというのは、こんな感じか。

「思った通り、ふわふわで良いな。汚れてるから、後で綺麗にしような？」

「……………気持悪くないの？」

「なんで？」

「だって…ハーフやし、禁忌、やし……」

「人間と鳥族、種族を越えた愛の結晶が刹那だろ。ハーフだって良

いじゃないか。白い翼が禁忌であろうと、俺はお前の翼を綺麗だと言っさ」

むしろそんなことを気にする必要性を感じない。刹那が禁忌の存在だろうと、俺には関係ない。そう、転生したばかりの俺にはこの世界の事情など何もかも関係ないのだ。興味すら無い。

「お前のことを虐める奴は俺がみんなぶっ潰してやる。だから刹那、もう自分のことを気持ち悪いだなんて言うなよ？」

「っ……ええ、の？」

「良いんだよ。なあ刹那、言っただろ。俺と一緒に来いって、言っただろ？俺は刹那と一緒にいたいんだよ」

「っふえ、え……」

ボロボロと涙を流し始めた刹那に、俺は笑いかけて頭を撫でてやるくらいしか思いつかなかった。抱きしめる？そしたら驚いて泣きやむかもしれないだろ。俺は泣かせてやりたかったんだから。

side 刹那

ハーフであること、白い翼であること。全部がうちの存在を否定してきた。

母様も父様も笑って抱きしめて、愛してくれていたけれど、村の大人たちも子どもたちもうちのことを睨んできていた。触るな、近づくな、そう言っつて石を投げられた。

こんな翼が無ければ、せめて黒色やったら、ハーフやなかったら。

思っても現実には残酷やった。

そして争いでうちのことを愛してくれた母様たちも死んでもうて、これからどうしよう思った。やって、もううちしかないから。でも、それは違った。

人間が、人間の言葉が、信じられなかった。うちがハーフであることも禁忌であることも知ってる言うて、なのにうちと一緒にいたい言うてくれる。その言葉が嬉しくて、嬉しくて泣きだしたうちのことを慰めるように、頭を撫でてくれる。溢れた涙は全然、止まってくれなかった。母様と父様が死んでしまった悲しみと、一緒にいたい言うてくれた人間の、彰の言葉に溢れた喜びで、止まらなかった。

「うち、も……一緒に、おりたい」

「ああ、いよう。一緒にいるんだ……だから、もう怖がる必要は無いんだ」

せやな。もう怖くない、うちは一人じゃない。彰がいてくれるから、怖くない。

そしたら、安心したせいなんかなあ、凄く眠くて……うちは、眠っ
てもうた。

side 彰

俺は眠ってしまった刹那を抱き上げて、空を仰いだ。

「やあっと、手に入れた」

安堵のため息を一つ。ネギまの世界に転生すると決まって、俺が望

んだのは桜咲刹那を手に入れることだった。

手に入れる、といっても俺は刹那をどうこうしたいわけじゃない。ただ一緒にいたい、それだけだ。抱いている感情は、家族愛が一番近いだろう。

恋人同士の恋愛だとかには興味が無い。俺が欲しいのはそんな優しいものじゃなくて、全てを越えて繋げられる何か。原作での刹那の木乃香に対する態度から、正直、欲しくなった。上手くやれば俺の望むものを手に入れられると思った。

「愛情なんかより、麻薬の方が強く深い……」

愛情<依存。俺が欲しいもの。全てを超越し、決して切れることのないそれ。

あのタイミングで、あの言葉で、俺は刹那にそれを植え付ける。種は蒔いたから、あとはそれを育てるだけで良い。

「正直、原作のことなんて知らないからな……ああ、でも友達はいた方がいいか。やっぱり木乃香が一番良いのかもしれないな」

とりあえず、種を育てつつ清く正しく育てることにしよう。まずは住む場所を探して、修行もさせよう。それから木乃香にも会わせてやろう。つてがないがそれは上手くやるとして、それから……やることは山積みだ。

一年経って、血塗れ

side 彰

俺と刹那は、刹那の両親の墓のすぐ傍に住み始めた。土地自体は数時間くらい歩いた先の村の村長が地主だったようで、この一角だけ買い取らせてもらった。ちよつと高性能の物をいくつか創って渡したらそれで十分だったらしい。あとは、墓のある広場の木を少しばかり伐採させてもらい、空いたスペースに家を建てる（創る）。本当なら人払いの魔法とかを使いたいところだが、生憎と俺にはその知識が無い。今度、どっかから適当に魔法書なんかを借りてくる（盗ってくる）予定である。

そんなわけで今現在の俺の生活は、基本的に刹那の修行だ。最初は気の使い方を中心に教え、翼を隠せるようにした。いつまでも人と離れて暮らしてはいられないからな。で、気の使い方に慣れてきたら実践に移ったのだが、俺が何かを教えられるわけでもないので基本的に、俺との戦いで刹那の基礎体力の向上や瞬発力や判断力などのもるもろを上げさせる。後は自分で学ばせるだけだ。

あと、字を書く練習もさせてる。刹那の年齢を聞けば四歳だと云うが、何事も早いに越したことは無い…と思う。烏族の血が混じってるせいか才能が戦闘の面では中々だが、勉学の面ではほぼ無知だった。読めはするが全くと言って良いほど書けなかった。四歳ならこれで普通だろうが……修行に集中させるためにも、貯金は多い方がいい。

「刹那、ここ違うぞ」

「う……」

間違っている字を指摘する。今は夜、勉強の時間だ。午前と午後は修行に使っていて、専らこの時間に勉強させている。そのうち、暗闇でも戦えるように修行の時間を夜にも組み込む予定だ。

「これが終わったらお風呂に入って、今日はもう休もうな」
「うん」

ちなみに、この家も刹那が使ってる筆記用具一式も俺が創った。日用品とか、金が必要ないから便利で良いな。

そんなこんな我的生活も一年が経過し、俺は刹那の修行をしながら考えていた。これからの刹那の教育方針だ。

実践による修行は素手を中心としたもので、そろそろ刹那にも武器の扱い方を教えるべきだろう。ただ問題なのが、素手以上に武器に關しては俺が何も教えられないことだ。俺自身は武器を持てば考える間もなく使えてしまったため、教えられない。基本すら分からない俺には手の出しようが無いのだ。

どうしようか考えている合間にも刹那の攻撃は続く。いったん止めるかと、俺は着きだされた拳を避けて首を捻るとその体を地面に叩き付けた。

「つかは、はっ……」
「休憩だ、刹那」
「っはい」

身を起こした刹那が次の攻撃を仕掛ける前に止め、適当な木に寄り掛かる。トタトタと走ってきた刹那が隣に座って寄り掛かってくる

と、優しく頭を撫でてやった。甘やかして育てた為か、俺が覚えてる原作の刹那よりも甘えたなように思える……まあ、俺としてはその方が嬉しいのでこの教育を変える気は無い。

思えば刹那は愛情に飢えていたんじゃないだろうか。両親に愛されていても、それ以上の罵倒が村人から投げられていたようだし、刹那自身が自分を否定的に見ていた。だから俺みたいな他人から一緒にいたいと言われたのが嬉しかったのだろう。何もかも関係なしに自分を認めてくれる存在が初めてだったに違いない。

「次は翼を使つての戦い方を覚えような」

「うん……」

「そう心配するな。俺はお前の翼が好きだし、空を飛ぶ姿も好きだ。お前の翼を見て、お前のことを悪く言う奴は俺がみんな消してやるから、な？」

「……うん。彰が、そう言ってくれるなら、ええよ」

「そうか」

ポンポンと軽く撫でて終わりにする。そろそろ修行を再開しようと立ち上がった時、接近してくる気配があつて眉を寄せた。

「今日は人払いもしてないから来ても可笑しくないが……こんな山奥に、一体誰だ？」

「彰？」

「刹那、お客さんだ。数は二人で……片方は随分な魔力の持ち主だな。殺気立ってるし、戦闘の可能性が高いな」

「……うちも戦えるよ？」

「そうだな、せっかくの機会だ。刹那は、魔力の低い方を殺れ。高いのは俺が殺る」

「分かった」

刹那にはそう指示を出して、後はお客の到着を待つ。戦闘場所はこの広場内だけにしておこう。俺は軽く目を閉じて、捕獲能力の高い罫を複数考えて広場を囲むようにして出現させた。まだ発動させていないが、お客が広場に入ってから発動させる。俺の創り出した物とは気と魔力の糸で繋がっているから、遠距離でも操作が可能だ。刹那とここに暮らし始めてすぐにこの繋がりは理解した。一年間、何も刹那の修行だけしていたわけじゃない……俺の力も、上達しているはずだ。

「気配は分かるか？」

「ここまで来れば分かる……大人と、子ども？」

「そうだ。だが面白いな、魔力が高いのは子どもの方が……どうやら、ただのお客じゃないらしい」

ガサツと茂みが動いて、子どもを抱えた男が飛び出してきた。男は俺たちがいるとは思わなかったのか、面白いくらいに驚いている。

「な、なんだ貴様ら！？」

「それはこっちの台詞だな、いきなり人の敷地に入ってきて……その子どもは、どうした」

「ううう煩いっ！！くそっこうなれば……」

男が懐から呪符を取り出そうとしたのを見て、俺は軽く地面を蹴り男の真正面で止まると子どもを抱えた腕を下から蹴り上げた。折ってしまったもよかったがこいつの相手は刹那がするので、あまり弱くしては修行にならない。取り落とされた子どもを抱えて同じように軽く地面を蹴って後退する。男の顔が怒りに染まった。

「貴様っ、その娘を返せ！！」

「きな臭いのでパス。刹那、修行の成果を見せてみる」

「手加減せんでもええの？」

「良いよ。不法侵入は悪いこと、悪いことをしたら罰を与える。これ常識、覚えてるな？」

「覚えてる……はっ」

刹那が男に飛びかかった。体の小さな刹那に力に頼った戦い方は教えていなくて、速さと手数を重視して教えている。だから男に襲いかかる攻撃の量も半端じゃないだろう……呪符を出す暇なんて無い。何らかの武器を使う相手に素手で戦うときは、絶対に武器を使う暇を与えるなど教えてある。まあ、格上の相手にそれは出来ないだろうが、この相手になら十分通用する手だ。

「順調に強くなってるな。で…問題は、この子か」

黒髪の女の子。見覚えがあるけど、果たして誰だったかなあ。

side 刹那

力の無いうちに彰が教えてくれたのは、速さで相手を翻弄して攻撃を叩きこむ戦い方だった。前後左右上下から攻撃して、絶対にその手を緩めたらあかん言った。

「この餓鬼がちょこまかとっ」

男が何かやる暇なんて与えん。呪符を使えば式神を作れるのは実際に彰がやって見せてくれたから知ってるけど、その作り出されるものによってはうちじゃ敵わない場合もある。だから早いところ、使

い手を潰すのが重要なんや。

「てやつ!!」

「ぐげらっ!?!」

後ろに回り込んで相手の首筋を蹴り飛ばし、追撃で木に叩き付けた体に掌底を当てて終わりや。あんま力抜かんかったから、もしかしたら骨までいってしもたかもしれないけど、たぶん大丈夫やろ。悪い人には手加減の必要は無いで、彰も言ううとったし。

「終わったで、彰」

「おお、どうだった? 初の実戦は」

「彰より弱いもん、こんなん平気や」

「そうかそうか」

いい子いい子と頭を撫でてくれる手が好きや。優しくて、温かくて、母様たちみたいな手。この手をうちは失いたくない。

いっぱい撫でてもらっていると、うちの手を引く誰かがいた。さっきの男に連れてこられた女の子が引く張ってみたいで、なんでか分からなくて首を傾げる。そしたら女の子がにばって笑ったんや。

「助けてくれて、ありがとうなあ」

「…そうなん?」

「ああ。どうやら、この子はあの男に攫われたみたいだ」

「そうやったんか…なんでや?」

「うちもよう分からんの。うちな、近衛このか言うねん、よろしゅうなあ」

「俺は瀬野彰。で、刹那だ」

彰に言われてペコリと頭を下げる。礼儀は大切やって教えてくれた

んや。

「刹那かあ……じゃあ、せつちゃんやね」

「せつちゃん？」

「うちのことはこのちゃん呼んでなあ」

「……このちゃん？」

「そうや。うち、同じくらいの友達って初めてや、嬉しいなあ」

「…友達？」

このちゃんの言葉にうちは首を傾げてばかりや。やって、せつちゃんって嬉しそうに呼んでくれて、それに……友達、って。

「このかは、刹那と友達になってくれるのか？」

「うん！うち、せつちゃんと友達になりたいんよ…嫌？」

「え、あ、ううん……このちゃんが、なってくれるなら……うちも嬉しい」

「じゃあ、今日からうちらは友達や！！」

「わっ！？」

ぎゅうって抱きついてきたこのちゃんを受け止めきれなくて、二人揃って地面に転んでもうた。このちゃん、凄く嬉しいみたいや。彰もなんだか笑いながら見てるし…うちも、喜んでいいのかな？でも、そう思ったうちの目にあれが飛び込んできた。油断してたんやな、一枚の呪符が飛んでくるのに気付かないなんて。慌てて迎え撃とうと思ったけど、このちゃんがうちのうえに乗ったままで、動きが遅れてしもた。その間に呪符は式神に変わって……大きな鬼が、現れたんや。

「っこのちゃん！！」

「ふえ？」

使い手が誰かとか、さっきの男がまだとか、そんなこと考える暇なんて無い。うちはこのちゃんのを突き飛ばして、自分の身を守るように腕を構えて翼を広げて更に身を包む。見られたらとか考えている暇は無いんや。

振り上げられた大きな棍棒に当たったら、一溜まりも無いんやろうけど、うちはハーフやから普通の人よりちょっとくらい頑丈や。だから、大丈夫。そう思って衝撃に耐えようとしたのに、いつまでたってもその衝撃はうちを襲ってこなかった。

「……………え？」

でも代わりに、ぼたって水が落ちてきた。嫌ってほど嗅いだあの匂いがすぐ傍でして。

翼の間から上を見上げたら、なんでやるな。うちを覆ってる彰のせいで鬼の姿が見えへん。それくらい近かったんや。

「刹那……大丈夫だ」

「あき、ら……？」

「大丈夫だから、安心しろよ？」

そう言つて、彰の体が大きく傾いて地面に倒れた。なんでや？なんで、真っ赤なん？なんで、血の匂いがするん？なんで…なんで？

「あきら？」

ああ、大変や。彰が血塗れになつとる……まるで、母様や父様みたいやなあ。

「あき、ら、あきら、あきらあああああああ……！！！！」

彰、
いなくなるん？

咲かせた花が枯れないように

sideこのか

せつちゃんに押されて、うちは地面に座り込んでたんや。そしたら気付かなかったけど、なんや本で読んだ鬼さんがおったんよ。きつと、せつちゃんはうちを守ろうとしてくれたんやなあ、優しいなあ。でな、バサアッてせつちゃんの背中から翼が生えてきたんよ。真っ白で綺麗な翼でな、うち見とれてもうたんや。

「せつちゃん、きれいやなあ……」

天使さんみたいやった。やっぱり空とか飛べるんかな？今度うちも一緒に飛んでみたいわあ。

それでな、鬼さんがなんやでつかい棒でせつちゃんのこと殴ろうとしたんよ。うち吃驚してもうて声もあげらんかった。そしたら、彰君がせつちゃんを守ったんよ……でも、彰君倒れてもった。血がいっぱい出てて、うち動けんかった。

「あきら、あきらあああああああ！！！！」

ああ、せつちゃんが泣いてる。彰君の怪我も痛そうや。どないしてこないなことになるてもうたんやろ。

それに大変や、鬼さんがまたせつちゃんのこと殴ろうとしてる。うちは今度こそ、声をあげたんや。

「せつちゃん、後ろ！！」

「っお前えええ!!!」

せつちゃんが鬼さんに向かっていく。さっき、せつちゃんがうちのこと誘拐した人と戦ってるのを見てたけど、やっぱりせつちゃんは強いんや。鬼さんがな、せつちゃんが蹴ったら凄く遠くまで吹っ飛んでもうたん。

うちは立ち上がったて彰君のところまでいったんよ。頭からいっぱい血が出ててな、触ったらぬるってして、まだ温かった。どうしたらいいか分からなくて、うちは彰君に話しかけたんや。

「彰君、彰君、起きてえな。彰君」

「ッ…」

「なあ、起きて。お願いやから起きてや。せつちゃんが泣いてるんだよ、いっぱい泣いてるんだよ」

きつとせつちゃんにとって彰君は大事な人や、だからあんなに泣いて怒ってるんや。でもな、うちそんなせつちゃん見てたら、なんだか胸がキュウツて痛くなるんよ。せつちゃんがあんな風に泣いてるの、見ていたくないんよ。だからな、お願いや。せつちゃんを止めてあげて。

「彰君、起きてや。お願いやから…せつちゃん、泣かせんといて」

彰君の手を握ってお願いする、起きてって。そしたらなんや胸のあたりがぼかばかしてきて、視界が真っ白になって吃驚や。でもな、そしたら彰君の傷がみるみる治って、起きてくれたんよ。

「彰君!!!」

「この、か……今の、もしかして…」

「なあ彰君、せつちゃんを止めて!!!せつちゃんが泣いてるんや!

「！」

「……刹那が？」

彰君が鬼さんと戦ってるせつちゃんを見て立ち上がった。ああ、せつちゃんも傷だらけや。さっきの光が彰君の怪我を治したんやったら、せつちゃんの傷も治してあげてくれへんかな。

side 刹那

彰がな、倒れたんや。うちのこと守ってくれた母様と父様みたいに、倒れて起きないんや。

どうしてや？どうしてうちからみんな連れて行ってしまっくん？うちがハーフやから？禁忌の忌み子やったから？

うちにはもう彰しかいないのに、彰まで連れて行ってしまっくん？そんな酷いやないか。うちはただ、一緒にいたいだけなのに、それすら望んじゃいけなかったの？

「嫌いや、お前嫌いや！！」

うちから奪っていくお前なんか嫌いや。彰だけでええのに、それ以外は望んだりしないのに。

一緒にいたい言うてくれた彰、頭を撫でてくれた彰。あの時、殺されそうだったうちを助けてくれた彰が、うちは好きや。だからお願いや、邪魔せんというて。

「消えろや！！」

ポフンッて音がして鬼がただの紙切れに戻る。術者もちゃんと消し

たし、もう平気なはずや。ああでも、あかん、手も足も傷だらけや。服も汚してもうたし、彰、怒るやろか。でも彰は滅多に怒らんのや、もっと怒ってくれてもうちは平気やのに……でも、優しい方がやっぱり好きや。

「刹那」

「っ彰！！」

下を見たら彰がいたんや。さっきの怪我も無くなって不思議やったけど、それ以上に嬉しかった。だって母様や父様みたいに彰までいなくなったら、うちはもうどうしたらいいか分からなかったから。飛んでいたうちはそのまま彰に飛び付いたんやけど、彰は簡単に受け止めてくれた。

「あきら、あきらあっ」

「ごめんな刹那、心配させて。俺は平気だ、刹那の前から消えたりしない、死んだりしないよ」

「うんっ、うん…死なんとして、彰まで死んだら、うちもっ、もうっ」

「大丈夫だ、大丈夫……不安なら、約束しようか？」

「約束？」

「生きるのも一緒、死ぬのも一緒。刹那が死ぬ時は俺も死ぬし、俺が死ぬ時は刹那を殺してあげる」

吃驚した。やって、そんなこと言うとは思わなかったんや。でも、この約束やったら、うちは絶対に彰を失くさないですむってことやる？死ぬ瞬間まで一緒ってことやる？

「それが、ええ……ずっと一緒にいてや、彰」

「ああ……絶対に離れたりしない。だから、安心してお休み」

嬉しいなあ。うち、これからもずっと彰と一緒にや。もう大事な人がいなくなることはないんや…。

そうや、このちゃんは大丈夫だったんやろか。確認したいけど、もう眠い…。あとで、会えるといいんやけどな、あ…。

side 彰

腕の中で眠る刹那は本当に天使だ…。ああ、いや、そうじゃないな。シリアスな場面をぶち壊してる場合じゃない。だが、誰にこの感動をぶちまければいいんだろう。俺は今、溢れかえった感動に思わず泣いてしまいそうになるのを耐えてる最中だ。

「刹那…。約束だからな」

蒔いた種はすくすくと育って、綺麗な花を咲かせた。あとは水と肥料を与えて枯れないようにするだけだ。

でも、まさかこうも上手くいくとは思わなかった。呪符を止めなかったのも、無防備に鬼の攻撃を受けたのも、全てはこの為だ。俺が倒れた時、刹那がどんな反応をしてどんな行動を起こすのか、それを確かめたかった。まあ、魔力と気で治そうとしているときに、このかが力を発揮して治すのは誤算だったがな。原作ではこの時期なんて力の片鱗も見せていなかったはずなのに…。これは、色々と考えた方がいいかもな。刹那との関係とか、上手く調整しないと。

ああ、だがそれよりも早く刹那を治さないといけないな。それから頑張ったご褒美にいっぱい甘やかしてやろう。今日のご飯は刹那の好物をたくさん作らないと…。

「彰君、せつちゃん大丈夫なん？」

「ん？ああ、怪我が多いけど大丈夫だ。今は疲れて眠ってるんだ」

「よかったえ……あ、なあ、ちよつとしゃがんでくれへん？」

「なんだ？」

俺が感動に浸かっているのに待ちきれなくなったこのかが心配そうにやって来て、刹那の無事を知ると安心したように笑みを浮かべた。そして俺が言われるままにしゃがむと、刹那の手を握って祈るように目を閉じると呟いた。

「せつちゃんの怪我が早く治りますように……」

それを聞いたまさにその時だ。俺はこのかの体から流れ出る魔力が膨れ上がったのを感じて、思わず目を見開いた。魔力は全て刹那に向かつて注がれ、瞬間にその傷を癒してしまう……これはどうやら、本格的に覚醒しているらしい。粗削りだが刹那の傷を綺麗に治してしまった。

「え、なんや？」

目を開けたこのかは自分がしたことに気づいていないみたいで、刹那の怪我が治ったのに驚いている。俺はといえば、説明するべきかどうかを考えているところだ。この瞬間の行動次第で、今後のこのかの運命ががらりと変わるのだから慎重にもなる。俺だって、色々考えているのだ。

「このか！！」

だがそんな俺の集中を邪魔するように割り込んできた声に俺は眉を顰める。広場の外から男が必死の形相で走ってくるのが見えた。

「お父様や！」

「そつか……ああ、でも危ないな」

「え？」

「このか、無事でどわあああああつ……！」

「ふえつ、お父様！？」

広場の外から中に入ってくる。俺が設置した罠にかかる。狩衣を着た男はものの見事に俺の罠に引っ掛かり、気からぶら下がる結果となった。

「運が良かったな、その罠は一番殺傷能力の低い罠だ」

捕獲用だからどの罠も殺したりは出来ないけどな。一番危険なので、三分の二殺した。

「あ、貴方は……」

「この土地の持ち主だ。私有地なのによくわからない男が侵入してきたのでな、迎撃させてもらった。聞けばこの娘を誘拐した犯人らしいが、父と言うことはお前の娘か？」

「は、はい。近衛詠春です……あの、すみませんが」

「なんだ？」

「色々お話を聞きたいのですが、その前に、おろしてもらえませんか？」

「……まあ、いいか」

危険も無さそうなので、とりあえず客人として家に招待することにした。ちなみに、流石にまずいので刹那の翼は俺の気で隠してある。だが……おそらく、ばれてるだろうな。

そして時は過ぎた

side 彰

このかの父親である近衛詠春を家に招いたが、困ったことにうちには茶菓子だとかの類は一切無い。食料は基本的に自給自足、狩りや木の実を探すのは修行の一環にもなるので丁度良かったのだ。

「なので、悪いがお茶しか出せない」

「別に構いませんよ」

苦笑してるがそう言ってくれると助かる。あと、俺と詠春がリビング（客室なんて創らなかった）で向かい合っている横では、布団に寝かせられた刹那を見守っているこのかがいる。目覚めるのが待ち遠しいらしかった。

「さて、名乗るのがまだだったな。俺は瀬野彰、この森の一角の地主だ。あの子は刹那。誘拐と聞いたが、事情を聞かせてもらいたい」

まあ大体はこのかの魔力を考えれば読み取れるが、聞いた方が確実だしな。

「今回はご迷惑をおかけして申し訳ない。私は、関西呪術協会の長でして…今回の誘拐は、恥ずかしながら協会内の権力争いによるものです」

「……………そうか、権力か。ということは、長の娘であるから誘拐されたということか？」

「はい」

「ならばあの娘の膨大な魔力は無関係、ということになるな」
「!？」

くつりと笑って言うてみれば、詠春は目に見えて警戒したようだった。先ほどの男を俺たちが退けた時点で、多少なりとも裏の関係者なのは分かり切っているとは思うのだがな…それとも、触れてくると思わなかったのかもしれないな。

「何も教えていないんだろう？魔力が垂れ流しだ。あれじゃ、最高級の餌をその辺に無防備に置いていただけだぞ」

「……出来るだけ裏には関わらせたくないんです。あの子には、平和な世界で生きてほしい」
「無理だ」

一人の父親としての願いは理解できる。だが、既にそれは無理というものだ。このかは、先ほどの刹那の戦闘を見ている……男だけでなく、鬼を相手にしたものまで全て、だ。

「このかは既に力の覚醒が起きている。俺と刹那の傷を治した」
「そんなんっ」

「それに……気づいているだろう？刹那がどんな存在なのか」
「……人と魔の子どもですか」

「ご名答。人間と烏族のハーフ、白い翼の禁忌の忌み子」

パチンツと指を鳴らして刹那の翼を隠していた気を四散させる。それに気づいた詠春が慌てたがもう遅い。刹那の背中に現れた白い翼にこのかが驚いたようにこちらを振り向いて、首を傾げてきた。

「彰君、触ってもええの？」
「刹那を起こさないようにそっと、な」

「うん！」

嬉しそうに笑ってこのかが刹那の翼に触れる。俺も後で触ろう、あの感触はやみつきになる。

そして目の前では詠春が呆然とこのかのことを見ていて、俺はその意識を小さなため息を吐き出すことでこちらに戻させた。厳しさの含んだ瞳が俺を睨んでいる。

「なぜ、このかに教えたんですか」

「別に今初めて知ったわけじゃない。刹那は男の出した式神との戦闘で既に翼を使用していた、このかはそれを見たうえで刹那の傍にいて、ああして普通に接している。ただそれだけのことだ」

「ですが、知ってしまえば戻れないことは貴方もご存じでしょう！？」

「そんなに嫌なら記憶を消せ。だが、考える。父親として娘の幸せを願うのは分かるが、あの魔力をどうにかしないことには何の解決にもならない。記憶を消しても、あの子は知らず知らず裏に巻き込まれる……その時に何も知らず、抵抗も出来なかったなら、利用されるだけだ」

「っ……」

俺が言ったことは詠春も分かっていたのだろう、それ以上は何も言っただけだった。だが、父親としてそれを認めたくはないのだろう。原作においてもこのかは気づけば裏の世界に入り込んでいた。まあ、あれは多少なりとも作作的なものがあつた気もするが、時期が早まったに過ぎない。並はずれた力の持ち主が、裏と一切の関わりなく歩めるのは奇跡に等しい確率だ。俺としてはその奇跡を信じるのも馬鹿らしい。

「近衛詠春、俺は今この場で貴方に三つの選択肢を与えたい」

「選択、ですか」

「一つ目は、奇跡に等しい確率の表での平和を願って、今の記憶を消すこと。」

「二つ目は、裏のことを教え、関わらせること」

「……三つめ、というのは？」

「三つ目は、このかの処遇を現在は保留にして今後このか自身に決めさせ……俺と取引すること」

「取引？」

話を読めない、という詠春に俺は笑みを浮かべる。きつとあくどい笑みだろう……俺は目の前のこの男を利用するつもりでいた。

「俺からの要求は、刹那に武器を使った戦い方を教えてやること。」

そちらの要求はご自由に……俺としては、このかの護衛とかを考えていたがな」

「……こちらに有利な取引では無いですか？」

「一見そうだが、よく考えろ。明らかにこちらの要求と釣り合わない場合は……契約の意思無しとみなし、相応の手段に出る」

普段はきちんと抑えている気を放出させ、わずかな殺気とともにぶつけば詠春の顔色が変わった。彼ほどの実力者なら、俺がどれだけの力を有しているか分かるはずだ。本当ならこんな力任せな取引はよくないんだがな。そう思いながら、俺は氣と殺気を引っ込めた。

「で、どの選択肢にする？」

「……私が今この場で決断すると？」

「しなくてもいい。俺が気まぐれにお前に問うただけだ……刹那の友達の今後に関わることだしな」

もし、この場で詠春がこのかを連れて出て行っただとしても、俺は止

めない。そして刹那には悪いが、この場所から引越すつもりだ。向こうが干渉を望むならこちらでもそれに答え、関わることの無いように行動するだけのこと。

「俺は刹那が幸せになれることを第一に考える。このかの今後は、刹那にとっても大事なことになると思うから……出来れば、この場で決めてもらいたい」

「……分かりました」

詠春が息を吸い、ゆっくりと吐き出した。

「瀬野彰さん、貴方と取引しましょう。このかの今後は、このかが裏に関わる覚悟を持って来た時、全てを話すことで決めさせます」

「了解した。では、取引内容を決めよう。こちらの要求は先ほど言った通り、刹那に武器を使用した戦い方を教えること」

「では、私の方からは……このかの護衛と、このかが裏に関わることを望んだ時に、気の使い方を教えてあげてもらいたい」

「……俺が教えられるのは、気を操ることだけ。呪符や魔法の類は教えられない」

「構いません。そちらは、私たちのほうで教えます」

「なら、取引成立だ」

思ったよりも詠春は話の分かる人だった。そして、俺たちの話が終わってすぐに刹那が目覚まし、このかが抱き付いたのを詠春が嬉しそくにしながらも複雑そうに見ていた。

「友達が出来たのは嬉しいんですが……」

「……言い忘れたが、ハーフだの禁忌だので文句を言ったら、ぶち殺す」

「言いませんよ……部下たちには、言明しておきます」

「そうしとけ」

半殺しで済めば、いいよな？

さて、それからの数年間の生活を簡単に説明するでしょう。

まず刹那が神鳴流の道場に通うこととなった。武器の使い方を覚える為に詠春が提示してきたのだが、まあ問題無いだろう。ただ俺との修行で、刀を使えるようになった刹那に合わせて俺も武器を使うようになったのは良いが……神鳴流と我流が混ざってるな。まあ、強いに変わらないから良いだろう。

そして俺だが、このかの護衛のために総本山に出入りするようになった、まあこのかの実家だしな。刹那が道場にいるときはそこでこのかの相手をしてながら刹那の帰りを待ち、帰って来た刹那とこのかの三人で遊んでから家に戻り刹那の修行と勉強。刹那との時間が減ったのが寂しいが仕方ない、数年の辛抱だしな。護衛とは言っても俺は四六時中一緒にいられないので（流石に総本山に住むわけにもいかない）このかには勾玉を持たせてある。俺の創り出した物で、俺とは気の糸で繋がっているからそれを通して何かあった時はすぐに察知できる。実際、夜中に誘拐しようとした輩がいたが、総本山を出る前にぶっ潰した。

このかに関しては……裏に関わることが決まった。死と隣り合わせである危険な世界のことは言ったが、それでも曲げなかった。刹那の存在も大いに影響していたみたいだ。刹那は、存在自体が言っちゃ悪いが半分は裏の世界の住人だしな。だから途中から、俺はこのかに気と魔力の扱い方を教えたりもした。陰陽術の方は詠春たちに任せたがな。

以上が俺と刹那の数年間。原作では確かこのかが京都を離れるのって小学生くらいだったはずだが、随分と延びだ。このかが麻帆良に

行ったのは小学五年生の時だ。そして、このかが麻帆良に行くと同時に俺の護衛の任は一旦解かれた……刹那が麻帆良に行ったら、また護衛に就くことになるがな。

「さて、と。そろそろ行くか、刹那」

「うん、彰」

このかが麻帆良に行ってから二年が経った。俺と刹那は今日、京都を出る。

「このかに会うのも二年ぶりか。楽しみだな」

「手紙では元気そうだったけど……早く会いたいな」

「駅まで迎えに来るんだろ？すぐに会えるさ……それより、本当に良いのか？」

「何がだ？」

「俺は好きだから良いけど、髪と目、望むなら隠せるぞ？」

「……良いんだ。彰が好きだと言ってくれるなら、他が何を言おうと気にしない」

「そうか。よし、なら行くでしょうか……麻帆良へ」

転生してからもうすぐ十年が経とうとしている。二度目の人生、これからは波乱に満ちているのかも……しれない。

吸血鬼との取引

side このか

うちは駅で人を待ってた。明後日は麻帆良学園中等部の入学式、一人で麻帆良に来てからの二年間、ずっとこの日を待ってたんや。

「あー!!」

駅から流れてくるたくさんの人の中に、うちの待ち人の姿を見つけた。黒い髪の背の高い男の人と、白い髪で赤い目の女の子。やっと会えた嬉しさに、うちは走り出した。

「せっちゃん、彰君!!」

「このちゃん!」

せっちゃんと彰君が麻帆良に来た。これからは二人も麻帆良で暮らすんやっ。せっちゃんに抱きついて再会の喜びに浸かってたうちに、彰君が声をかけてきた。

「久しぶりだな、このか。元気そうよかったよ」

「彰君も元気そうやね。せっちゃんのこと、泣かせたりしてへんやろな?」

「まさか。俺が刹那を泣かせたりするわけないだろ」

「それでこそ彰君や」

相変わらずせっちゃん大好きなのは変わらんなあ。うちだってせっ

ちゃん大好きなんやけど、彰君のは色々と超越しとるからな、こればかりはうちは二番や。

不意にせつちゃんのつけてる髪飾りに気づいた。せつちゃんは髪をおろしていて、前髪をピンで止めてたんやけど、そのピンが重要や。

「うちがあげたの、着けてくれたんやなあ」

「うん…変、かな？」

「そんなわけないやん！！めっちゃかわいいわ、嬉しいなあ」

羽を模したピンはシンプルやけど、絶対にせつちゃんに似合う思うてうちが送ったんや。かわいい言うたら照れてるせつちゃんはますかわい……なのに自覚してないのが問題やな。彰君がいるから心配は無いと思うけど、やっぱり不安や。後でその辺はきちんと彰君と話とかないと…。

「このか、そろそろ学園長のところに連れて行ってもらえるか？」

「あ、せやったな。でも、転入するのにわざわざお爺ちゃんに会う必要があるん？」

「いや、そつちはついでだな。裏の方で少し話をしないとならないんだ」

「そうなんかあ……にしても、二人とも随分と強うなったみたいやな。凄いわあ」

「……分かるの？」

「なんとなくやけどなあ。結界とかいっぱい勉強しとるから、気や魔力の流れには結構鋭いんよ？」

うちが主に修行しとるのは、治癒と結界とかの防御に関する術や。攻撃も使えるけど、今はこの二つを中心に修行中や。

「でも、殆ど独学に近いから不安やけどなあ」

「……悪いな。俺が変な忠告をしたばかりに」

「別にええんよ。やって、彰君の言うとおりやもの」

うちが一人で麻帆良に行くの、二人とも本当は凄い反対やったんやて。お爺ちゃんはその安全のためとか言うて結構強引に話を纏めてしもたらしくて、お父様も凄い謝ってたえ。それでな、彰君に言われて、うちは一般人のふりをする事になったんよ。

やっぱり関西の長の娘が魔法使いのところに行くのは凄く反対されるし、それだけじゃなくて魔法まで誰かに習ったりしたら余計に煽ってしまふから、なるべく裏には関わらんようにって。

「でもな、おかげで人払いと魔力遮断の結界は完璧になったえ」

「魔力遮断…？」

「修行のときに見つからんように、人払いの他に、魔力が漏れないような結界を使ったんよ。流す魔力の量が難しかったんやけど、ちゃんと使えるえ」

「流石やなあ、このちゃん」

「えへへ」

せつちゃんに言われると照れてまうなあ。これからは二人もおるし、もつと色々勉強せなあかな！

side 彰

「瀬野彰です。桜咲刹那の保護者にあたります……えっと、失礼ですが学園長でよろしいですか？」

「さよう。わしが学園長じゃが……どこを見ておる」

「い、いいえ、どこも」

実物見るとヤベエ、なんだこの後頭部、中身に何が詰まってるんだ？
って、そうじゃなくて今は話を進めないといけないよな……

「……手続きの方は既に済んでいますし、帰っても？」

「いや、まだ話があるんじゃないよ……このか、戻ってなさい」

「はいな。せつちゃん、また後でな」

「うん、このちゃん」

このかを追い出したか、なら次は裏に関することだろうな……なぜ、俺が残る？

「学園長、もう話すことは無いのでは？」

「いやそれがあるんじゃないよ。瀬野君が持っているそれは、マジックアイ
テム具じゃない？」

「……流石に隠せないか。で、だとしたらなんだ？ 追い出すのか？」

爺さんの言った通り、俺の身につけているアクセは殆どが俺の創り出した魔法道具だ。創り方は簡単、事細かに機能と見た目を想像するだけ。簡単とは言ったが、この想像するのが難しくて、集中力があるもの凄く必要になる。それに、何かしら使用条件を付けた方がより良い物が創れると判明したので、機能と条件のバランスを考えなければならぬ。流石に、無機物とはいえ都合よく創れはしないということがある。考えるのが面白いから、まあそれは良いとして、問題は目の前の爺さんだな。

「ふおつふおつふお、そんなことはせんよ。ただ、瀬野君と刹那君にお願いがあつての」

「学園の警備とかそういったものは引き受けませんよ」

「ふおつ！？」

やっぱりそのつもりだったか……思っただが、やはり生徒にそういったことをさせるのは教育上良くないんじゃないだろうか？いや、まあ刹那はいくつも修羅場をくぐってきているが……でもなあ。

「なぜじゃ？」

「他にも魔法を使える大人はいるでしょう？なのにわざわざ生徒に警備をさせる必要は無いはずです」

「しかし、彼らも忙しくてのお……広大な土地の全てを守るのはちと厳しいんじゃない？」

「だからといって、勉強が本分である学生に夜更かしをさせるのはどうかと思いますよ？それに、成長期の体に睡眠をとらせないなんて言語道断。俺は刹那の保護者です、断固として拒否させていただきます」

そう、俺が最も気にしているのがここだ。警備ということは夜遅くまで起きなくてはいけない、それ即ち刹那の健康に影響を及ぼす。多少の夜更かしなら目を瞑るが、それが毎日だなんて……隈なんて出来た日には俺は学園長を消さなくてはならない。それに肌が荒れたり髪が傷む可能性だってある、女性の夜更かしは美貌にも影響するらしいからな、せつかく綺麗に育ってるんだ誰がそんなことを許すか。

「な、ならば彰君だけでも参加してもらえんかの……？出来れば二人ともにやはりお願いしたいんじゃないが……」

「俺は既に麻帆良にてお店を構えると決まっています、店舗も用意してあります。なので、夜遅くまで働く仕事に支障をきたすので拒否します」

「いつの間に！？」

「半月ほど前に買い取ったはずですが？話がこれで終了なら俺たち

は帰らせてもらいます」

「ま、待ちなさいっ」

「嫌です。さ、刹那。ちゃんと挨拶して帰ろうなー」

「はい」

扉の前に立つて満面の笑顔。これくらいのサービスはしてやるさ。

「失礼しました、学園長」

「失礼しました」

隣できちんと頭を下げた刹那、うん、満点だな。挨拶は大事って教えまくって良かった。

さて、これで半ば強制終了させた学園長イベントは放っておくとして……麻帆良に来たら、会っておきたい奴がいたんだよなあ。

「あ、せっちゃん、彰君。お話終わったん？」

廊下でこのかが俺たちのことを待っていた。とりあえず話は終わったことを伝え、今後の予定を経てなくてはならないのだが、どうしたものか。

「彰、お店には行かないのか？」

「それなんだが…先に、会っておきたい奴がいるんだ。俺の個人的な用事だけだな」

「それって誰や？」

「歩きながら話すよ……あまり、人に聞かれたくないからな」

さて、それじゃ行くとするか。エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルのところに。

side エヴァンジェリン

……… 退屈だ。登校地獄の呪いのせいで繰り返される中学生にもうんざりだ。しかもなんだ、また一年生からやり直したなんてふざけているにも程があるだろ。

「タイクツソウダナ、ゴシユジン」

「ん、ああ」

「オレモヒマダゼ」

「そつだろつな……… ん、いや待て」

なんだ、誰か来るな。わざわざ魔力を垂れ流したままで私のところに向かつてくるとは……… どういうつもりだ？

「退屈しのぎにはなるか」

扉の前に気配が二つ……… 三つ？一つが分からないな。ノックがあったが、開けるのも面倒だな……… 勝手に入ってくる礼儀知らずなら、追い出すか。

「開けてくれ、エヴァンジェリン。《闇の福音》」

……… これは本当に、退屈しないで済みそうだ。

side 彰

刹那とこのかを連れて、俺はエヴァンジェリンの住むログハウスに
来た。道順は分からなかったが、呪いの魔力を辿ってみれば案外簡
単に着くものだ。

ここまで来る際、このかには俺の魔法道具を着けさせた。『霧の腕
輪』、効果は装着したものの魔力、気配全てを強制的に抑え込み、
他者に存在を悟らせなくする。人間の目は誤魔化せるが機械には通
じない、なので同時に『幻影のロープ』を渡した。ぶっちゃけると
効果は透明マントだ。こっちは姿しか消せないが、二つを組み合わせ
せれば大概は誤魔化せる。流石に、このかがエヴァンジェリンと接
触するのは拙いからな。

そして今は家主が開けてくれるのを待っているんだが…

「なんだ、貴様らは」

「初めましてエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。俺は瀬野
彰、麻帆良で店を構える予定のものだが、話があつて来た」

「……良いだろう。だが、その前にそこにいるもう一人を見せる。
ここまで来て微かにしか分かんとはな…」

「…流石、闇の福音だな。彼女の姿を知られると拙いので、家に入
つてからでいいか？」

「ほお……面白いな。ならばさっさと入れ」

接触は出来た、とりあえず家にお邪魔してこのかにはロープだけを
外してもらった。気配から悟られてはならないので、腕輪はそのま
まだ。

「近衛の孫が何の用だ？それにその娘……混じり者だな」

「……やっぱり、この髪だと分かりますか？」

言い当てられた刹那が少し落ち込んだ様子で聞く。確かに白い髪で
赤い目は目立つが……原因はそれじゃない。エヴァンジェリンだか

ら分かるようなものだ。

「魔の匂いがしたからな。見た目なんかで判断するか」

「刹那、彼女は真祖の吸血鬼なんだよ。だから分かったただけだ」

「ふえー、吸血鬼なんかあ」

おお、さすがこのかは動じないな、天然の成せる技か。逆に刹那は少し驚いているようだが、すぐに納得した風だった、大方、エヴァンジェリンの気でも探ったのだろう。純粹な人間と純粹な魔族の気は違うからな。

とりあえず、今は二人は置いて俺の用事をすませることとしよう。

「早速だが、本題に入りたいと思うんだが…いいか？」

「ああ。いったい何の用があつてここに来た？」

「お前の知識をもらいたい。魔法に関する知識で、主に物を創る知識」

「……なに？」

さつきも説明してあるが、俺の物を創る力は万能じゃない。創造する物の性能が上がるほど複雑で創りづらくなり、残念なことに俺には魔法道具に関する知識が殆ど無かった。

そもそも、俺が魔法を使うよりも魔法道具を創ることに重きを置いたのには理由がある。魔法書を借りて（盗んで）魔法を覚えてみたが、いまいち威力に欠けてしまうのだ。最強クラスの戦闘能力、そして無限の魔力と気の代償かもしれない。俺は詠唱による魔法の才能が無かった。

ならば魔力と気さえあれば使用できる強力な魔法道具を創ることにしたのだが、ある一定の物より上は不安定な物しか出来なかった。それは俺の知識不足が原因であつた。

治癒魔法においても、重度の怪我を治すするには人体の知識が必要であるように、高度な魔法道具を創るためにはそれに関する知識が必要なのだ。

「それを私に聞いてくる理由は何だ？その辺の本にもそれくらいの知識は載っているだろう」

「俺が知りたいのは、その創り方だ。本には種類や効果が書いているだけで、その原理や製造方法までは載っていない。エヴァンジェリンなら知っていると思うのだが、俺の見間違いか？」

「……馬鹿にするなよ小僧。だが、それをお前に教えたとして私に何の利益がある？一方的な取引は成立しないぞ」

「もちろん、こちらもお金は払う……その呪いの解除でどうだ？」

「解除、だと？」

驚いているな、まあ解けないと思っていたものを解けると言われたのだから、当然か。

俺は予め創造しておいた物を目の前のテーブルに出現させた。一つは『顕現の粉』、もう一つが『断ち切りの刃』。二つ揃って初めて解呪が可能となる魔法道具だ。

「こっちの瓶に入った粉は、対象者の呪いに込められた魔力を上回る魔力を込めて振りかけることで、その呪いを疑似的に目に見える形で顕現させる。そして、この刃はそうして顕現させた呪いを断ち切ることができる。これによって呪いの解除が可能となるわけだが……これでは、取引にならないか？」

「……馬鹿な。あの男の魔力を、お前が上回るとでも言うつもりか？」

「出来る自信はある。そうだな……このか」

「なんや？」

「魔力遮断の結界は、どれくらい遮断できる？」

「……んー、彰君の魔力を全部遮断は出来へんけど、うちの魔力やったら半分ちよつとくらい遮断出来るえ」

「そうか…よし、その結界をこの部屋に張ってくれるか？加減はする」

「わかったえ」

このかが数枚の呪符を取り出し、部屋の四隅に張り付ける。そして魔力の媒介である扇子を取り出しくりと一回転すると、その足元が光りだした。光が部屋全体を包み、やがてゆっくりと収縮していく。見た目に変わりはないが、気配で結界が張られたのが分かった。

「出来たえ」

「ありがとな。それじゃ…」

俺は『顕現の粉』に手を当て魔力を注ぎ込む。魔力が膨大になるほど身から溢れる魔力も増えるが、このかに張ってもらった結界のおかげでどうにかかなりそうだ。

本来なら出現させる前に魔力を込めておくこともできるが、エヴァンジェリンに信じてもらう為に敢えてこの方法をとった。思った通り、エヴァンジェリンの表情は俺の注ぎ込む魔力の量に驚いている。そして数秒後、俺は手を離れた。

「これで良い。後はエヴァンジェリンに粉をかけて刃で断ち切るだけなんだが…取引するか？」

「……くくつ、面白い、面白いぞ。良いだろう、呪いを解けたなら私の知識をお前に与えてやる」

「では、行くぞ」

小瓶の蓋を開けて粉をエヴァンジェリンの少し頭上へ。粉はそのままエヴァンジェリンに降りかかるのではなく、その背後を漂い呪い

を顕現させる。黒い鎖と何やら教科書や鉛筆といった塊が現れ、俺はそれを見た瞬間思わず

「ぶっ」

噴き出した。いや、だってさ、黒い鎖は分かる。エヴァンジェリンの力を抑えてる物だ。だが、だがな、教科書や鉛筆、ノートに筆箱って…そんなものの塊だぞ？シールド過ぎる。ヤベエウケル。

それは二人も同じようで、刹那が口元を押えてくすくすと笑っており、このかはおもろいなあと楽しそうだ。

「っええい、早くその刃でこいつを切れ!!」

「はいはいっ…くくっ」

俺はその二つに向かって刃を振りおろした。スパツと綺麗に両断されたそれは四散し、途端に抑えられていたエヴァンジェリンの魔力が溢れ出る。このかの結界があつてよかった、何も無かつたら学園長に知られた可能性があるからな。

「ふっ、ふははははは!!!!いいぞ、これで私は自由だ!!!!礼を言うぞ小僧!!」

「礼は良いから取引を守れよ」

「ん?ああ、もちろんだ。ははっ、清々しい気分だ。あの男が死んだ今、苛立ちしか沸かなかったが…」

「あ、それなんだがエヴァンジェリン、ナギィスプリングフィールドは生きているぞ」

「……………なに?」

「二年後にはナギの息子がこの学園に来る筈だ。そいつはナギの杖を持っているぞ、たしかな」

「…なぜ貴様がそれを知っている」

「今それを言うつもりは無い。俺の正体を知っているのはこの世で俺だけだ」

「……その娘たちも知らないのか？」

「知りませんよ。彰が普通の人間じゃないことしか」

「せやなあ。彰君、何も言わんかったしうちらも聞かんかったし」

そう、実は俺の正体は刹那たちも知らない。まあ、転生者だなんて早々、言えたものじゃないが…そのうち、言うつもりだ。それまではただ、俺が普通の人間と違うということしか知らせない。二人もそれで良いみたいだしな。

「……くっくっ、ますます面白い。気にいったぞ」

「それはどうも」

「知識が欲しい時はいつでも来い。せつかくだ、その息子とやらを拝むまではまだ学園にいてやる」

「分かった。ああ、あと言った通り俺は麻帆良で店をやるからな、用事があるときはそこに来てくれ」

「店？なんの店だ」

「雑貨屋の予定。店舗兼家だな…そのうち、ここと繋げるゲートでも創るか」

「創れるのか？」

「一応、考えてはある。無理だったらエヴァンジェリンから知識を貰って創る」

「…まあ、好きにすればいいさ。あと、私のことはエヴァと呼ぶと良い。お前にしろ、その娘二人にしろ、くっく、退屈しのぎになる」
「……………好意として受け取っておくよ」

とりあえず、これで目的は達成だな。流石にこのかの師匠にするのは拙いが、戦闘に関しては刹那の師匠にしても良いかもな。今度、別で交渉してみるか。

吸血鬼との取引（後書き）

どうにか急ピッチで7話まで来ました。展開雑でごめんなさい。でもこの話はどうなんだろうな…アンチになるのか？アンチ読むのは好きだけど書くのは難しそうですよね。というより、刹那が殆ど空気で申し訳ない…うう。

表と裏の店

side 刹那

時間は過ぎて、私と彰が麻帆良に来てから五日、入学式から三日が経ちました。最初に、この五日間にあったことをお話ししましょう。まず、彰がお店を持ちました。エヴァンジェリンさんと彰の取引が終わった後、私たち三人は彰が買い取ったという店舗を見に行きました。場所は、中心地から少し離れた場所です。近くにクレープ屋さんがありました。

お店の中はまだガランとしていて何もありませんでしたが、それについては彰が家具から商品まで全てその場で創り出して揃えていました。普通の商品なので、魔力の糸は切つてあるそうです。一緒に看板まで創ってしまったて、お店の名前は『White Wing』だそうです……なんだか、恥ずかしかったです。

開店は入学式と同時だそうで、次の日はこのちゃんの提案で私と彰の服を買うことになりました。私は動きやすければそれで良いので遠慮したんですが……このちゃんだけじゃなくて、彰まで駄目だった。彰だつて服のこと気にしたりしないくせに……。

連れまわされてる間は、もうこのちゃんの独壇場でした。私と彰はこのちゃんの着せ替え人形で、その日だけで一年分の服を買わされた気分です。二人とも、私の私服が増えたことに満足そうだったので文句は言いませんけど……ヒラヒラは勘弁してください。

入学してからは、驚いたことにエヴァンジェリンさんが同じクラスでした。彼女は絡繰さんとよく行動しているようです。このちゃんとも同じクラスだし、安心しました。

あと、同じクラスでルームメイトの龍宮真名さんが夜に出かけてい

きます。部屋でも堂々と銃の整備をしていて…モデルガンって嘘ですよね？ちなみに、私の武器はありません。いや、いつでも出せるようにはしてあるんですけど、普段は彰がくれた魔法道具『ブラックホール』にしまっておりま。一応、神鳴流の使い手ではありませんが、それ以外は殆ど一般人と同じということにしておくために、あまり目立たないようにしています。まあ、説明するのはこれくらいで良いですね。

学校の授業にも慣れてきて、放課後になりました。私とこのちゃんは彰のお店に来ています。

「刹那、六番の籠から補充しておいてくれ」

「はい」

「彰君、補充終わったえ」

「三番の方も補充頼む」

「了解や」

彰のお店は大盛況で、学校が終わると学生たちが流れ込んでくる。私とこのちゃんはお手伝いということで、無くなった商品の在庫を補充して回っていた。

「彰、二番の在庫が無くなりそうです」

「今日はそれつきりだな。店が終わったら補充しておく」

裏の倉庫には番号の振られた籠があつて、私とこのちゃんは彰に指示された籠の中身を表に補充していく。在庫は前日のうちに彰が補充しておくんだけど、いつも殆どの商品が売れてしまうので補充の量が多いと文句を言っていた。それだけ人気があるってことで、彰のお店は学校から少し遠いのについて大賑わいだった。

「あ、このかと…桜咲さん？」

「明日菜やー、来てくれたん？」

「偶然ね。いっつも学校終わったらすぐにどっか行くと思ってたら、バイトでもしてたの？」

「うっん。うちとせっちゃん、ここのお手伝いさんや」

出来るだけの補充が終わって休んでいたところに、神楽坂さんがやって来た。私はまだ話したことが無かったけれど、そういえばこのちゃんはルームメイトだったっけ。

「桜咲」

「ん……龍宮？」

このちゃんが神楽坂さんと話していると、私も声をかけられた。予想外にも龍宮が後ろに立っていて、少し驚いてしまった。彰のお店はどちらかといえば女性受けしそうな物が多く、彼女がこういったお店に来るタイプだとは思わなかったのだ……失礼ながら。

「意外だな、何か買いに来たのか？」

「少し覗いただけだ。お前の姿があったから驚いたぞ…バイトでもしているのか？」

「いや、ただの手伝いだよ。せっかくだ、何か買って行かないか？」
「そうだな……」

龍宮は店内を見回して、アクセサリを置いてある棚に手を伸ばした。その棚の商品は『幸運のアクセサリ』という名目で売られている。といっても誕生石を指輪やブレスレットにただで、実際に効果があるわけじゃない……はずだ。龍宮はそこからブレスレットを手を取っていた。

「これにしようかな」

「毎度どうも、今ならレジも空いてるな」

丁度、お客もひと段落したのか彰がレジでだらけている。相当、疲れているらしい。だが龍宮が近づくとすぐに姿勢を正して笑顔を浮かべるのだから、商売魂とでもいうのだろうか、凄いものだ。

「ありがとうございます……ん？」

「……なにか？」

「いや、ちよつと待ってて、すぐ包むから……はい、おまけも入れておいたよ。今後ともよろしくね」

おまけ？いつもはそんな物入れないのに、どうしたんだろうか。チラリと視線をやると一瞬だけ、彰があくどく笑った。彼は何か企んだりしているところといった笑みをよく浮かべる…これは、龍宮に何か仕掛けたな。可笑しな物じゃ無いと思いたい。

side 彰

午後七時、店を閉める。商品の在庫が無くなり次第で店を閉めるので、昨日より一時間早く閉めることが出来た。あまり遅くなると、寮の門限がある刹那との時間が少なくなって困る…夜中に抜け出してくるから、あまり寂しくは無いけどな。

二階の住居に戻った俺はこのかが作って行ってくれた夕飯を刹那と二人で食べ終え、まったりとした時間を過ごしていた。このかは夕飯の準備があるので、いつも先に帰っている。今度の休みに泊まりに来るそうだ。

もうすぐ九時になりそうな頃、眠そうな刹那の頭を撫でながら至福に浸かっていた俺は、店の前にやって来た客に刹那を起こした。半

分夢の中だった刹那が目を擦って首を傾げてくる姿に、俺は昇天寸前だ。

「お客さん、ですか？」

「裏のな……今日、刹那と一緒にいた黒髪の生徒がいただろ？」

「龍宮？」

「ああ。たぶん、俺があげた『おまけ』について聞きに來たんだろ
うな」

俺が店舗に下りると、刹那が警戒した様子で着いてくる。僅かだが殺気が漏れてるしな、仕方ないだろう。俺は扉の鍵を開けると、客人を迎え入れようとした。

「っ！！」

突き出された銃口が俺に照準を定めると同時に、刹那が銃を持つ右手に下から掌底を当て照準をずらす。狙いを変えた左手の銃が刹那を追うと、それを足で蹴り付け客人の後ろに回り込んだ。この間、十秒と経っていない。俺は完璧な刹那の動きに拍手を送り、捕えられた客人を見下ろした。

「いらっしやい、龍宮真名。さっきのは一体、何の真似だ？」

「少し試させてもらおうと思ったんだが……見事だよ、桜咲。私の完敗だ」

「……どうするんです、彰？」

「離していいぞ。試されるのは不本意だけど、他意は無さそうだ」

ゆっくりと刹那が龍宮から身を離し、俺の横に立つ。既に銃は仕舞われていて、彼女自身これ以上戦闘するつもりは無いようだ。

俺は改めて客人である龍宮を店内に招いた。

「で、こんな夜に何の用だ？」

「貴方がくれたこのおまけについて聞きたくてね。これは一体、なんだ？」

「魔法道具『魔力の開門』、殺傷能力は無いが、被弾者に寄生し一定時間、相手の魔力を体外に流出させる。学園長くらいになると無理だが、その辺の魔法使いに使ってみる。一発で潰せるぞ」

「……本当かい？」

「なんならお前の体で試してみるか？」

龍宮に向けた手の中に銃を出現させる、もちろん『魔力の開門』を装填した状態でだ。引き金を引けば、彼女は身を持ってこの威力を知ることになる。

「……いいや、遠慮しておくよ。弾に込められた魔力からそれが本当なのは分かる」

「それは何より。で、俺がどうしてこれを渡したのか分かるか？」

銃を魔法道具『ブラックホール』で異空間に仕舞う。これは刹那にも渡してある物で、形状はブレスレット。魔力を込めることで異空間とのゲートを創り、そこに物を仕舞える。出したいときは、その出したい物を思い浮かべながら魔力を込めれば良いだけのお手軽使用だ。

「裏に関するお客、か？」

「ご明察。龍宮向けに魔法道具を用意してある……良かったら、それを買わないか？」

「対価は現金でいいのかな？」

「残念ながらNoだ。俺が欲しい対価は……情報と行動」

「……やはり、そう易々と買えたりしないか」

「金は表の商売で十分だからな。俺が欲しい情報は、具体的には学園内の裏の情報。学園長の企みや不審な動きは高値で取引する。行動は……俺の方から依頼として伝え、その報酬で渡す。どうだ？」
「……………悪くは無い、な。良いよ、お客になるっ」
「それはありがたい…これからご贔屓に」

とりあえず話が纏まったので、俺としては十分な成果だ。学園長の『お願い』を断ったら、学園内の裏に関わる情報は殆ど流れてこないからな。原作は知っていても、俺が存在する時点でこの世界はイレギュラーに満ちている、情報を集めるに越したことは無い。それから、今現在の龍宮の警備の状況について話を聞かせてもらった。断りはしたが、正解だったらしい…警備体制がずさんなのだ。

「私は依頼ということを受けているが…流石に、一人で任されるのは厳しいよ」

「敵はどれくらいなんだ？」

「多い時で八十から…百くらいか？術者を特定しようにも、時間がかかってしまう」

「…学園長に進言したらどうだ？」

「したさ。だが、報酬を増やすからこのままということが終わってしまったよ」

「それはまた…」

「そうだ、二人とも良かったら私と組まないか？報酬も増えたし、私からの依頼ということだ」

「夜遅いだろ？刹那の健康にも影響するから駄目だ」

俺にとって第一に考えるべきは刹那のことであり、警備は夜更かしに繋がるから容認できない。龍宮は切実だったけど、俺としてもこれは切実な問題だ。

「……彰」

そんな押し問答をしている時だ。刹那が、何やら考え込んだ様子で俺を見上げている。

「どうした、刹那」

「この前から話してる、新しい修行についてなんだが……」

「多人数に対する修行と、共闘のことか？早いところ始めたいが、こればかりは相手がな……」

そう、そろそろ刹那の修行に新しいのを追加しようと思っていたんだが、これが困ったことに人手が足りない。今までの修行が俺を相手にした一対一だったのに対して、新しいのは一対多の修行と、二対多の共闘。俺は無機物は創れても生物は創れないので、魔法道具でどうにか代用できないか考えていた。

だが、いまいいのが浮かばない。複数の敵を用意することさえ出来れば、どうにかなるのだが……あれ？

「龍宮、その敵は大体、何時くらいに現れるんだ？」

「……ばらばらだが、十二時から二時くらいが一番多い」

「……彰」

「……確かに、条件としてはあってるな。多数の敵、共闘する仲間。それも銃の使い手という後衛だ。バランスも良い」

刹那の言いたいことはすぐに分かった。この警備の仕事、刹那の修行に丁度良い。

「別に私は数日くらい寝なくても問題ない。それよりも、早く修行を……」

「駄目だ。絶対駄目。夜はきちんと寝ること。夜更かしは体に悪い」

「だがっ」

「修行には丁度良いが、あまり遅くなつては体に支障が出る。それじゃ伸びるものも伸びないぞ」

「……なら、二時までに終わらせる」

お？

「気配を読めば、相手がどこにいるのか分かる。二時までに全ての敵を倒し、術者を捕える。これなら？」

「…追加条件、修行を行うのは龍宮から依頼があつた場合のみ。週に二回を超える場合は俺を通してから」

「……良いか、龍宮」

「あ、ああ……助かるよ、桜咲」

修行にこぎつけた刹那は満足そうに笑っている。何気に刹那は修行が好きだ、というより強くなることに貪欲だ。俺もそうだが、そんな俺の傍にいた影響かもしれない。

ともかく、これで刹那の修行が可能になったわけだ。まあ、塵も積もれば山となる、雑魚相手でも複数と戦うのはいい刺激になるだろう。

………学園側にばれないように、姿を隠せる魔法道具を創るべきだな。どんなのにするか…。

表と裏の店（後書き）

一度消してしまうという馬鹿をやって絶望しました。そのせいで少し短くなった：内容はそんな変わってないですけどね。あーあ、くそつ。

このかの決意、全てを極める

side other

早朝四時、彰はベッドから身を起こした。いつもこの時間に起き、彼は動きやすいズボンとシャツを着ると、いくつかの魔法道具を装着して店を出た。

向かうのは外れにある森、エヴァンジェリンの家の近くだ。既に刹那とこのかの姿があり、刹那は刀を、このかは呪符を手にしていた。早朝から、彰たち三人は毎日この場所で修行を行っている。

「おはよう、刹那、このか」

「おはようございます、彰」

「おはようさん、彰君」

「全員いるし、早速だが今日の修行を始めよう。このか、魔力遮断と人払いを頼む」

「はいな」

扇子を取り出したこのかがそれを構えて気を集中させる。すると、もう片方の手に持っていた呪符が宙に浮き四方の木に張り付いた。人払いのような呪符だ。それと同時にこのかの気がこの一角を覆っていく。人払いと魔力遮断、種類の違う結界を同時に構築したのだ。

「出来たえ」

「よし……それじゃ、先にこのかの修行内容を決めてしまおう。この前言っていた結界は出来そうか？」

「風刃の界やろ？あれな、お札が無いと威力が全然なんや。でも、

敵さんにお札を張り付けるのも難しいし」

「陰陽術の結界は、守りが中心だからな。攻撃には式神を使うから…結界を攻撃に転用するのは良いと思うんだけどな」

「せやろ？魔法やったら攻撃も出来るけどなあ」

そもそも、陰陽術に使う気と、魔法に使う魔力には一つの決定的違いがある。属性だ。

気には属性が無く、呪符の種類によって多種多様の技を使用できる。しかし魔力には属性があり、その人に合った属性と同じ魔法でなければ威力が大きく変わる。今回のこのかが習得しようとしている『風刃の界』とは、特定の結界内にかまいたちを発生させるものだ。しかし陰陽術に使用する気にはそもそも風の属性が無く、また呪符が無いと強固な結界が張れないために不安定になってしまう。これらの要因から習得が進まないのだ。

「たしかに、魔法なら攻撃の手段が豊富だが…どうするか」

「彰、一つ思っただが…」

「ん？」

頭を悩ませる二人に、刹那が首を傾げつつ問いかける。

「このちゃんの場合、気よりも魔力の方が膨大だろう？」

「ああ。このかが一度に蓄積できる魔力量は通常の魔法使いを凌駕しているが……気に関しては、一般的な陰陽師よりも少し多いくらいだ。こればかりは、潜在的なものだから俺にも弄りようが無いな」

「うん、それは分かっているんだが……これは、流石に拙いのは分かっているんだがな」

言いづらそうに刹那は言葉を切り、僅かに躊躇しつつも口を開いた。

「このちゃんに、魔法を教えた方が良いと思うんだ」

「……それは俺も思う。だが、このかが長の娘であるいじょう、それは難しいだろうな」

「でも、魔力は陰陽術ではあまり力を発揮出来ない。治療にだけ魔力を使うよりも、攻撃にも魔力を使った方が良いんじゃないか？」

「それはそうだが……」

彰にもそれはよく分かっていた。だが、このかの境遇を考えるとそれが難しいのも事実。言ってみた刹那もまた、それに対する解決策が無い為に口を閉ざしてしまっしかなかった。

side このか

せつちゃんと彰君の言っていることは、うちも良く分かった。

うちが今使うことが出来るのは、呪符を使った護りの結界と、攻撃用の呪符で炎や水を召喚すること。あと、魔力を使って怪我を治すことだけや。麻帆良での二年間は治療と結界ばかりを独学で頑張ってたけど、これからはそうも言ってられへん。せつちゃんが夜の修行を始めた聞いたら、うちももつと強くならなきゃいけないんや。そして、そのためにうちも、どんなに難しくても大変な道でも、選ばなきゃならないはずや。

「……うちが、説得する」

「このちゃん？」

「うちがお父様や偉い人たちを説得する。魔法を学ばせてくださいって、お願いする」

学ぶためには絶対に許可が必要や。一応はまだ友好関係ではあるけど、西には西の考え方があるし特有の技術がある。うちはその長の娘……自分の立場は理解してるつもりや。言ったうちに彰が難しい顔をするのも、せつちゃんが困ったように眉を下げるのも仕方ないでもうちはこの意思を変えたくない。

「西の陰陽術、東の魔法、表面上は取り繕えても相容れないものやと思う。でもな、うちは強くなりたいんよ。せつちゃんや彰君の足手まといにならないくらい、自分の意思を自分で貫けるくらい、強くなりたい」

「……そのためなら茨道を進むのか？魔法を習うから陰陽術を捨てる、なんてことが許されないのは分かるだろ？」

「捨てる気は無い。うちにはどっちも必要や。結界は魔法よりも陰陽術の方がええ、でも攻撃にはうちの魔力を使った方がええ。陰陽術も魔法も、うちはどちらも極めたい。どちらも使えるようになってみせる」

「このちゃん……」

せつちゃんは凄く驚いた顔をしてた。でも、それからすぐに笑って、うちの手をぎゅって握ってくれる。

「このちゃんがそう決めたなら、私も出来る限りのことはする。でも、忘れないで。私も彰も、このちゃんの味方だから……一人でも頑張らないで」

「その通りだな。俺はこのかがそう決めたなら、止めはしない。むしろ今の決意を聞いたなら……手伝わないわけがないだろ」

「せつちゃん、彰君……ありがとうな」

うちは幸せ者や、この二人と……大切な親友たちと一緒に歩いて行ける。それって凄く素敵で、嬉しいことなんやよね。

「さて、このかの決意がどちらも極めることだと分かった今、問題なのは長達だが…」

最大の問題で最大の難関だが、どうにかならないこともない。

「とりあえず、来月のGWに学園側には内密に京都へ行く。そこで長達と話をつける為にも」

ボフンツと数冊の本が空中に現れ地面に転がる。魔法道具『ブックメーカー』、登録した本の中から必要な項目のみを抜き出して纏め上げた本を新たに創り出す。ここに来る前に、総本山の蔵書保管庫を登録してきた。保管庫内の本全てを対象とするので、新たに追加されても無問題。これで麻帆良にしながらこのかの陰陽術に必要な知識を得ることが出来る。

「このかには、結界を全て習得してもらおう。この本は結界のみを纏めてある…GWまでに、全て使えるようになれ。俺も出来る限り、協力する」

「分かったえ。極めるって決めたんや……絶対、覚えてみせる」

本の量からして、それが生半可なことじゃないのは分かっているだろう。正直、俺も無茶を言っているとは思ってる。だが、これくらい出来なければ長達を納得させることなどできない…特に、重役たちは納得しない。頭の硬いジジイたちが反論できないくらいに、魔法よりも先に陰陽術を習得する必要があった。

「（だが、どうする…今からじゃ流石に難しいのは変わらない…）」
問題は時間だ。GWまで約三週間、当然授業はあるし、俺の店もある。日にちの割に修行に割ける時間は少ない。

そこまで考えて、一つ思い当たるものを思い出した。すっかり忘れていたが、あれならばこの問題を完璧にクリアしてくれるはずだ。

「五時、か。七時が限界だとして…」

俺はブラックホールから新たに魔法道具を取り出した。それは何の変哲もない真っ白の石ころに見えるが、れっきとした魔法道具だ。

「彰、それは？」

「魔法道具『テレポーター』、自分が思い浮かべた場所に一度だけ飛べる、使い捨ての道具だ。これから、エヴァの所に行く」

「エヴァちゃん？」

「時間というどうにもならない条件を、あいつなら何とか出来る筈だ。行くぞ」

テレポーターを握りしめ、共に飛ぶ人間を意識、そして次に行き先を思い浮かべて魔力を込める。魔力が俺たちを包み、テレポーターが輝くと三人でエヴァの住む家に飛んだ。

「なるほど、それで私の『別荘』を借りに来たわけか」

「ああ。このかの為にも、俺たちの為にも、エヴァの持つ時間を借りたい」

別荘…外とは異なる時間軸の空間。別荘内の空間での一日はこちらの一時間にしかない。それを使えば、三週間という期限が何倍にも延びる。そうすればこのかだけじゃなく、刹那や俺の修行の時間も増えるわけだ。

「対価が必要な用意しよう。望むものを言ってくれ」

「はっ、別にそんなものいらん」

「……なに？」

尊大に椅子にふんぞり返るエヴァの言葉に、俺は眉を顰める。対価としては血の供給でも望んでくると思っていたが、彼女は何もいらないと言う。俺の後ろで刹那とこのかが困惑しているのが分かった。二人は俺とエヴァの話す別荘が何かは知らないが、話の流れでエヴァの言葉を不思議に思っではいるようだ。

「お前の解いた呪い、あれの対価に私の知識を授けることになっていただろう？」

「ああ。その契約には何の問題も無いはずだろう」

「それがあつたんだよ」

「……どうということだ」

引つ張るエヴァの言葉が歯がゆい。彼女との契約、それはエヴァの登校地獄の呪いを解く代わりに、彼女の持つ魔法道具の原理や構成といった知識を授かるもの。これ自体には何の問題も無かったはずだ、いや、あつたとしても彼女ならば契約時に言ってくるはずだ。どうして今更…。

「お前の対価と私の対価が、釣り合わないんだ」

「……俺が呪いを解くだけじゃ足りない、と？」

「逆だ。足りないのは、私の方だ。呪いを解いたお前に私が授けら

れる知識は、実のところ殆ど無いんだよ……だから、別荘を貸すことに対する対価はいらん」

「……なるほどな、そういうことか。俺はお前に担がれたと思って良いのか？」

「好きに思えば良いさ。だがな、契約を違えはせんよ。私の持つ知識は、お前が望むときに授けてやる。別荘は、私がいるときのみ使用出来る。使いたいときは言つと良い」

「…感謝するよ、エヴァ」

本当に担がれたとは思っていない。恐らくは、契約時には彼女も気づかなかった何かがあったのだろう、だからわざわざ俺に吊り合わないことを言ってきた。『悪い魔法使い』と自分を称しても、この辺り彼女は他の魔法使いよりも信頼できる。

「ところでお前、どこで別荘の存在を知った？そもそも、私が持っていると思ったのはなぜだ？」

「……それはノーコメント。俺の正体に関わることなんでね」

「…ふんつ、やはりな。まあ、いい。お前たちには楽しませてもらっているからな、今はこの現状を受け入れてやる」

「どうも」

そして俺たちは早速、エヴァの別荘を使わせてもらった。七時までの二時間、別荘内での二日を過ごす。現実とずれた時間とを行き来しながら、俺たちの時はそうして確実に過ぎて行く。

GWまでに、なんとしてもこのかには結界を完璧にしてもらわなければならぬ。そして同時に俺と刹那もまた、このかを守るくらいに強くなかなければならぬ。

俺たちの修行の日々は、こうして始まり、流れていく。

このかの決意、全てを極める（後書き）

今回の自己解釈が激しいです…あくまで作者の考え、またこの作中での考えですので、原作との矛盾には目を瞑ってください。

彼にとっての彼女と正体不明の誰か

side 龍宮

「受け取ってください……!!」

……面白いものを見た。

GWも目前に迫ったある日、私は彼の店が閉まる頃を見計らってここにやって来た。すると、店の裏手から声が聞こえたのだ。興味半分で覗いてみると、驚いたことに彼が一人の少女から手紙を差し出されていた。先ほどの言葉からして、おそらく告白だろうが……彼はどんな反応をするのかな？

「……俺より良い男はいっぱいいる。そっちにしとけ」

「私は貴方が好きなんです！受け取るだけでも良いんです、お願いします!!」

「受け取らない。俺は君の気持を受け取らない」
「っ……」

少女が走り出す。その際、私の方に走って来たが、脇目もふらずに行ってしまった。すれ違った瞬間に見えた表情は泣いているように見えた、彼もその表情は見えているだろう。彼の方に目を向けた私は彼と目が合い、その瞬間、彼は深くため息を吐き出した。

「龍宮、覗き見は悪趣味だと思うぞ」

「そう言わないでくれ、悪意は無いんだ」

「……まあ、いい。何の用だ」

「情報を持ってきた、取引してくれ」

「了解」

そう、私が今日ここに来たのは情報と商品の交換のため。『White Wing』の裏の客として来たのだ。

取引の為に私が通されたのは、店の二階、彼の住居となっている部屋だ。リビングのソファ―に座り、彼の言葉を待たずに口を開いた。

「今日はどんなものがあるんだ？」

「おすすめはこれだな。魔法道具『送還の撃』、B級程度の式神や召喚獣なら一発で元の世界に逆戻りできる」

「……相変わらず、貴方が出してくる物はとんでもないものばかりだな」

「それが売りだからな。で、どうする？結構な高値になるが、吊り合う情報があるか？」

「……まあ、無いことも無いな」

威力が凄いぶん、その商品を得る代価も大きい。幸いにも先日、中々に面白い情報を手に入れたので、今日はそれを使わせてもらおうでしょう。

「ウェールズから魔法使いが一人、こちらに来るという情報だ」

「……へえ」

「詳細はまだ不明だが、聞くところによると随分と幼いようだ。それに、ある英雄の息子だという話もある」

「時期と、経緯は？」

「現在は魔法学校に在籍ということで、早くても来年になる……経緯は、どうやらその学校の関係らしい」

「なるほど。でも、どうやってそんな情報を仕入れたんだ？」

「……この前買った道具を使って、少しね」

前々回の取引で受け取った魔法道具『針の地獄耳』。その名の通り針のように細く、それが刺さった周囲数十mの範囲内の音を距離関係なくどこからでも聞くことが出来る。これを私は、学園長室の扉のすぐ傍に刺しておいた。そうするだけで、学園長室でどんな会話がされているのか分かるというわけだ。

おかげで、情報収集が楽になった。針は私が望んだ時に回収できるので、万が一見つかったても問題ない。この慎重さはとても助かる。

「で、どうだ？貴方の商品の代価には成り得るかい？」

「……ああ、良いぜ。どうぞ龍宮、お買い上げありがとうございます」

「どうも」

ケースに入れて渡された五発の弾丸。使っても自動的にケースに戻って来て、そのままでは使えないが魔力を込めることでまた使えるようになる。半永久的に使用可能な弾丸であり、また私の魔力を登録してあるとかで、他人の魔力を込めたところで意味はないらしい。つまり、奪われてもそれを使われることは無いというわけだ。

「ああ、あと明日なんだが、桜咲を貸してくれ」

「……………今週三回目」

「明日は人が足りないとかで私に割り当てられた範囲が広いんだ。報酬は良かったけどね」

「相変わらずさんな警備体制だな。本当に、引き受けなくて良かったよ」

深く溜息を吐き出す彼に、私も最近はいさばかり後悔している。正直な話、警備体制がこうも酷いと知っていれば、最初から引き受け

たりしなかった……まあ、お金によってはやはり引き受けたりもするだろうがな。

「今日の話はこれで終わりか？」

「ああ……」

ふと、思い出したことが一つあった。目の前の彼を見つめ、悪戯を思いついて唇がつり上がる。

「そういえば今日、桜咲が男子生徒に呼び出されていたぞ」

「……刹那が？」

「相手は随分と緊張した様子だったし……告白かもしれないな」

「へえ……」

彼は最初こそ驚いたように目を見開いたが、すぐにただ聞くだけで何の反応も返さなくなった。可笑しいな、もっと食いつくかと思っただが……感情を抑えている風でも無く、本当に興味が無いように見える。私の思い違い、か？

「気にならないのか？」

「どうしてだ？」

「……桜咲が、他の男に言い寄られたかもしれないんだぞ？ 普通なら気にするだろう」

「別に……もしかして龍宮、俺と刹那の関係を勘違いしていないか？」

「なに？」

勘違い、といわれても私には思い当たる節が無い。二人の関係？ 私が見ている限り、彼と桜咲はどう見ても

「恋人じゃないのか」

「全然違う。刹那は俺の恋人じゃないよ」

「……………ならば、何だというんだ」

言っておくが、二人は恋人にしか見えない。私が客として来た時に桜咲が隣にいないことなど稀過ぎるし、二人ともお互いから離れようとしなから、私と話している時も常に私は二人がピッタリとくっついてる姿を見なければならぬ。先日、街で偶然見かけたときは近衛に振り回されながら、桜咲は彼の服の端をずっと掴んでいたし、彼も彼で刹那の腰を抱きながら人込みを歩いていたし（でもその後で近衛が二人に抱きつくのを目撃した）。

私も男女関係にそこまで詳しいとは言わないが、一般的な恋人同士以上にこの二人はいちやついているように思う。なのに、恋人じゃないというのはどういうことか。説明を求め、私は彼を半眼で睨んでいた。

「まさか、ただの友人とでも言うつもりか？」

「それこそまさか。ただ、恋人みたいに恋だとか愛だとか、そういう優しい感情で繋がってるんじゃない。もっと強くて深くて、根本から違う思いで繋がってるんだ」

「……」

「俺は刹那の運命を歪めてしまった。そうしてまで欲しかった。俺という存在で刹那の全てが変わり、俺もまた刹那という存在があったから変わった。刹那を欲しいと思ったから俺はここにいる。恋とか愛とか、俺の抱く思いがそんな優しいもののはずは無いんだよ」

彼の唇がつり上がり、自嘲的な笑みを浮かべている。そして私は彼の話の聞いて、特に何か思うことも無かった。ただ、恐らくは誰よりも早く、彼の正体の一端を見てしまったことだけは分かる。近衛よりも、桜咲よりも、私が。

「なぜ私にそれを話した？」

「……意味は無い。が、恐らくは怒っているからだと思う」

「怒る？」

「恋人だなどと生温い関係に称されたことに対して、多少なりとも苛立った。だからその認識を改めさせる為に話した。そう思ってくれ」

「…了解した」

改めないはずが無い。その理由は彼の話を聞いたからだけではなく、それを話している時の彼の瞳の色。あれは、恍惚と狂気を孕んだ瞳だった。

「（何もかも壊してでも求める狂気、そして壊した末に手に入れた喜び。私たちが思う以上に、彼はきつと、歪んでいる）」

そして恐らくは、自覚は無いながらに彼を受け入れている桜咲もまた…。

「それに、俺はそういうわけだから刹那が他の誰かと恋人同士になろうと文句は無いけどな」

「……………は？」

「刹那は最終的に俺の元に帰ってくるわけだし、いくらでも言い寄れば良いさ。好きとか愛してるで俺の思いには勝てないからな」

くつくつと喉を震わせる彼の笑みが凄く恐かった。

「という話を今日、龍宮としたんだ」

「そうですか」

ブンツと飛んでくる鉄球を飛び上がって避けてブラックホールから取り出したナイフを投げる。十本ほど続けて投げたが、彰は全ての気の障壁により弾き飛ばした。着地すると同時に足元に呪符が投げられるのを見て地面を蹴って後退すると、次の瞬間、私がいた場所で呪符が爆発した。

「刹那は考えたことがあるか？あの時、俺と出会わなければお前がどうなっていたか」

「ありませんよ。私にとって彰に出会えたことは最高の幸せであり、なにを犠牲にしても構わないと思える出会いだった。貴方が共にいたいと言ってくれたから、私は全てを貴方に捧げたいと思えた。死の瞬間まで共にいると言ってくれたから、貴方の傍で笑っていられるんです」

「俺に出会わなくてもこうして笑っていられたとしたら？」

「知りません。今の私は彰がいるからいるんです」

首元を狙って振るわれた大きな斧を飛び越えると同時に、背中から翼を広げる。空高く飛び上がり見下ろした光景、広い森と私と彰が戦っていた海岸、その境にはログハウス。ここはエヴァンジェリンさんの別荘の中で、入ってから今日で三日、現実時間で三時間が経つ。先に入っていた私がこのちゃんとエヴァンジェリンさんたちと一日を過ごし、それから入って来た彰と修行として戦い始めたのが昨日。何度も戦い、私が彰に勝てたのは一度も無い。

「風嵐！！」

気を込めて翼を羽ばたかせ、幾万もの風を巻き起こすと海岸の砂が巻き上がり砂嵐となつて彰を襲う。気の込められた風はかまいたちともなつて彰に傷を負わせた。

「一閃、風雅」

夕風を両手で握り一気に薙ぎ払う。本来なら片手で持つのだが、隙は増える代償にこちらの方が力が増す。私の一閃は砂嵐ごと海岸まで亀裂を作った。砂嵐で身動きも周囲の把握も出来なかったはずの彰が、この一撃を無傷で避けられるはずが無い。

「魔法道具『執行の楔』」

「っ!？」

決して大きくは無い声が響いたかと思うと、私の周りには五本の十字が浮いていて、気づいた時には囲まれていた。上下にしか逃げ場が無くなり、翼を羽ばたかせ上空へ逃げようとすると、強い衝撃が私を襲った。

「っああああ!!!!」

バチバチと音が弾ける、目の前が真っ白になり真っ暗へと移り変わると、私の体は砂の上に叩きつけられた。

「我に反するものへ罰を、つてな。大丈夫か、刹那」
「っ、う……」

動けない私の体を彰が抱き起こしてくれる。向こうからこのちゃんが走ってくるのを見て、痛みに呻きながら溜息を吐いた。

「また負けた…」

「刹那だって前より強くなってるさ」

「でも、彰に勝てたことありませんよ」

「俺が刹那に負けたら刹那を護れないだろ？だから、これで良いんだよ」

「……私だって、彰を護りたいのに」

護られるばかりではなくて、私も彰を護りたい。誰よりも大切な彼を護れない強さなんて、私には要らないんだ。

「俺が背中を預けるのは刹那だけ、それで満足してくれ」

「……今は、それでいいですよ」

今は、ね。隣に膝をついたこのちゃんの癒しの光が、凄く温かくて……私は、目を閉じた。

『……ねえ』

「う……」

『起きて、白鳥の子ども』

「っ、だ、れ…？」

『白き翼は禁忌の印、忌み子の証』

「なにが、言いたい……？」

『祝福を受けることなく産れた忌み子、孤独を背負い茨道を生きる忌み子』

「……」

『幸せを知らず不幸に包まれてしまった忌み子、私の罪の形』

「………お前は、誰だ」

『白き翼の真の意味を知る者。忌み子、貴方の唯一の理解者』

「……理解者？はっ、笑わせるな」

『忌み子……？』

「理解者など要らないし、お前の言っていることは間違いだらけだ。祝福？母様と父様は喜んでくださった。孤独？私には彰がいる。死の瞬間まで共にいると約束した者がいる。不幸など、彰と共にいる限り感じることは無い。私には彰がいる、このちゃんだって私を親友だと言ってくれる。ならば、それだけで良い。白い翼が禁忌だろうと、私は胸を張って生きられる」

『……貴方は幸せだとも言つつもり？』

「ああ、言っさ。私は幸せだ。彰がいてくれる、それだけで私は最高に幸せになれる」

『……忌み子、過去の忌み子に無い忌み子』

「……？」

『たった一人の存在で成り立つ貴方の幸せは、いつまで続くのかしら？』

「……そんなの」

『ねえ、いつまで？』

「私が死ぬ瞬間までに決まってるだろう」

『……え？』

「死の瞬間を約束した彰が死ぬのは私が死ぬ時。私の幸せは彰と共にある限り続き、終わるのは私と彰が死ぬ時だ。さっきからそう言っているだろう」

『……』

「ここがどこかは知らないが、もう帰してくれ。早く彰の元に戻らないと」

『……忌み子、私の罪』

「……」

『気にいったわ』

「っ？」

胸を貫く鋭い感覚は痛みとは違った何かで、けれどその衝撃は私の意識を容易く奪い去った。

彼にとっての彼女と正体不明の誰か（後書き）

話に脈絡が無い気がします。こんな感じで。刹那についてはまたチートというか捏造設定付加が起きそうです。

目を塞いで、耳を塞いで

Side 刹那

耳障りな声が聞こえた。

『助けて』『いや、いや』『痛い痛い痛い痛い』『ごめんなさい、ごめんなさい』『やめて、来ないで』『触るな』『怖い、怖い』『ごめんなさいごめんなさいごめんなさい』『助けて』『誰か助けて』

……うるさい。私の耳に聞こえてくる、この声が。

『死にたくない』『死にたくないよ』『まだ、生きていたい』

とても、うるさい――

Side 彰

どうすればいいのだろう。目の前の光景を前に、俺は何一つとして考える事が出来ずに、ただ茫然と、目を見開いて体を硬直させている。

「せつちゃん！？せつちゃん、どうしたん！！」

このかの叫び声もやけに遠い。

どうしてだ、どうして、こんなことが起きている。いったい、何が起きている。

「あああああああああああああああ！！！！！」

どうして刹那は、喉が割けんばかりの悲鳴をあげて、蹲っているんだ。

「（原作で、は…刹那に、こんな症状が起きたりしていないし、兆候だって無かった筈だ……なら、これはどうして起きている？）」

俺という存在によって分岐した世界だから起きた、刹那の異変なのか。刹那という存在は、その存在自体が、もしかして俺の知る刹那とは何か違うのか。

たとえば俺と言う存在が関わったが為に、刹那の何かが大きく変わってしまったのか。

「……………いや、今はそんなこと、考えてる場合じゃない」

動揺と混乱に支配された頭が目の前の現実から逃避しようとするのを、無理やりに押し止める。

今はとにかく、刹那に起こる異変を治めなければならない。全てはそれから良い。

刹那の異変、それは、このかの治療を受けてすぐに起こった。

眠っていた筈の刹那が突然、目を見開き、かと思えば喉が裂けんばかりの悲鳴をあげた。そしてその体から放出された暴走した気はその身を中心として渦を成し、抱きかかえていた俺と治療のため傍に膝を付いていたこのかを吹き飛ばした。

結界の如く刹那の周りを渦巻く氣に俺もこのかも近づく事が出来ない。僅かでも渦に触れれば、強い力でもって弾き飛ばされてしまうのだ。

「彰君、せっちゃんどうしてもうたん!？」

「俺にも分からない。とにかく、今は刹那を落ち着かせるんだ」

考える。魔法道具でも力任せでも何でもいい。刹那を、苦しそうに悲鳴をあげる刹那を助ける術を、早く考えるんだ。

そう思つて頭を巡らせた俺の背後から、興味深げなエヴァンジェリンの声がした。

「なんだ、面白い事になっているじゃないか」

「エヴァ……なにか知っているのか？」

「なにも知らん。だが、刹那の中の人と魔の力の均衡が崩れているのは分かる」

「力の均衡、つてなんや？」

このかが首を傾げる。俺はエヴァの言葉の意味をすぐに理解し、顔をしかめていた。

「鳥族の力が強まった、ということか」

「そうだ。もともと、ハーフである刹那の中には二つの力が微妙なバランスで共存していた。だが、どちらか一方が僅かでも強まれば、そのバランスは呆気なく崩れる」

「……………崩れたなら、どうなる」

「今のように暴走し……………やがて、暴走した力に吞まれて刹那という存在は、消滅する」

右腕から全身へと気を放出する。そして俺は、考える事もなければ

一瞬の間も開けることもなく、渦の中に身を投じた。
襲い来る衝撃は放出し続ける気で打ち消し、力任せに、強引に、渦を裂いて腕を伸ばす。

「（許さないからな、刹那。俺との約束を、忘れるな）」

生きるも死ぬも、共にと。刹那が死ぬとき俺は自身の命を絶ち、俺が死ぬとき刹那の命を絶つと。そう、誓った。

だが、だからといって俺は死を許容したりしない。だから、許したりしない。

「俺を見る、刹那！！」

伸ばした腕の中に刹那の体を掻き抱いて、叫び声をあげるその姿に悔しさばかりが募る。

焦点の合わない瞳を無理やりに俺に向けさせ、震える肩を掴み叫んだ。

「俺の声を聞け、俺の姿を見る。刹那、俺を見る」

「あああああああつああああきら、あき、らあああああ」

「そつだ、俺を見る、俺の声を聞け。他は何も見なくていい、聞かなくていい」

「あああああうるさい、うるさいうるさいうるさいうるさいうるさい、うるさいんだ、あきら、あきらっ」

「聞くな、何も聞くな。刹那、俺を見て、俺の声を聞くんた。それだけでいい」

刹那が嫌なら、何も聞かなくていい。見なくていい。ただ、俺だけを。

「俺が護るから。お前が嫌がるもの全てから、俺がお前を護るから、刹那は何も恐がらなくていいんだ」

「つらあ、あき、らああああああああああ」

声は次第に静かに、途切れ途切れになっていった。

「あ、あき、ら、あきら……」

「刹那、俺の声が聞こえるな？他にはなにも、何も聞こえないな？」

「聞こえない……彰の声が、聞こえる」

刹那の唇がふつと笑みを作り、その体は力無く俺の胸元へと倒れ込んできた。

抱きとめた刹那の体が痛々しいほどに冷たくなっている事に、俺は無言で腕に力を込めていた。

S i d e o t h e r

「つまり、夢の中でその女と話して、目を覚ましたらたくさんの声が聞こえた、と」

「ああ……助けを求めたり、何かに怯えていたり……どの声も、そんな風に怯えて、泣いていた」

「なんや、可哀そうやな……」

このかが悲しそうに目を伏せる。対して彰は、瞳を閉じて真剣に何やら考え込んで腕を組み、パツと瞳を再度、開いたかと思うと刹那を見て淡々と言う。

「その女は、刹那を気にいったと言ったんだっただな」

「ああ」

「刹那がそいつに会った事は？」

「言っただろう。知らない女だ…もつとも、声で判断しただけで、女かどうか本当は定かじゃないんだ」

「顔とか見えへんかったの？」

「ぼんやりと、人のような姿をした何かがいたように思うだけで、あとは何も」

刹那は夢の記憶を手繰り寄せるが、緩く首を振った。

「とりあえず、またそいつに会ったら言うさ。だから彰、そんなに恐い顔をしないでくれ」

刹那に僅かに呆れながら言われた彰は、まるで刹那を通して謎の女を睨むかのように、鋭い視線を刹那に向けていた。殺気こそ籠っていないが、微かに居心地の悪さを感じさせた。

「……いつ会えるかは、分からないんだよね？」

「ん？ああ…今回のだって、初めてのことだったしな。次があるのかも……」

「…決めた」

「彰？」

呟いた彰に、刹那は何を決めたのかと首を傾げる。そうすると、彰がガシツと刹那の肩を掴み、満面の笑みを浮かべて言った。

「今夜から、俺と寝よう。刹那」

「……構わないが、突然どうしたんだ？」

「女とはいっ会えるかは分からない。でも会えるのは夢の中の可能性が高い。なら、寝ている時に傍にいれば、刹那の異変にすぐに気

付けるだろ？」

「まあ、それはたしかに…」

誰も何も言わない。この場にいる彰、刹那、このかの三人が、何かを言う筈も無く。

「ずるいえ二人とも。うちも二人と一緒に寝たい」

女子寮に住む刹那が彰の家で寝起きする事に、何かを言うものは誰もおらず、その違和感を気にするものも、おらず。

Side 龍宮

「と、いうわけで、刹那は今日からうちで寝る事になったからよろしく頼む」

「なにがどういうわけか分からないんだが、な」

銃声が響く深夜の森で、木の枝から敵を狙う私の横に座った彼は、唐突にそう言い放った。

今いる場所が戦場であることを忘れさせるような、日常の会話のように彼は続ける。

「最近の刹那は夢見が悪いようだな、俺と一緒に寝ればそれも万事解決するわけだ」

「男と女と一緒に寝るのは、別の意味で寝れないと思うけどね」

まあ、彼と桜咲ではそれも無いのだろうけれど。

「で、そうすると万が一にも刹那が夜、部屋にいないのがばれる可能性が出てこないとも限らない。なので、龍宮に頼みがある。これを部屋に置かせてくれ」

「……それは？」

「『ゲート』だ。一応は魔法道具なんだが、使い道は単なる出入り口にしかない。これは互いに登録されたゲート間の距離を無くし移動を可能にする物だ。これを俺の家とそちらの部屋に置けば、行き来が一瞬になる」

「……手のひらサイズの水晶にしか見えないが、彼が言うのだから本当なのだろう。」

「まあ、私は構わないけれど……にしても、珍しいね。貴方が見返りの無いお願いをしてくるなんて」

どちらかといえば、気になるのはそっちだ。彼が互いに同等の利益を与えない取引を持ちかけてきたのはこれが初めてのことだった。だから思ったままに口に出すと、彼は少しばかり驚いた顔をして、納得したように頷く。

「ああ、確かにそうだな……うん、なら龍宮にも報酬を用意しよう」

「おやおや、別にそんなつもりじゃなかったんだけどね」

「気にするな、俺が勝手に用意するだけだ」

彼は手の中のゲートを弄りながら、そして目下で剣を振るう桜咲を見つめて言った。

「彰と刹那、そう呼んでくれ」

「……いいのかい？」

「構わん。というか、別に誰も許可なんていらなただけだな。龍宮に呼ばれるのは、不愉快でも無いし」

彼の目線を追って下に向けていた目をまた彼へ。そして言葉の意味を理解して、少しばかりこそばゆくなる。

つまり、私は彼に多少なりとも認めてもらえていると、そう思っても良いのだろうか。

「なら、私の事も真名と…そう、呼んでくれ、彰」
「……………ああ、分かった。真名」

敵たちの悲鳴が消える。全ての敵が斬り伏せられ、桜咲が彼を見上げていた。

「お疲れ様、刹那」

そう言った私に桜咲、刹那は随分と驚いた表情をしたのが、また可笑しかった。

二度目の邂逅

Side 彰

朝の日差しが窓から差し込み、そのまぶしさに目が覚めた。

目を開ければ腕の中に感じる温もりの正体、白い髪が光にキラキラと反射し輝くのに、見惚れるのも無理は無いと思うがどうだろう。

「おはよう、刹那」

未だ眠り続ける刹那の寝顔に唇が緩み笑みを象った。

昨日、共に眠る事に決め真名にもその事を伝え、有言実行でこうして俺の部屋で一緒に寝ていたが、どうやら夢で女に出会う事は無かったらしい。

というか、流石に一人用のベッドで二人寝るのは厳しかったか。いくら刹那が細く小さいとはいえ、もう少し余裕があった方がいいか。まあ、狭い方が抱きしめて密着して眠れるから、俺としては万々歳なのだが。

「ん、う…」

あれこれ俺が思案している内に、刹那が目覚めたらしい。薄く瞼を開き寝ぼけた表情で視線を右往左往させると、俺を見てゆっくりと口を開いた。

「おはよう…あきら…」

「……おはよう」

寝起きで喉が渴いているのか、少しばかり擦れた声と気だるい表情と動作。

……やはり、ベッドはまだしばらくこのままにしておこう。
目覚め一番にこの刹那の表情を、声を、至近距離で堪能できるのなら狭さなど問題じゃない。

「そろそろ修行の時間だからな、起きるぞ」

「あ、あ……」

普段から朝は弱いのか、それとも俺の傍だからか、未だ眠そうな刹那を促して俺は準備に取り掛かった。

エヴァの別荘内でこのかと合流し、修行を開始する。

このかの修行も順調のようだ。強力な結界を作るのはまだ時間もかかるし、威力も不十分なところが目立つが、形はだいぶなってきた。
いる。

陰陽術に関してもこのかには才能がある。気の細かな流れや量の調節が俺や刹那よりも上手い。順序良く教えて行けば、すぐにその才能も進化していくだろう。

刹那は先日、あんな暴走を起こしたばかりで不安な部分はあるが、概ね問題ないと言ってもいい。

今はエヴァから借りたチャチャゼロを相手に刀を振るっている。チャチャゼロは動きが素早くまた攻撃に全く容赦がないため、命のやり取りによる緊張感を持って修行を行える。

最初は俺との修行が続けていたおかげかいい勝負というところまで持ち込んでいたが、最近は刹那のほうが有利になってきている。

このかも刹那も、修行に関しては問題ないだろう。
そして俺が今、二人の相手をせず何をしているかといえば、ログ

ハウスにてエヴァと向かい合っていた。もちろん、ただ無言で見つめあうとかそんなことじゃない。以前、こいつと交わした取引のためだ。

「結論から言うと、私がお前に教えられる知識は無い」

「……………経緯は？」

「お前の魔道具を見ていたが、お前の作り方でほとんど正しい。魔法に関する道具に必要なものはほとんどが共通しているが、それは『魔力』と『想像』と『媒介』だ」

「……………能力を想像し、媒介に魔力を込めると、そういうことか」

「言葉でいうほど単純な物じゃないが、そういうことだ。私が作る人形も、元となる人形を媒介とし、それを形成する『人格』を想像しながら魔力を込めることで出来る。その辺の魔法使いが同じことをしたところで同じように作れることなど万に一つありえないがな。経験を積んで初めてできることで、これを理論というならそういうことになる」

「感覚で覚えるようなものか……………確かに、これじゃ教えてもらうのは難しいな」

作り方が本に書いていないわけだ。書かないのではなく、書けないのだ。手順は一緒でも、作り手によって感じ方、作り方に違いが出ているのだろう。

「……………参ったな。つまり、強力な魔道具を作るには経験あるのみということか」

「そうなる……………いや、だがちょっと待て」

先が長そうだ、そう思ったところでエヴァは何やら考え出した。

「一つ、今すぐに変えられる部分があるな」

「それは？」

「『媒介』だ」

エヴァは「少し待て」と言っつて部屋を出て行き、すぐに戻ってきた。その手には小瓶を持ち、中では赤い石がうつすらと光を放っている。見たことの無いものだ。

「昔、手に入れたもので数は少ないが、魔力の染み込んだ石…魔石だ」

「ああ……そうか、それが本物か。創ったことはあつたが、自然物を見るのは初めてだ」

魔石、それぞれの属性の魔力を浴び続け、その魔力を封じ込めた石。俺の魔道具の力の源にもよく使っていたが、それは魔道具を作る際に同時に創造してしまっていて、本物は見たことが無かった。

「……本来、一から作ることができないものではないのだが、まあいいだろう。お前の場合は媒介も能力の想像と同時に作ってしまったているようだが、別に考えて作ってみろ。まずは媒介を、こうした力を持つもので創る。そこに上乘せる形で能力を想像し、魔道具として形を成せばいい」

エヴァは瓶から石を取り出し、俺に放ってきた。慌ててそれを受け止めると、石から熱い魔力が俺の中に伝わってくる。

赤い石、これは炎の魔力が込められているようだ。俺は熱さを刻みつけるように掌に石を閉じ込め、目を閉じる。本物の魔石がどんなものなのか、俺は身を以て覚えこんだ。

「ふむ……よし、やってみるか」

魔石をエヴァに返し、俺は床に座ると目を閉じる。集中するときの体勢には一番リラックスできる体勢をとるようにしていた。

まずは形となる石を、次にその石の中に火の属性を持つ魔力が閉じ込められているのを想像する。普段は能力を想像するのに重きを置くが、今回は媒介のみだから、できるだけ細かく。石の大きさ、重さ、手触り、魔力の密度、熱の熱さ。全てを想像し、そうして俺の右手にそれを作るように――

「……………これで、いけるか」

目を開き右手に出来上がった石を見る。赤い石はエヴァの持つてきたものよりも随分と赤い。

「貸してみる」

言われてエヴァに石を渡す。全てを想像しようどこまでも細かく深く考えてしまつて、いつも以上に疲れてしまつた。正直、戦闘中にここまで集中する余裕なんて絶対ないだろうな。

「……………まったく」

「あ？」

「お前はなんなんだ？こんな魔石、自然界でもそう作られる物じゃないぞ。ましてや、普通の石に後から人間が魔力を込めた紛い物なんかとは比べ物にもならん」

「……………というと？」

「完璧だと言っている」

投げ返された魔石を慌てて受け取る。どうやらこれで問題は無いらしく、そうするとあとは、俺の想像力次第、か。

「……俺も、頑張らないとな」

このかと刹那の修行は順調。なら俺も、順調でないといけないよな。俺は立ち上がり、高鳴る鼓動を心地よく思いながら外に出た。

S i d e 刹那

授業中でもこのクラスは騒がしい。黒板をノートに書き写す私の耳に嫌というほど声が入ってきて、少しイラッと。入学してからすでに二週間ほどが経過しているが、未だに慣れそうにない。

私は今まで、ずっと静かに暮らしてきた。彰と出会ったまでの鳥族の村では、村外れにある家の側からなるべく離れないように過ごし、彰と出会ってから彰と共に森に住み、このちゃんと友達になつてからも、道場やこのちゃんの住む総本山といった、こうした騒がしさとは無縁の場所で過ごしたから。

正直に言つと、こうした騒がしさを私は騒音と認識してしまうくらいに、音に敏感になっていた。

「どうかしたのか、刹那」

「……いや、なんでもない」

隣の席の真名に心配されてしまったのも、これが初めてではない。自分の顔が不機嫌になっているのも自覚している。ある程度、顔に出さないように気を付けてはいるが。

「うるさい、耳が痛い、うるさい、うるさいうるさい、彰の声が聞きたい彰に会いたい彰彰彰……」

「お、おい、刹那……?」

「ん？どうした」

騒がしさのせいか段々と視界がぼやけてきて、何だか意識もはつきりしない。彰がいれば気にならないのに。いや、それにしても今日はやけに騒がしく感じる。真名の声も次第に煩わしくなってきた。なんだろう、今日はいつもと何かが違う……？

「先生！今日はもう自習にすべきかと！！」

「いや駄目だからね。ほら、次の問題行きますよー」

クラスメイトの声、教師の声。変わらない、何も変わっていないのに。

「——ほら、——は——こう——」

「ああ——で、——ほど——」

遠のいていく声。声は言葉から音に。音は不快な不協和音に。なんだろう、気持ち悪くなってきた。

「——けて——く——い——」

「た——く——な——め——」

「——き——す——げよ——」

彰に会いたいな。彰にまた、耳をふさいでもらえば、こんな音も聞こえなくなるのに。気持ち悪いこんな音はもう聞かなくてよくなるのに。

「けて——たすけて——」

「——白鳥————忌み子——」

「——私の罪——」

もうこんな『声』は聞かなくてすむのに。

そうして私の意識はゆっくりと白を濃くして行って、やがて――

「せつちゃん!!」

何も見えなくなった。

Side このか

せつちゃんが倒れた。

うちの席はせつちゃんよりも後ろで、ノートを書き終えたうちは何気なくせつちゃんを眺めていた。綺麗な真つ白の髪がうちは好きやったから、こうやって見るのも初めてや無い。

そんな時、ふらりとせつちゃんの体が揺れた。なんやろうと思って見てたら、そのまま起き上がらずにボタンと床の方へ倒れて、慌てて名前を叫んだ。気づいた真名ちゃんがせつちゃんの腕を掴んで引っ張ってくれなかったら、椅子から落ちるところやった。

「せつちゃん、どないしたん!？」

うちが叫んだのとせつちゃんが倒れたことに騒然とするクラス。うちは急いでせつちゃんの傍まで行って、真名ちゃんに支えられて座るせつちゃんの様子を見る。

「……脈も普通、呼吸も…ちょっと浅いけど大丈夫やな。病気じゃなさそうやし…」

朝、別荘にいた時はいつもと変わらなかったし、出た後も特に変わった様子は無かった。

とすれば、さつき、せつちゃんがふらふらしたすまでに何かがあったはずなんやけど。問いかけるように無言で真名ちゃんを見ると、少し難しい顔をしていた。

「さ、桜咲……？」

「先生、せつちゃん具合が悪いみたいなので、保健室に連れて行きます」

「あ、ああ…そうだな、そうした方がいいだろう」

「私が運ぼう」

真名ちゃんがせつちゃんを抱えて歩き出す。それにうちも何食わぬ顔で着いて行って、保健室を出た。先生もびつくりしとったし、怒られることもたぶん無いやろ。

S i d e 刹那

ゆっくり、ゆっくりと視界が開ける。一面、真っ白な世界。

そうしてまた目の前にはあの時、夢で会った女の声の白い影がいて、それが私に話しかけてくる。

『白き翼の忌み子。どうして私から逃げるの？』

「………逃げた覚えはないが」

『逃げているわ。私たちの声から耳を塞ぎ、目を閉じている』

「だから、いつ私が……」

『あの人間が、貴方を縛るのかしら』

「………人間？」

影が動く。私の周りをくるくると回って、そうして言う。

『人間、あの男。彰といった、あの人間』

「お前が彰の名を呼ぶな」

『あれが貴方を縛ってる。貴方の耳を塞いで、目を塞いでいる。おかげで私は貴方に会えないわ』

「別に私はお前と会いたいと思っていない。早く、私をここから出せ」

『駄目よ。貴方は大事な忌み子、私の罪。たった一人の存在で幸せが続くという過去にない忌み子。出て行かないで』

「……さつきから」

『貴方が気に入っただの、だから出て行かせない。忌み子、忌み子の中でも特異な子。貴方はあれには渡さない』

「忌み子、忌み子と、煩い奴だ」

人の話を全く聞かない影を、私は睨み付けた。それに聞いていれば随分と勝手なことを言ってくれる。

「お前に気に入られようと、関係ない。私は彰の元に帰る、それだけだ」

『駄目、駄目よ。貴方の理解者は私だけ。あの男じゃない、あれじゃない。貴方は私の元にいるべきなの』

「だから、知らないと言っている。大体、お前はなんだ？何を知っている？」

『私は忌み子の唯一の理解者。全ての忌み子の、始まり』

「……始まり？」

『忌み子は私から生まれた、私の白き翼から全てが始まり生まれた』

「……」
『白き翼は強大な力の証。何にも染まらぬ純粹な力の証。恐れられ

る力の証』

「……ハーフだから、白い翼なのではないのか」

『違う、力を持つから白き翼。けれど力は恐れられ、白き翼は耄られた。そうして皆、死んでいく。忌み子は皆、そうして死んだ』

人と妖のハーフだから、白い翼なのかと思ったこともある。人と妖の禁忌の交わりの果てに生まれたからだ、そう思っていた。

けれど影は違うと言う。強い力を持つものが白き翼を持つのだと。

『力は消えず、受け継がれる。過去の忌み子の悲鳴と共に。過去の忌み子の絶望と共に』

「悲鳴、か……あれが……」

『忌み子、受け入れなさい。悲鳴を、絶望を。そうして幸せが無いのだと知り、新たな悲鳴と絶望を生めばいい』

「は……？」

『力は受け継がれ、悲鳴と絶望は力を更なる高みへと、翼を更に強くする。そうして全ては始まりに戻り、願いが叶う』

「何を、言っている……」

『私を殺した全てに復讐を、私はそれを待ち焦がれるの。力が私に戻るとき、私の復讐が始まるの』

「……………」

閉口。そして、怒り。握りしめた拳が震え、肩が震え、今にも殴りかかりたい衝動を必死に抑える。

今、こいつは私に何を言った。つまり私に悲鳴と絶望の中、死んでいけと。そう言ってきた。自分の復讐の為に。

「……………確認しよう。お前は白い翼を持って生まれた最初の烏族で、迫害の末に死んだ。そして自分を殺した者への復讐の為に、より強い力を求めている。そしてその力の為には白い翼を持った者が絶望

して死んでいく必要があり、お前は今、私にそれを求めているという事でいいんだな？」

『賢い忌み子。貴方の悲鳴と絶望は大きな力を与えてくれるわ。貴方ほどに幸せを知った忌み子は過去にいない』

「……………そうか。お前の要求はよく分かった」

『忌み子』

「しかし、私がそれにこたえる必要は——ない!!」

強く思う。ここから出たいと、この夢から覚めたいと。途端に遠くから微かに聞こえた、罅割れの音。

左手を腰元にあて、右手は柄を握るように。居合の体勢を保ち、ゆっくりと息をして、そして最後に思う。

「私が帰るのは、彰の元だけだ!!」

銀色の刃が、空間を引き裂いた。

暗い視界が突然開けて、飛び込んできたのはこのちゃんの泣き出しそうな顔だった。

「せつちゃん!!」

「この、ちゃん……………」

「っよかった、せつちゃん。やっと起きた」

ギュッと布団ごと抱きしめられて、ちょっと苦しい。どうにか身を起こして顔をあげると、真名の姿もあって少し驚いた。

「真名……………」

「ようやくお目覚めかい？刹那。少々、待ちくたびれたよ」

「それは、すまない……いま、何時だ？」

「昼休みだよ。近衛が授業時間も無視してずっと傍にいたんだ、感謝してあげるべきだと思うぞ」

「そっ、か……ありがとうな、このちゃん」

「ううん、いいんや。せつちゃん、起きてくれたし、それでええ」

ずっとしがみついたままのこのちゃん。きっと、前にうちが暴走してしまった時のことを思い出して、心配したんだろう。でも、よかった。今回は何も起きなくて、このちゃんを傷つけるようなことが無くて。

「昼ってことは……三時間くらい、か？眠ってたの」

「それくらいだ。目覚めないようなら、彰に連絡するつもりだった」

「そうか、それならもう少し眠っていればよかったかな」

「……それは、近衛が泣くと思うからやめておけ」

「わかってる」

少しだけ笑みが浮かんだ。ああ、でも彰に会いたいのは本当だし、少し残念かもしれない。このちゃんには、悪いけれど。

「このちゃん、もう大丈夫だから、教室に戻ろう？」

「本当に大丈夫なん？また、声とか聞こえたりせえへん？」

「うん、平気やから、そんな心配しないで？」

「……ん、わかったえ」

心配そうにしながらも、このちゃんは笑ってくれた。本当に平気なのだ、音も声も、もう聞こえないから。

けれど夢については、彰に話してからきちんと話すから、少しだけ待っててな？

二度目の邂逅（後書き）

次は話が飛んでGWへ（の予定）。違和感なく話を進めたいところですね……。

ただゆっくりと順調に（前書き）

あまり進んでいないようで、地道に進んでいきます

ただゆっくりと順調に

side 彰

怖いくらいに、ことが順調に進んでいく。

「それでは、このかが魔法を学ぶことについて——」

俺は決して頭が良いほどじゃないから、正直、自分で言い出したこの計画には不安があったけれど

「——この場の全ての方の承認を以て、許可します」

成功して、よかった。

平日は朝と夜、土日は店の時間などを考慮しつつそれでも半日以上、エヴァの別荘に入り修行した時間である。

これのおかげで半年程の時間を稼ぐことが出来た。そして迎えたGWに、俺は刹那とこのかと共に関西呪術協会を訪れた。理由は当然、このかの魔法を学ぶことへの許可だ。

反発は強かったが、それでもこちらがこのかの力を見てもらうために模擬戦を提案したところ、驚くことに詠春自らがこのかの相手を名乗り出た。あの親馬鹿が、だ。

前提としてはこのかが攻撃することはほとんど無い。西の技術でこのかが得たのは結界に関するものが中心となっており、攻撃は呪符を使用したものが少々となっているからだ。

だが、それでも十分といえた。なぜならこのかの実力は、俺の想像を予想以上に上回っており――結果で言えば、詠春の攻撃のほとんどもを防ぐことに成功していた。

最後の方は詠春もだいたい本気になっており、さすがに雷鳴剣だとか強力な技は結界でどうにか時間を稼ぎ避けていたが。

さすがに現長の実力を前に対等に、それも西の技術で渡り合ったこのかを認めないわけにはいかず、このかが呪術師（この場合は結界師とも言っべきだろうか？）としての実力を十分に持っているのは明らかだった。

そしてその上で魔法について学びたいということ、このかの決意についても改めて彼女自身の口から話し、滞りなく話し合いは終了し結論は最初に戻る。こうも上手くいっていいものかと逆に不安さえ抱くほどだが、何はともあれ問題が無くてよかった。

ただ、一応の条件としてこのかの修行については俺の監督が必要となった。魔法を教える教師はこちらで選ばせてくれるということだったが、それも俺が監督するからだろう。このかが間違っても東に染まらぬように、といったところか。最初から修行には付き合うつもりだったから別に構わないが。

とりあえず、長々とした経緯はこれで終了である。これでこのかに関する心配事は当面は無くなるので、俺も刹那も一安心だ。

で、一安心した俺と刹那が何をしているかといえば、久々に『家』に帰ってきていた。

俺が刹那と出会って辿り着いた場所に作った家だ。刹那が両親に会いたいと言ったので、ここまで来た。このかには悪いが総本山で待ってもらっている。

「さすがに埃が積もってるな。まあ、仕方ないか」

刹那が墓参りをしている間、俺は一足先に家に入り腕組みをしていた。とりあえず、テーブルとイスといった身近な物を綺麗にしまっ

手早く終えてあとは窓際にイスを持って行っ、刹那の様子を見る。墓の前にしゃがんで手を合わせたままじっとしていた。

「……………どうにか、しないとな」

一週間ほど前に、刹那が倒れたことについては、刹那自身から聞いていた。同時にその時に見た夢についても。夢に出てくるそいつは腹立たしいことに随分と強引で、傲慢で、自己中心な愚か者らしい。とりあえずは一緒に寝ることは継続、というか永遠。問題と感じていたのは俺が傍にいない場所で強引な手段を取ってくる、刹那を夢に引きずり込むような方法を取ってきた場合だが、どういうわけかあれ以降、接触してきていないという。刹那が自力で夢から醒めたことで諦めた、というわけでは無いだろう。そんなに聞き分けが良

い奴だとは思えない。

それに、刹那自身は自覚していないが真名から聞いたこのかの話によれば、夢に落ちる前に刹那が俺を求めていたという。

「……………にやけている場合じゃ、ないか」

思わず笑う唇を掌で覆い、思考に戻る。真名の見た刹那の異変と、夢に出てきたそいつの言葉。俺が刹那を縛っているという言葉と、そのせいで刹那に会えないということ。

「俺の傍にすることで、刹那の精神が安定していると、考えるべきか……………」

刹那の俺への依存心は喜ばしいことに今も上昇中。あの女の声が聞こえたとしても、俺が傍にいるときなら問題なく対処できる。俺の声を聴きたいと刹那が望み、俺が応える。たったそれだけで良い。それをそいつも分かっているんだろう。俺がいるうちは刹那に手出しできないと。仮に夢に引き込めても、刹那がまたそいつの言葉をわざわざ聞いてやる必要は無いし、意地でも目覚めてくるだろう。それに、念のために新しい魔法道具を渡してある。刹那の意識がなくなったことを俺に知らせる魔法道具『虫の知らせ』。倒れるって時点でそんな優しい状態じゃないが、これで俺は刹那が夢に引き込まれてもすぐに駆けつけられる。

そして悔しいことに、現状はこれ以上打つ手が見つからない。俺が傍にいるときは手を出してこないんじゃない、刹那の夢に介入することも出来ないしな。

「——まったく、どうして静かに過ごさせてくれないんだか」

始まりとかいうそいつに怒りを抱きながら、それでも今は、墓の前から立ち上がりこちらに笑いかける刹那を見て幸せを感じていた。

「さて、と。刹那」

「はい」

テレポーターで麻帆良の家に帰ってきた俺と刹那。このかは一直線に寮に帰るとのこと、別のテレポーターで帰ってきている。

「せっかくだし、デートでもするか」

「……………デート？」

「ああ」

言ってから、ふと思う。二人で出かけることは何度もあったが、こうしてデートと銘打って出かけたことは一度も無いな、と。隣で刹那がぱちぱちと瞬きをし、幾何かのあとその顔が綻んだ。

「早く行こう」

手を引かれる。とても喜んでいるのが見て取れて、たまにはこうやって誘うのもいいかと思った。

少しだけいつもよりおしゃれにして、二人で街に繰り出す。やはりGWとなれば人も多いし歩きづらいことこの上なく、何カ所かお店を回ったところで、女の子で賑わっているカフェに入った。

「いらっしやいませー」

二人席で向い合せに座り、メニューと睨めっこになる。とりあえずケーキセットでいいかと思うのだが――

「……………」

刹那が悩んでいるのを見て、問いかける。

「何が良いんだ？」

「ん………… 苺とチョコで、どっちがいいかなって……」

「ああ、なら俺がチョコ食べるから、刹那が苺な」

「………… ありがと、彰」

店員を呼び紅茶とそれぞれのケーキを注文。俺が食べるのはどれでもよかったし、これ一つで刹那が喜んでくれるなら悩む余地も無い。すぐにケーキが運ばれてきて、俺は自分のチョコケーキを小さく切りフォークに刺すと、刹那に差し出した。

「ほら」

「あむ……」

パクリとフォークに食いついた刹那に笑みが浮かぶ。愛らしい。もぐもぐと笑顔で食べるのだから、俺は自分の選択に全くの間違いが無かったことを確信し、その笑顔を眺めた。

「彰」

「ああ」

ケーキの刺さったフォークが目の前に来て、迷わず口を開く。ふむ、思ったより甘みが控えめで食べやすいな。

「次はどこへ行くんだ？」

「そうだな……刹那の行きたい場所で構わない」

「それはさっき行つたからいい。今度は彰の行きたい場所だ」

「んー……」

のんびりとケーキを食べて紅茶を啜る。その間にも互いに食べ合うのが何度か。

にしても、俺の行きたい場所、か。そうだな……。

「服でも見に行くか」

前に買いに来たときは、このかに振り回されるばかりだったし、今

回は刹那と二人でゆつくりと見るのもいいだろう。頷いた刹那に、俺は残りの紅茶を飲み干した。

「ところで、彰」

「なんだ？」

「ずいぶんと周りからの視線を感じるが、何かあったのか？」

「……………ああ、いや。俺たちが気にする必要は無い」

「そうか」

よく考えればこの店にいるのは女の子ばかり。たぶん、男の客が珍しかったんだろうな。

あの後とはとても有意義すぎる時間だった。

服屋では俺の服を刹那に選んでもらい、刹那には散々着せ替え人形になってもらってから服を選んだ。アクセサリーショップなんかも覗いてみて、指輪やネックレスと見たが魔法道具を付けることから除外。あとは本屋に行ったりレストランに行ったり……………いろいろと、存分に楽しんだ。

で、日も沈んでもう暗いんだが、そんな時間に俺と刹那は今日の最後の目的地へと行くために森の中を歩いていた。デートの最後としてはありえない選択だが、せめて道中くらいはのんびりと歩いて静かな時間を楽しもうか。

「さて、と」

目の前にはエヴァの家。目的地はここだった。

軽くノックすれば扉が開き、茶々丸が俺たちを出迎えてくれる。にこりと笑いかけ、俺は無表情の彼女に問いかけた。

「エヴァに用があるんだけど、いいか？」

「どうぞ。マスターはくつろぎ中です」

最後は言う必要ないと思うが、まあいい。それじゃ、今日の締めくくりに一仕事、しないとな。

「——それで、なぜ私なのだ」

俺と刹那は案内された部屋にて、エヴァにこのことを話した。そして、魔法を学びたいこのかに魔法を教えてほしいと、頼んだのだ。

「なぜ、といえばお前しか俺の知る中で適任がいなかったからだ。麻帆良にいる教師から学べば、十中八九このかは英雄の一人、詠春の娘という色眼鏡をしたうえで教えられる。それだとともに学ぶことも出来ないし、何より、彼らの価値観をこのかに押し付けられても困る。正義が好きなのは結構だが、このかまでその正義に妄信する必要は全く無いのだから」

「お前は正義の魔法使いたちが嫌いなのか？」

「知らん。正義だ悪だは俺には関係の無いことだ。ただ、何かを学ぶ上でそうした価値観まで押し付けるような奴らに、このかは任せられない。押し付けてこないにしても、あまり、このかを東に食い込むことはできないから、なるべくなら東に属する人間から学ばせたく無い」

「まあ、確かにその点では私は条件に合っているな。だがいいのか？ 私は悪の魔法使いだ。西の連中が納得するとも思えんがな」

「このかの教師については、俺が修行に付き合うことを条件に一任されている。というわけで、だ。エヴァンジェリン、俺と取引をしてもらいたい。こちらの望みは、このかに魔法を教える事」

「ではこちらの条件だが、修業期間中、定期的に私にお前の血を寄せせ。お前の血には、興味がある」

「ふむ……刹那」

「はい？」

「お前は、嫌か？」

俺は刹那に問いかけた。血を寄せ、そうエヴァが言った瞬間に僅かに感じた殺気は、間違いなく刹那が発したものだ。その顔は怖いくらいに表情が無く、俺と目が合っただけで初めて、唐突な問いかけにきょとんとした顔になった。

「お前が嫌なら、俺はエヴァに血をやらないぞ？」

「……なら、エヴァさんに一つ確認を」

「なんだ？」

「定期的にというのは、どれくらいの頻度ですか？」

「そんなの、毎日決まっている——週に一度くらいで十分だ」

「そうですか」

殺気がエヴァを刺した。思いつき、ぐさりと。

一応、刹那の実力で言えばエヴァよりまだ少し下になる、だろうか。おそらく、というか確実に近いうちに刹那の方が上回るだろうが。にも関わらず殺気でエヴァを黙らせたのだから、可愛いっただけ。普段、あまり主張してこないがこういう時にはつきりと主張してくるから愛しくて堪らない。

「私は構いません、彰。ただ、血を渡すときは私も共にいさせてもらいますから」

「もちろんいいさ。構わないな、エヴァ？」

「あ、ああ……」

冷や汗を流すエヴァとは、珍しいものが見られた。本当に、今日はいい日だな。

ただゆっくりと順調に（後書き）

あまり刹那があわあわしないのですが、彼らは常時バカップル状態です。あしからず。

次回はハーレムではないですが、せつかくですし彼女を巻き込んでしまおうかと思っています。

彼女が望んだこと

Side 千雨

この街は異常だ。何が異常って、すべてが、だ。

クラスメイトのロボットも、平然と人間では出せない速度で走る奴らも、一撃で人間を複数人吹っ飛ばす教師も、何もかも。そしてそれを異常と認識しない奴らも、どういつもこいつも。

「何も見てない何も見てない」

視界の端で人間が空を舞ったのだって見間違いだ。というか、見てない見てない。

「って、うわ!？」

ちよつ、まつ、なんでこっちに飛んでくるんだよつ。私は何もしてないだろ、巻き込まれとか勘弁しろ!!

「いや、マジでちよつとおい……」

避けられるわけない。私は普通の中学生で、半年前までは小学生やってたんだぞ。そんな私に、いきなり飛んできた人間の『塊』を避ける方法なんて――

「っ!!!」

恐怖に震えて強張った体が咄嗟にその場にしゃがみ込んだ。逃げる

ことも出来ずに、ただ不格好な受け身の体勢。馬鹿だ、少しでも走って逃げた方がよかったに決まってる。巻き込まれない可能性の方が低いけどな。

「――障壁、展開」

「!？」

「『不可視の盾』」

私に向かってきていた人間たちが、べしや、と見えない『壁』にぶつかって、ズルズルと地面に重なり倒れる。何が、起きた？

「大丈夫ですか？」

「お、前……」

「えっと……すみません、同じクラスの方、でしたよね？」

呆然とする私の前に現れたのは、中学から同じクラスになった白髪赤目のクラスメイト、桜咲刹那と、見覚えの無い長身の男だった。

Side 刹那

入学してから、早いもので半年が経ち十月になりました。

GWの一件で正式に魔法を学べるようになったこのちゃんは、相変わらず麻帆良の人間の前では一般人を装い、それでも毎日エヴァさんの元で修行をしています。呑み込みが早いようで、エヴァさん曰くそこらへんの魔法先生よりもずっと強い、とのことでした。

私はあまり変わらず、彰やチャチャゼ口さん、茶々丸さん相手に修行するばかりです。あの影も姿を見せることは無く、彰がいるから手を出せないのだろうと、不安はありますがあまり気にせず日々を

過ごしています。

彰もまた同様で、お店を開きつつ時間を見て私やこのちゃんの相手をしてくれます。ただ、彰が創る魔法道具の精度が跳ね上がりました。エヴァさんのおかげ、ということはどういった仕組みかなどは聞きましたが、私には真似できそうもありません。やはり彰はすごいとしか、というよりさすがは彰ですね。

あとは、時折真名が私たちについてエヴァさんの別荘に来るようになったことでしょうか。日に日に強くなる私を不思議に思ったそうです。初めて別荘に連れて行ったときに、このちゃんのこともし介しました。私と彰の護衛対象であることは前に話しましたが、関係者であることは知らなかったのです。隠していたので当たり前ですが。

と、こんな感じで過ごしていたある日、買い物に出た私と彰は乱闘騒ぎに遭遇しました。

「あー、今日のはまた一段と酷いな」

「ああ……普通に今の人間飛んで行ったが、よく不思議に思われないな」

「魔力抵抗の無い一般人に、認識阻害は効果絶大だからな。『外』でなら、異常者扱いされることでも、ここじゃ普通だ」

「……まあ、私たちには関係が無いか」

周りでどれだけ異常なことが起きようと、彰と共にいられるのなら地獄だろうと構わない。まあ、それとは別に気がかりなのはこのちゃん巻き込まれたりしないかだが。一般人のふりをしながらだとこれを回避するのは大変だから。

「うわっ、ちょ待てっておいっ——」

「……?」

乱闘を素通りしようとした私の耳に、慌てた声が聞こえて足を止める。視界の端で十人くらい人間が宙を舞った。

そしてその落ちる場所には、動けないのか小刻みに体を震わせた見覚えのある女子生徒がいて、私は思わず彰の服を掴んだ。

「彰、あれ」

「……巻き込まれたのか？運が無い——行くか」

「ああ」

彰と共に女子生徒の元に向かう。おそらく、クラスメイトだったはずだから、さすがに明日クラスで包帯だらけの姿を見るのは忍びない。そう思つての行動だった。

しゃがみ込んだ彼女の前に立ち、彰がブラックホールから腕輪を取り出し魔力を込める。

「障壁、展開——『不可視の盾』」

見えない壁が私たちを取り囲み、落ちてきた人間たちを受け止める。倒れた人間に興味はなく、私は驚いている彼女に問いかけた。

「大丈夫ですか？」

「お、前……」

どうやら彼女は私を知っているようだが、困ったことに私には彼女がクラスメイトであることしか分からなかった。

「えっと………すみません、同じクラスの方、でしたよね？」

いや、正直に言うと、クラスメイトかどうか、定かではなかった。

乱闘に巻き込まれたところを助けられ、なんというかそのまま成り行きで私は、こいつらの家に連れてこられた。

「悪いな、飲み物だけで大丈夫か？」

「いや、お構いなく……」

男はキッチンでお茶を淹れていて、その間待たされる私はソファーに座りながら、視線を少し下に向ける。あげるとすぐに目の前に座る桜咲と目が合うからだ。

「……………」
「……………」

無言が続く。ちらりと視線をあげるとやっぱり桜咲と目が合つて、私を見つめる視線から目が離せなくなってしまう。正直、聞きたいことはたくさんある。さっき私たちを守った見えないあれはなんなのかとか、それを使っていたこいつらがなんなのかとか、どうして私を助けたのかとか。

「……………怪我が無いようで、安心しました」

「あ……………」

「ああ、本当にな。さて、と」

桜咲の呟きが予想外で驚いたところに、男が戻ってくる。お茶を出されたが、飲む気になれなかった。

「いろいろと聞きたいことはあるかと思うが、一つだけ先に言っておく」

「……なんだ？」

「俺と刹那は、お前が望まない限り、お前をどうこうするつもりは無い」

……？意味が、分からなかった。

「この世界には知られてはいけないことがあり、もし、一般人にそれが知られた場合には原則的に対処法三つのうち一つを実行する必要がある」

「……」

「一つが、知ってしまったことに関する記憶を消すこと。もう一つが、殺すこと。両極端とも考えられるが、これらが実行される率が最も多い。一番は記憶を消す方だが」

「いやいやいや、ちょっと待てよ！！なんだよそれ、記憶を消すとか、殺す、とか……ありえねえだろ！？」

「知られてはいけないことに関わると、その有り得ないが有り得るに変わり、常識が常識となる。だが安心しろ、お前はまだ知られてはいけないことがあることを知ったが、知られてはいけないことが何かまでは知らないままだ」

男の言葉に私は背筋に走るひやりとした感覚を覚えた。なんだよそれ。

知ってしまえば、私の中の全てが反転してしまうってのか。ふざけんな、ただでさえ異常に囲まれているのに、まだ何かあるのか。

——それとも、この異常の原因が、それなのか。

「最後の三つ目、これが最も実行されることの少ないものだ。それは、住人となること」

「住人？」

「その世界での生き方を覚え、その上で生きる。ただし、住人となるなら死と隣り合わせであることを覚悟し、強さを身につけなければならなくなる」

「……………完全な実力主義の世界です。力を望まないならそれも出来ますが、その場合、自分の身、引いては自分に関わる方たちを守れないことを覚悟してください」

男に続いた桜咲の言葉にウソだろと思った。死を覚悟しての実力社会、そんなもの平和なこの国に存在するわけがない。

けれど目の前の二人は明らかに私が普段見る人間とは違って見えて、それが錯覚かどうかも分からなくて。ただ、こいつらがその『住人』って奴なのはよく分かった。

「で、ここで君には一つ、残念なお知らせがある」

「は？」

「君の場合は記憶を消したところで、さっきのような乱闘に巻き込まれる可能性は消えず、また身の回りの人間の常識と自分の常識の溝が埋まることは無い」

「っ！？」

「おかしいと思わないか。高度に発達した科学技術、高すぎる運動能力、街中で普通に行われる乱闘騒ぎ、暴力による制裁、そしてそれが常識となっている人々。安心しろ、それらをおかしいと思えるのが普通だ」

「……………は、ははっ」

笑いが止まらなかった。安心したんだ、私は初めて自分を普通だと認めてもらえた。

いくらかおかしいと言っても誰も聞いてくれなかった、それどころか私がおかしいのだと言われ、両親ですら私を認めようとは決してし

なかった。

「ただ、やっぱり私がおかしかったんじゃない。この街がおかしかったんだ。」

「……………辛かった、ですね」

桜咲の指先が伸びてきて、私の頬を撫でた。その指先が少し濡れるのを見て、私は自分が泣いているのを自覚した。笑っているのに、泣いている。変な感じだな。

「……………お前の身に起こっていることについて、知りたいか？」

「……………知りたい」

「それは知ってはならないことを知ることになる。知れば、何もなくて戻れない。いいのか」

「それでも、私は知りたいんだ」

「……………わかった」

「……………この世界には、魔法がある。」

本当に、この世界はおかしいよ。

Side 彰

魔法、認識障害、そして目の前の少女の体質。全て話し終え、俺と刹那は情報を整理する少女を待っている。

「ちょっと待ってくれ、一度整理しないと頭がパンクする」

そう少女が言ってからすでに一分以上が経過している。冷めかけたお茶を飲み干して、俺は暇を持て余している刹那の髪を撫でた。

「……………よし、よくわかつ……………バカップルかよ」

「どうした？」

「なんでもねえ」

整理がついたらしい少女は顔をあげたとたんになぜか不機嫌そうな顔をした。よく分からないが、とりあえずすり寄ってきた刹那の頭をもう一度撫でてから手を離し、少しだけ姿勢を正して少女と向き直る。

「とりあえず、俺たちが現段階で話せるのはこれで全てだ。そして今後、お前がどうするかについてだが……………」

「記憶を消すか、殺されるか、力を得るかだろ？」

「ああ。だが、喜べ。俺たちの場合はそこにもう一つの選択肢を追加できる」

「もう一つ？」

「知ったうえで、知らないふりをして生きる事」

少女が目を見開く。絶対に行われることの無いこの選択肢は、俺たちだけが用意できるものだ。

「たとえば、お前にこれを説明したのが麻帆良の教師だったとする。教師たちは説明することも無く、お前が目撃したものについての記憶を消すだろう。それとは別に、気性の荒い魔法使いだったなら、問答無用でお前は殺されただろう。もしくは、今はいなくても将来、記憶を消すことも殺すことも出来ないような未熟者がこの街に来たとして、そいつだったらお前は巻き込まれる形で流されるままに世界に巻き込まれただろう。分かるか？俺が今言ったことに共通する

点」

「……………なんだよ、それ。全部が全部……………」

肩が震えている。刹那の目が細められ、少しだけ憐れむように少女を見た。まあ、そうだろうな。だって今言ったことは全て本当にあり得たことで、同情するしかないことだったから。

「私の意志が、どこにもないじゃねえかよ!!」

人権が認められないのを、かわいそうだと思わない方が無理じゃないか？

「ああ。だからそうしないために、気づかれないように認識阻害なんてことをしているんだ。それくらいするんだったら、最初から一般人を巻き込むという話だが……生憎、俺には上が考えることは分からん」

「本当だよ畜生……………」

「で、話を戻すがそういった点で、お前が俺たちに会えたのは幸運と言える」

「は…？」

「最初に言っただろう？俺たちは『お前が望まなければ』何もしないと。お前はそのまま、別に何事も無かったかのように帰ることも可能なんだよ」

「……………」

正直に言えば、俺はわざわざこの少女を巻き込むつもりは無い。少女がいなくても俺と刹那は一緒にいられるし、言ってしまう俺の望みは刹那がいればそれで叶うから。

ただ、その刹那がこのかを大切な友達だと思っているから、このかが俺たちの傍で生きられるように修行をするし、そのために必要だ

からエヴァとも関係を築く。そしてそのエヴァとの関係を築く上で必要だから、茶々丸たちとも交流を深める。たったそれだけのことだ。刹那がいるなら、俺は未練もなく今ある刹那以外の全てを切り捨てられる。そういうことだ。

だから目の前の少女がどんな選択をしようとも俺には問題にならない。あの時、刹那が助けることを望んだから助けただけに過ぎないか。この後の少女の生き方に刹那が何かしら望むものが無い限り、俺は自分から手を出したりはしない。

「……………一つだけ、確認したいんだけどよ」

「なんだ」

「私が記憶を消しても、このまま帰っても、私の周りの非常識が消えることは無いんだよね？」

「お前が死なない限りな」

「死ぬのは嫌だ」

少女が静かに首を振る。ああ、なら決まりだな。

「———生きたい。そのための力が、私はほしい」

決意した少女、千雨は強い光を宿した目で俺と刹那を見つめていた。

彼女が望んだこと（後書き）

結構、いろんな話で千雨はハーレム要員になっているような…？気のせいですか、そうですか。

千雨はなかなか好きです。現実主義ですしいい加減に、この話にもツッコミが必要かなと思いましたので……リア充乙とか言い出さないといけれど。

修行の合間のバカッフル

Side 刹那

私たちが修行する際に借りる別荘、ここも随分と賑やかになったなと思う。いや、正確には賑やかになったのは、私の周りなのかもしれない。

「いい調子ですよ、千雨さん」

「ざっけ、んなーいいっ、調子もっ、なにもっ、ねえよっ!」

急接近から刀を振るい、それを千雨さんが避ける。その繰り返し。かれこれ数時間、こうして彼女の修行に付き合っていた。

「あはは、ちーちゃん前よりも持つようになったなあ」

「はんっ」

厚みのある西洋魔法の本を開いたこのちゃんが、そう言いながら笑って言うと、その隣でエヴァさんが小さく鼻で笑っていた。

「避けるばかりじゃなく反撃もしろと言うのに、何をやっているんだか」

「無茶っ、言うんじゃねえ!」

「言い返せるうちはまだ余裕がありますね。それじゃ、もっと速くしますよ」

「っ!」

接近する速度と刀を振るう速度を少し上げてみる。千雨さんの顔が

面白いくらいに青くなった。このちゃんから少し離れたところでは、真名が銃の整備をしていて、茶々丸さんとチャチャゼロさんはこちらの様子を見ているようだった。

こうしてみると、やっぱり賑やかになったと思える。彰と会ってからは彰と二人、このちゃんと出会って三人。麻帆良に来てからは、真名にエヴァさん、茶々丸さんにチャチャゼロさん、最近になって千雨さんと、一気に八人だ。

「――刹那」

声が聞こえて、動きを止め刀を収める。千雨さんも修行が終わったのに気付いて、ひどく疲れたように息を吐き出してその場に座り込んだ。

「おつかれ。千雨はどんな感じだった？」

「見切りと判断力、瞬発力はだいぶ良くなっている。逃げるだけなら、大抵の魔法使いから逃げられる」

「そうか、それならひとまずは安心だろうな」

とりあえずは麻帆良で頻繁に起こるトラブルから逃げられるように、ということと千雨さんに課せられたのが、逃げる修行。おそらくは彼女に最も必要とされる能力だった。

「戦闘になれば強さが必ず必要となる。だが、今は強さ以上にある程度のことから……主に麻帆良で起きるトラブルから逃げられるようになったほうがいい」

と彰が言ったのは、千雨さんの修行初日。まあ、基本的にトラブルに巻き込まれなければ強さが必要な戦闘に遭遇する可能性は低くなるし、今まで一般人だった千雨さんにいきなり武器を持たせても使

いこなすのにはだいぶ時間が必要になるのだから、手近なところから、と言ったところか。

けれどももちろん、逃げの修行だけに徹するということは無いのだが。

「んじゃ、次はカードの修行だな。千雨ー」

「……………あ？」

「一度、みんなでお茶するから。その後に修行再開だ」

「ああ……………うん」

疲れているらしい千雨さんは、頷いた後もしばらく動かなかった。

Side 千雨

魔法を知ってから、早いものでもうすぐ一カ月だ。エヴァンジェリンのだという別荘とやらを使っているせいで、日にちの感覚が狂ってきているが。

毎日別荘内を行き来し、平日だと大体朝に二日、学校が終わってから三日と過ごしている。一日に五日間を体感するから、気持ち悪いっただけ。

ちなみに、身体的に影響は無いのかと思っていたら、老化を防ぐ魔法道具を渡された。これで別荘でいくら過ごしても問題ないという話だ。

で、その五日間に何をするのかと言えば、ひたすら逃げの修行という名の命がけの鬼ごっこだ。

まあ、確かに逃げる事が出来れば、関わる事が無ければ私にとってはそれが一番良いことだ。余計なトラブルにも巻き込まれず、前よりは非日常に遭遇する率も減る（今の私の日常が既に非日常は百も承知だが）。

で、修行基鬼ごっこ、それは桜咲を相手に攻撃を避けるだけの簡単なお仕事——なわけがない!!

普通に、一瞬姿が消えたと思ったら目の前に突然現れるし、かと思ったら後ろにいるし。当たれば死ぬような速度で殴ろうとしてくるは、拳句には「慣れてきたようなので」って現実時間で一週間経つ前に刀を持ち出されるとか、私にどうしろってんだよ。

そのころには今度は武器ってことで、瀬野から魔法道具を渡された。それについては……後でいいか。

そんなわけで命がけの修行から私が唯一解放されるのが、このお茶の時間なわけだが——

「刹那、ほら」

「ん……」

瀬野がケーキに乗っていた苺を指で掴んでそのまま桜咲の口元に。そしてそれを当然のように食べる桜咲。相変わらずのこいつらに私は

「だあああ、いい加減にしろよバカップルが!!」

キレた。

「……突然どうしたんだ」

「突然じゃないだろうが! 毎回毎回私が何度同じことを言っていると
思う!?!」

「「さあ」「」」

「だあああ!!」

目の前に座るこいつらのせいで、このお茶の時間すら私に休息は無い。

二人掛けの席にやけに近い位置で座り、お茶を飲みながら普通に瀬

野は桜咲の頭を撫で桜咲が甘えるように擦り寄る。最初見たとき、マジで固まった。

桜咲と言えば近衛や龍宮と一緒にいるのをよく見かけたが、それ以外の人間にはひどく素っ気ない。最低限の話しかしていないようで、他人に関心が無いようだった。

その桜咲が、人が変わったように瀬野に対しては甘えたがる。頭を撫でられ、抱きしめられ、名前を呼ばれる。そうするととても幸せそうに笑うのだから、クラスの無表情さが嘘のようだ。

「……お前らはもう少し、羞恥心つてのを覚えろ。そして周りの目を気にしろ」

「俺は刹那さえいれば周りなんてどうでもいい。それに、別に恥ずかしいことじゃないさ。なあ？」

「そうだな。周りを気にしたところでいいことも無いし……彰が恥ずかしくないなら、何も問題ないだろ？」

「——駄目だこいつら」

「まあまあちーちゃん、せっちゃんと彰君には何言っても無駄やし、諦めたほうがええよ」

「私はもう、二人はこういうものだと思うことにしたよ」

「無駄な足掻きだな」

追い打ちをかけるように近衛、龍宮、エヴァンジェリンの三人に言われて、私は仕方なく心の中で叫んだ。

「（リア充乙!!!）」

「それじゃ、まずは火から。次に水、木、風、土と変えていく。目標は五秒」

「一属性に一秒かよ」

「戦場では一瞬が命取りになるから。効率よく魔力を注ぎ込めるように、ひたすら修行だ」

「はいはい」

千雨がカードを指先に挟んで精神を集中させる。俺はスウツと息を吸い込み

「はじめ!!」

魔力が流れる、カードに注ぎ込まれず無駄に垂れ流される魔力があるな。

千雨に渡した魔法道具『カードマジック』。六枚一組のカードで、一枚に五つの魔法を登録でき、魔力を込めて魔法を引き出す魔法道具だ。

全て登録しておけば、合計三十の魔法を組み合わせでの戦闘が可能となり、登録できる魔法も攻撃魔法、補助魔法、はたまたその場所に变化を与える領域魔法と、様々な種類がある。登録自体は千雨ではなく俺がすることになるが、一度登録してしまえばそれでいい。呪文も何もいらず、必要なのは効率よく魔力を込める器用さと魔力を組み合わせる戦略性だ。

ちなみに、こうして説明している間、千雨がどうなっているのかと言えば、周りに炎が渦巻いたり水が溢れたり木が生えたり、と一秒ごとに目まぐるしく変化している。

「——っはあ。どうだった？」

「惜しいな、六秒。まだ魔力が無駄に流れているぞ」

「あー、くそっ。やっぱりか。そんな感じがしたんだよなあ」

今、千雨が使っていたのが攻撃魔法。五つの属性魔法が登録されており、それぞれに実態は無く炎の渦を作るだけではなく、矢の形状にして敵に放つことも可能など、自由の利く魔法が登録されている。

「呪文とか面倒なの覚えなくていいのは楽だけど、うまく調節できないんだよねあ」

「それがその魔法道具の特徴だからな。魔力だけが必要とするが、その魔力の量で威力も変わるし、解放の仕方でも違いが出る」

ヒュツと手の中に千雨のカードと同じものを創り出す。一度自分で創ったものをもう一度創るくらい造作も無い。

「たとえば」

言い終わると同時に、カードから矢の形状をした炎が繰り出される。水面を走った矢は海を裂きながら、遙か遠くで爆発した。

「イメージとしては圧縮だな。大量の魔力をカードに押しこめ、放つ時も、今みたいになるべく小さくした方が速さも出る。次に」

もう一度魔力を込め、今度は同じ矢の形状でも数百本の本数が一気に放たれる。

「こっちは拡散。別に矢の形以外にも形状は自由になる。本数を減らせば一本に込める魔力量が増加して威力が増す」

言って、カードをブラックホールにしまう。そのうち整理する必要があるな、と思いながら千雨を見た。

「それじゃ、次は圧縮をさつきと同じ順番に火から、五秒でな」
「できるか……！」

Side 刹那

別荘にあるログハウスは、見た目以上に広い。エヴァさんに聞いたところ、好きなように改装が出来るんだそうだ。

だから部屋もたくさんあり、修行中は三日間くらい寝泊りすることになるが一人一人に部屋が与えられる。それを聞いた時の千雨さんは、すごく嬉しそうだった。

そして広いのは部屋だけでは無く、お風呂もとても広い。三十人くらい普通に入れるんじゃないかというくらい大きくて、私たち全員で入ったくらいじゃどうということも無い。

「ほら、刹那。どうだ？」

「ん、うあ……きもち、い……」

「こっちは？」

「ひゃうう、いや、あきら……」

彰の指先がくすぐるたびに、気持ちよくて体から力が抜ける。敏感な場所はずいぶん、絶妙な力加減で擦ってくるから思わず声が溢れる。細めた目には涙が堪り、今にも零れ落ちそうだった。

「ああ、泣くな」

「んやあ……」

目ざとく気づいた彰が肩越しに顔を覗かせ、唇を這わせて涙を吸い

取る。間近に迫る顔に嬉しくて笑みが浮かんだ。

「あきら、もつと……」

「本当に、刹那はこれが好きだな」

「だって……彰にしてみらうのは、気持ちいいんだ……」

「刹那……」

彰の指先がまた動き始めて、私は身を震わせる。そこに――

「ついい加減にしやがれ!!」

ヒュッ、と空気を裂いて飛んでくる石鹼。それを彰が頭を傾けて避け、投げた主に一言言っただ。

「いい殺気だな」

「死ね!!」

濡れたタオルが飛んでくる。あれ、水を吸って重くなってるから、当たると結構痛い。当たること無く彰が受け止めたが。瞬間、投げた主である千雨さんは下半身は湯船に浸かったままで舌打ちする。距離がある割に、威力が昨日よりも強くなっていた。

「日に日に威力が増している。いい調子だな」

「しらねえよ!!」ってか、なんで毎度毎度あんたは当然のように此処にいやがる!？」

「昨日も答えただろう。刹那とお風呂に入るためだ」

「しれつと答えない!! 大体、桜咲も紛らわしい声出してんじゃねえよ!」

「……仕方ないじゃないですか。気持ちいいんですから」

「たかが羽根を洗ってるだけだろ!？」

千雨さんが指を指したのは、私の背中。そこには白い翼が泡まみれになっていた。

私が鳥族とのハーフであることは、みんなすでに知っている。と言っても、このちゃんは元から知っているし、エヴァさんには初めて会ったときに気づかれていたから、改めて説明したのは真名と千雨さんに対してだけだ。茶々丸さんたちはエヴァさんとセットなので除外。

修行で飛ぶこともあるし、隠しておくことも無いだろうと思ったからだった。気持ち悪いと言われたところで、今の私が傷つくことも無い（彰が怒るかは別として）。

話は戻して、いつも私の翼を彰が洗ってくれる。もう、出会った時からの習慣になっていた。

で、翼は私にとってとても敏感な場所である。軽く触られただけでもすぐたたくて堪らないのだ。それを彰は洗ってくれるのだが、どういうわけかすごく気持ちがいい。自分で洗ってもこんなに気持ちがいいことは無かったのに。

正直に言ってしまうと、私は彰に翼を洗ってもらうのが癖になっていた。というか、これはもう中毒だと思う。こうしてる間も、力の抜けた体が崩れないように必死なのだ。

「……ところで、千雨」

「あ？」

「胸が見えてるけど良いのか？」

「……………！！？」

ばしゃんと千雨さんが肩まで一気に浸かる。確かに、さっきまでの千雨さんの体勢は物を投げてきた時のままで、胸が丸見えだった。

「……………！！！」

声にならない声で千雨さんが叫んでいる。彰に翼の泡を流してもらいながら横目で見ると、顔を真っ赤にしていた。

「（かわいいのになあ……）」

私なんかよりずっと可愛いのに、どうして眼鏡をしているんだろう。今度、聞いてみようかな。

「見られた、うああ……」

「大丈夫やってちーちゃん。ちーちゃんすごくスタイルいいんやし」

「それに、彰は刹那以外は眼中に無いからね。何も心配することは無いよ」

「そういう問題じゃねえだろ……」

湯船の方は、何だかとても楽しそうだった。

ちなみに、彰の部屋のお風呂はあまり広くないので、湯船に入るときは彰に抱っこされます（翼はしまうけど）。

「こっちに来るんじゃねえ……」

「……俺に湯冷めしろと？」

「湯冷めして風邪ひいて死ね……」

彰と二人で湯船に入ろうとしたら、千雨さんに全力で拒否されていた。主に彰が。

……彰、千雨さんに嫌われることをしたのか？

修行の合間のバカップル（後書き）

いまさらですが、魔法とか魔力とか自己流解釈多大ですので、間違っても原作と混合しないようお願いします……あれ、前も言いましたっけ？

とりあえず、千雨の基本スタンスについてはこんな感じですが、ね……？いい加減に原作に突入したい作者です。

月夜に震える

Side 茶々丸

そこに向かう途中で、私は意外な方と会いました。

「あれ、茶々丸さん？」

「……桜咲さん」

不思議そうな声に振り返ると、制服姿の桜咲さんがいました。授業も終わったばかりの今、おそらく帰り道でしょう。鞆も持っていることですし。

「刹那でいいですよ。エヴァさんもそう呼びますし」

「では、刹那さん。貴方の帰り道は別の道では？」

「ああ……彰と買い物に行く待ち合わせをしているんですけど、まだ時間もあるので。少し寄り道です」

「そうですか」

常に一緒に行動しているように見受けられましたが、このあたり彼らは自由なようです。生活時間が違いますから、当然なのかもしれませんが。

「買い物が終わったら、またお邪魔しますね」

「どうぞ、マスターも楽しみにしておられますので」

「そうなんですか？ ちょっと意外ですね……」

マスターはあまりそういったことを言いませんので、知っているの

は私とチャチャゼロさんだけです。言っとマスターはいつも私のネジを巻きますので。

「ところで」

私がマスターにネジを巻かれる可能性について考えていたところ、刹那さんが私の腕に持つ袋に目を付けました。

「それは？」

「これですか。これはですね——」

中身を一つ取り出して、これから行く場所について説明すると、刹那さんが笑顔を浮かべました。

「私も行つていいですか？」

私は頷きました。

「可愛いですね」

一匹の子猫を抱えて、刹那さんが目を細めて呟きます。耳の付け根のあたりを優しく撫でると、子猫は喉を鳴らして刹那さんに擦り寄りました。

その横で私は、袋から取り出した猫缶を開けて、他の子猫たちに与えます。

「野良猫、でしょうか？」

「そのようです。一月ほど前に親猫が死んだようで、今はこの子達

だけです」

「茶々丸さんは、それより前からこうして餌やりを？」

「はい」

刹那さんに抱かれていた猫が食事に参加します。袋から器を取り出して猫用の牛乳を注ぎ、その傍に置きました。一匹ほど餌から離れ飲み始めるのを、刹那さんはぼんやりとした様子で眺めていました。

「刹那さん？」

「……茶々丸さんがいなかったら、この子達はどうなっていたんでしょう」

「わかりません。幸いにもこのあたりには他の野良猫や野良犬はいませんが、子猫のうちからどれだけ自力で餌を得られるかにもよりますし」

「もしかしたら、死んだ子もいたかもしれませんね」

「……そうですね」

世界は弱肉強食で、弱いものに優しくありません。それはこの子猫たちの世界でも変わらないでしょう。

「そう考えると、茶々丸さんに出会えたこの子達は幸福ですね」

「いえ、自力で餌を取らずこうして与えられるのを待つことに慣れてしまっていますから、野良猫としては不幸かもしれません」

「ああ……そう考えることも出来ますね。野良猫や捨て猫に餌を与えちゃいけないとも聞きますし」

「はい」

「でも、私はやっぱり幸せだと思いますよ」

餌を食べ終え、牛乳を飲み終えた猫たちが私の周りに集まってきます。私は袋に空き缶と器を入れ、一匹を抱き上げて頭を撫でました。

「茶々丸さんの考えがどうであれ、その子たちは心底貴方が好きなようです」

「餌を貰えるからでは？」

「それもあるでしょうが、長く一緒にいれば想いも変わってきますよ。親猫が死んだその子たちにとって、貴方はきっと、親みたいなものなんじゃないですか？」

「……親になったつもりはありませんが、こうして寄って来てくれると、おかしな気分にはなります」

「おかしな？」

「おそらくは人間でいう嬉しいに該当する感情では無いかと。心を持たない機械である私には、理解しがたいことです」

「……」

言いつと、刹那さんが数回の瞬きをした後に、小さく首を傾げました。いつの間にかその手には最初に刹那さんが抱いた猫が抱かれています。懐いたようです。

「それが嬉しいのだとわかる時点で、心があるのでは？」

「……いえ、私は機械ですから。そうプログラムされているだけです」

「……茶々丸さんが猫を好きだと、プログラムされているのですか？」

「それは、わかりませんが」

私が成すべきことはマスターのお世話であり、命令もまたマスターからのもののみ実行します。ハカセたちも、それ以外に細かなプログラムはしてはいないと思うのですが。

そう説明すると、刹那さんは

「なんだ」

そう納得したように呟き、笑みを浮かべました。

「茶々丸さんは、凄く優しい人なんですね」

「……？なぜですか」

「だって、命令もされてないのにこうして子猫たちの世話をして、頭を撫でてあげてるじゃないですか。それって、この子達を好きじゃないと出来ないことですよ」

「……そう、でしょうか」

「はい。それに、気づいてないですか？」

子猫の両手を掴んで遊びながら、刹那さんは言いました。

「茶々丸さん、ずっと笑ってますよ」

「え……？」

「笑うのって、嬉しいことや楽しいことが無いと出来ないことですよ。それに、心が無いとその嬉しいことを感じることも出来ませんほら、やっぱり私の言った通りです」

「言った通り？」

「心があるから嬉しいと感じて、この子達に優しくできる。その気持ちを感じて、この子達も貴方が好きになっただんですよ」

ね、と刹那さんは私の周りにいた子猫たちや自分の抱きかかえた子猫に問いかけます。それに答えるように、にゃあ、と小さな鳴き声がいくつも聞こえて、またおかしな気持ちになります。

私の動力部分である左胸のあたりが、温かくなるような、そんな風に感じます。それになんでしょう、顔のあたり、口元が私の意志とは関係なく動いています。

「あ、また笑いましたね」

「……私は、笑っているのですか」
「はい」

頷く刹那さんに、私は指で自分の顔に触れてみました。確かに少し吊り上っています。

下を向けば抱きかかえてる子猫と目が合います。その目に映った私は確かに、笑っていました。

「……刹那さん」

「はい？」

「機械である私が、心を持つのはおかしいことでしょうか」

「私は、茶々丸さんが心を持つのが嬉しいですよ？」

「私はそれで、いいのでしょうか」

「それを決めるのは茶々丸さんです。でも、そうですね……」

「……」

「彰やエヴァさんに聞いてみたらどうですか？あ、他にはこのちゃんや千雨さんも。きっとみんな、私と同じだと思いますけど」

「……そう、ですね。今度、聞いてみます」

言って、けれど刹那さんの答え、それだけで今は十分な気がしました。
た。

……今日はいつもより少しだけ長く、この子達を抱いていたと思います。

夜に行われる刹那の修行は、真名からの依頼が無い限り行われない。別荘にて夜の暗闇での修行も行えるからだ。

だから当然、夜に予定が無い日が存在する。そういった日の彰と刹那が眠る時間は、日付が変わる前とこの歳にしては随分と早い方だった。

ベッドに入って刹那が眠るのを見届けてから眠った彰は、夜中に自分の隣で動く気配に目は開けないながらも気づいていた。刹那が起き上がりベッドから出て行ったのだ。

最初はトイレかと思ったそれも、窓から外へ出て行ったと分かり目を開ける。開け放たれた窓から吹き込む風に、カーテンがゆらゆら揺れていた。

「刹那？」

起き上がり窓の元へ。外を見ても刹那の姿が無く、上を見上げると月に重なるようにして黒い影を見つけた。人型の影の背中には、翼が生えている。

「……見つかったら面倒だな」

夜中とはいえ一般人も起きてる可能性がある。そう思ったけれど、すぐにどうでも良くなった。彰と刹那にとって、見られたところで気にすることでは無かったからだ。

やがて、一向に降りてくる気配のない刹那に、彰はブラックホールから黒色のジャケットを取り出すとそれを羽織り、毛布を一枚持つて自身も窓から飛び出した。瞬間、ふわりと彰の体が宙に浮き、軽く足で蹴る動きをすると空中であるにも関わらず、その体が上昇していく。

魔法道具『ウィングジャケット』。ジャケットを着ることで浮遊能力を追加し、進行方向や速度を足で空気を蹴ることで調節できる。

すぐに刹那に近くまで来た彰は、パジャマ姿のままで滞空する刹那に苦笑した。

「風邪をひくぞ」

「彰——」

翼があるので毛布は前から。受け取った毛布に顔を埋めた刹那は、空を見上げて目を細めた。雲の無い、星と月に光る綺麗な夜空だった。

「どうかしたのか？」

彰は、空を見上げる刹那に問いかける。そうすると彼女の瞳が彰に向けられた。

「……八年、経ったんだ。彰と出会ってから」

「ああ……とても、早かったように感じるよ」

「私もそうだ。とても早く感じられた」

思えば、彰と刹那が出会ったのはいつの季節だったか。最初に会った村は火に巻かれて暑くて、彰も刹那もそこどころではなかったから。

それでも、二人の時間、このかと出会ってから三人の時間、ここに来てからのエヴァや真名たちとの時間。どれも、止まることなく流れて行った。

「早すぎて……今日、恐くなった」

「刹那？」

零れた言葉に、彰は目を丸くして驚いた。刹那の目は彰では無く、

眼下に広がる街並みに向けられている。

「茶々丸さんに会った話はしただろう？」

「ああ」

「あの猫たちは……今は生きているあの猫たちは、私たちより早く死ぬ」

「……そうだな。生き物は皆、いつかは死ぬさ」

「死ぬのを恐いとは思わない。ただ、思うんだ」

「なにをだ？」

「半妖である私は、彰と同じように生きて、死ねるのか」

「……」

その時の刹那の唇が震えていたのは、きっと寒さのせいでは無い。言われた言葉に、彰は腕を伸ばし刹那の体を抱きしめると、真っ白な髪に顔を寄せて答える。

「約束しただろう。刹那が死ぬときは俺も死に、俺が死ぬときは刹那を殺してやるって」

大切な人を亡くした刹那が、もう二度と大切な人を亡くさないように。死の瞬間まで約束した。

覚えてる、そう頷いた刹那の頭を撫でて、彰は続ける。

「死の瞬間までずっと一緒にいればいい。俺は刹那がいれば、それだけでいいんだ」

「私も、彰がいれば十分だ。私はお前に殺されたい。それだけで、約束だけで十分なはず、なんだ」

刹那の腕が背中に回されて、ジャケットをギュッと握りしめる。顔が見えなくても、その表情が言い知れぬ不安に彩られているのは確

かだった。

「半妖は頑丈だ。生命力も強い。だから、もしもを考えてしまっ
てもしも、生き残ってしまったらと。生きてしまったら、と」

「……そんなの、俺が許すと思うか」

「ああ、許さないだろうな。でもな、消えないんだ。私は、彰、お
前が死ぬ瞬間が見たい。彰に私が死ぬ瞬間を見てほしい。そうすれ
ば、私はもう失わずに済むんだ」

刹那の声は震えていた。

「あの猫たちは、茶々丸さんが好きなんだ。もし突然、茶々丸さん
がいなくなったらどうなるんだろうな。野生に帰って生きるのか、
それとも生きることも出来ずに死ぬのか。私は、彰。きつと狂うよ。
彰がいなくなってしまったら、私は、狂ってしまう」

「……死ぬことも無くか？」

「ああ、きつと死ねない。彰が殺してくれると言ったから、死ぬこ
とも出来ずに狂うだろう。なあ、彰。私はもう、お前がいないと駄
目なんだ。お前がいるから今の私があつて、こんなにも幸せで。あ
の影が言ったように、私の幸せは彰がいるから存在するんだ。彰が
いないなら幸せなんてあるはず無くて、私が生きる意味も無いんだ。
だから、もしもが恐い。死ぬことよりも、何よりも彰が消えること
が、恐いんだ」

刹那がここまで明確に、自身の想いを話したのは初めてのことで
た。彰と刹那にとって言葉はそれほど必要とされることはなく、た
だ互いの存在と約束がすべてを何よりも雄弁に語っていたから。な
のにこうして吐き出される想いは、それほどまでに刹那が恐怖を覚
えている証であり、彰にとってはその身を震わせるほどの歓喜へと
繋がる想いだった。

——刹那の全てが、彰を求めているのだと

それがただ嬉しくて、抱きしめる腕に力がこもるのを抑えられなかった。

「——刹那」

「彰……」

抱きしめたまましばらくして、彰は一つ決意すると、ゆっくりと腕から力を抜き刹那の顔を見つめた。

赤い目が綺麗だった、白い髪が素敵だった。自分の出会った刹那は、とても小さく儂くて。

「俺と」

欲しくて、求めて、欲しがられて、求められて

「契約しよう——」

一つになりたいと、思った。

月夜に震える（後書き）

契約、は仮契約とは全く違ったものになりますが……次で第二章も終わりの予定ですので、もうしばしお付き合い下さいますよう。

茶々丸の感情とかプログラムとかも例になってこの作品のみの設定というか捏造になりますのでご理解のほどよろしくお願いします。

共にあるために

Side other

寄せる波が見えない壁にあたり、不自然に跳ね上がる。砂浜との境目に存在する壁は、海に大きな四角い箱を作っていた。その箱の中、海の真上に浮かべられた大きく平らな円形の石版。

「——始めよう、刹那」

「はい、彰——」

中央に彰と刹那は立っていた。

二人の様子を箱の外から眺める者たちがいた。このかたちだ。

「おい、近衛。あいつらは何をするつもりだ」

エヴァは訝しげに遠くの二人を眺めながら、真剣な眼差しで二人を見つめるこのかに問いかける。

このかは視線をそらすことなく答えた。

「契約する、言うてた」

「ほう、仮契約か」

「仮契約？」

納得が言った風のエヴァの言葉に、このかは言葉だけで問い返す。

それにエヴァよりも先に、真名が答えた。

「西洋魔法使いが自分のパートナーと結ぶ契約のことだ。魔法使いは呪文詠唱中、無防備になる。その間の魔法使いを守るのがミニステル・マジさ。契約を結べば、身体能力が強化されたり、契約によって作成されるパクティオーカードによって、固有の武器が手に入る」

「ってことは、桜咲が瀬野のパートナーになるのか？」

「だろうな。大方、彰が主で刹那が従者といったところか」

確かに、仮契約であればエヴァの言った関係になるだろう。

——二人の結ぼうとしている契約が、『仮契約』ならば。

「違ええ」

このかが呟いた否定の言葉に、三人の視線が集まる。

「違うだと。まさか、仮契約を飛ばしていきなり本契約を結ぶつもりか？」

「それも違う。彰君とせつちゃんが結ぼうとしてるのは、エヴァちやんたちの言うような契約やない」

視線は二人に向けられたままで、このかは彼女らしくも無くひどく淡々とした声音で続けた。

「彰君とせつちゃん、一つになりたいんやって。そうしないと不安だから、お互いがお互いを失くさない契約を結ぶって」

「なんだそれは。まさか食うつもりだとでも？」

「そんなことしいひん。それじゃ、どっちかがどっちかを失くしてまう。二人は生きているうちはずっと一緒に、死の瞬間も一緒にお

る為に契約するんや」

「……正直、契約内容が思いつかないな。どんな契約なんだ？」

「——互いの全てを共有する、契約」

ふわりと、風が吹いた。このかは右手で乱れる髪を軽く押さえ、そのままで話し続ける。

「片方が両手を失う怪我をしたなら、それぞれが片手を。腕を斬られたならば、それぞれに深い傷を。どれだけの傷を負っても、すべては半分になる」

「……それが、契約か？」

「そう言うてた。でも、二人にとって一番重要なのは、そこやない。一番、大切なのは——」

風がやんだ。

「——命すらも、共有すること」

「ふざけるな！！！！」

エヴァの叫びが響き渡る。襲ってきた威圧感に、エヴァの後ろにいた千雨が膝をつき、真名は顔をしかめた。

このかはほんの一瞬だけ彰と刹那から視線をそらし、エヴァの表情を見た。怒っているのは明白だった。

「それが『契約』だと？」

「そうや。絶対に、死ぬ瞬間まで二人で生きられるように、どちらかが生き残ることがないように、契約するんや」

「はっ、違うな。あの二人がしようとしているのは契約ではない。ただの『呪い』だ」

「……………」

エヴァの否定に、このかは何も言わなかった。彼女も少なからず感じていたからだ。

それでも彼女は何も言わず、そして、二人がああ場所に立つのを止めようとは微塵も思わなかった。

「互いが互いを呪い、そうして初めて成立するものだ。命を共有する契約など、聞いたことも無い」

「エヴァちゃんが言うなら、そうなんやろうな。でも、二人は本気や」

そう言っただけが指差したのは、見えない箱。

「彰君の魔法道具でな、『永久の幸福』って言うんや。中に入った人、全員が外に出ることを望まない限り、誰も外に出られず、外から何をして壊すことはできないんやって」

「……彰の創った物なら、本当にそうなんだろうな。じゃあ、もう止めることはできないわけだ」

「そうや」

「——なんで、止めなかったんだよ」

砂に座り込んだ千雨が、理解できない様子でこのかを見て、彰と刹那を見た。ここから見る二人は、ただ向かい合っているようにしか見えない。

「おかしいだろ。普通、お互いの怪我を背負ったりするか？自分の寿命が縮むのを分かかって、そんな心中みたいなこと……どうして止めずにいられたんだよ！？」

「………そんなん、当たり前やん」

このかの足が一步前へ踏み出される。すぐに壁に当たって、ただ手を伸ばし壁の向こうの二人を見つめた。

「うちがどれだけ、二人と一緒にいたと思うているん？」

止められるわけ、ないやん。そう言ったこのかは、こつんと、頭を壁に当てた。

「彰君がどこから来たとか、どうしてあんな不思議なことが出来るのかとか、うちは何も知らん。でも、彰君にとってせつちゃんがすごく大切なのは、それだけは分かる。誰よりも、彰君はせつちゃんを求めてて、自分のものにしたって思ってる」

初めて出会ったあの日、刹那と約束を交わした彰が、彼女を抱きしめた時の瞳。このかは幼いながらに、彼が刹那を求めているのに気付いた。眠る刹那を抱きしめる彼の笑みに、気づいていた。

「せつちゃんにとってもそうや。大事な人を亡くして、もう失いたくなくて。大事な人を失くしたくないって思うてる。誰よりも、何よりも、彰君だけはもう失くしたくないって」

嫌いだと叫び、泣きながら怒り狂う姿に、悲しくなった。また奪われることを恐れ、すべてを憎む姿に、彼女から彼を取ってはならないと思った。そうしないと、彼女は全てを嫌ってしまふと思ったから。

「せつちゃんには彰君が、彰君にはせつちゃんがいさえすれば、それでいいんだよ。他は必要ない。二人がうちを友達と思うてくれても、大事に思うてくれても。次元が違ふところで、二人はお互いを求めている。それで、一緒にいられることを本当に幸せだと思うてる」

お互いがいればいい、なんてわかりやすく、危うい幸せ。その儚さに気づきながら、二人は互いを求めることをやめなかった。それをこのかは、ずっと見てきた。二人の傍で、ずっと。

「うちな、ずっと続いてほしいって思ったんや。幸せがずっと続いてくれればって。それで、二人の幸せが終わるまで、見届けたいって。見守りたいって、思ったんや」

たった二人で完結した幸せの世界に、このかは入ることは出来ないけれど。それでも二人は、このかを見てくれるから、それだけで彼女には十分だった。

「できるなら、最後まで傍にいたいんや」

手をついた壁の向こう、箱の中。二人の幸せのように閉じた世界。見守ることは出来ても、決してそこに手は届かない。けれど、できるならば傍で、見守り続けたかった。

「……………狂ってる、みたいだな。互いが、互いに」

互いに溺れて、狂ってしまった。千雨の呟きに、このかは小さく笑みを浮かべた。

「そんなん、とっくに狂ってたわ」

二人が出会った、あの時から既に。狂うほどに、互いを求めていた。

箱の中は、魔力と気に満ちていた。混ざり合わず、反発もせず、ただそこに満ちるだけ。

その中心で、彰と刹那は互いを見つめている。二人の契約は、まだ結ばれていない。

「なあ、刹那」

「なんだ？」

「俺がお前の運命を歪めて、お前の幸せを歪めたのだとしたら、お前は どうする？」

「別に、どうもしないさ。彰がいる、それが私の幸せであることに、変わりはない」

「本来ならお前は俺と出会うことは無く、もっと別の形で幸せになれたとしたら？」

「考えたくも、無い。いや、考えたところで意味が無いな。言っただろう。今の私は、彰がいるから幸せなんだ。まさか、疑うつもりか？」

「まさか。疑うことなんて、出来ないさ」

そのためだけに、彼は『此处』に来て彼女と出会った。そうなるように、彼女に水を与え続けた。

そうしてこれから先も、水は絶えず与え続けられる。それが彼の望みであり幸せで、彼女の幸せなのだから。

「ずっと一緒にいような、刹那」

「ずっと一緒にいてくれ、彰」

互いの手を取り、強く握りしめる。迷いなど、最初から無い。

『『すべてを求める契約を、ここに交わそう』』

声が重なる。

『俺が求めるものは——』『私が求めるものは——』

魔力と気が渦巻いて、二人を包む。

『刹那』『彰』

そして二つは弾け、世界が光に満ちる。何も見えず、何も聞こえない世界で、互いの握る手だけが確かな存在を伝えていた。

「ほら、刹那。あーん」

「あーん」

ぱく、と差し出されたフォークに刹那が食いつく。二人の前にはお茶とケーキ、修行の合間の見慣れたお茶会の光景だった。

「だからテメエらは人前で堂々とイチやつくんじゃねえっ!!」

そう千雨が怒鳴るのも含めて、見慣れた光景だった。

「まあまあ、ちーちゃん。そう怒らんといてえな」

「そつだぞ長谷川。ああ、食べないなら苺は私がもらおう」

「誰がやるかつ」

横から伸びてきたフォークを右手に持つフォークで阻止する。舌打ちが聞こえた。

その向かいで彰が、感心した風に千雨を見て言った。

「反応速度は悪くないな、切り替えも素早いし……この分なら、二人相手でもやれるか」

「はあ……！？まさか——」

「次の修行は、俺と刹那から逃げるのに変更な」

「死ぬわ……！」

生か死で死しか感じられないことを言いだした彰に、迷わず怒鳴り声をあげた。叫んだ彼女の背中には嫌な汗が多量に流れている。しかし、楽しみだと細められた彰の『赤い瞳』を見た瞬間に、それが冗談じゃないと知って千雨は呆然とフォークを取り落した。

「あ、そうや、せつちゃん。ちーちゃんとの修行終わったら、ちょっと付き合ってほしいんやけど。彰君も」

「ええよ、このちゃん」

「買い物にでも行くのか？」

「有り得ない有り得ない有り得ない」と暗く呟き続ける千雨を気にした様子も無く、思い出したようにこのかが二人に言った。彰の問いにこのかは拳を握りしめ

「今日、お一人様一つ限りで卵がなんと一パック十個入りで百円なんや……！」

「へえ、それは安いな。で、それを買に行きたいのか」

「そうなんよ。なんとしても手に入れな……！」

燃えるこのかに笑みを浮かべる。彰は、それならと立ち上がり言った。

「千雨の修行より先に行ってしまうか。早めに並んでおいたほうが

いいんじゃないか？」

「いいの？」

「構わないさ。刹那、髪梳かすか？」

「頼む」

刹那を伴って別の机に座る。テーブルに置かれたままの櫛を持って、ゆっくりと丁寧に梳かしはじめた。刹那の髪が、白から黒に変わる。魔法道具『染め櫛』。梳かした髪を二十四時間、望んだ色に変える魔法道具だった。

互いが一つとなる契約を結んだ後、二人の体に変化が起こった。彰は右目が刹那と同じ赤色に、そして髪は元来の黒に刹那と同じ白が少し混ざった。

刹那は、髪が毛先の白を残して全て黒に変わった。

どうしてそうなったのか、契約を結んだ証なのかは二人にも分からない。けれど、二人とも何も気にすることは無かった。ただ、彰は刹那と同じ瞳の色を得たと喜び、刹那は彰と同じ髪の色を得たと喜んだ。

ただ、少し問題となったのが学校や店など外へ出るときだった。白と黒の混ざった髪はや片目だけ赤色だと目立つと、このかたちが言いだしたのが切欠となった。

そして協議の結果、彰の右目は黒のカラーコンタクト、髪は元の黒に染めることとなり、刹那の髪は元の白にと考えられたが、本人がせっかくだし彰とお揃いが良いと言い、同じ黒に染めることとなった。

「彰の髪は私が梳く」

「ああ」

それからというもの、二人の習慣には互いの髪を梳くというのが加わった。それを目撃するたびに、千雨から毒を吐かれるのもいつものこととなっている。

「黒髪も、綺麗だな」

「お前の色だからな」

幸せそうに笑う刹那に、彰もまた笑う。髪を一房掬い、唇を寄せた。

「せつちゃん、彰君。早くしないと置いてくえー」

「彰、このちゃんに置いて行かれる」

「急がないとな」

急かす声に、場所を交代する。丁寧な髪を梳かし、それが終わると彰は右目をコンタクトで黒に変えて、席を立った。

「行くか」

「ああ」

二人は何も変わることなく、共に歩く。もうすぐ、麻帆良に来てからの一年が終わりそうだった。

共にあるために（後書き）

これにて二章は終わりです。次回からは第三章に突入します。
ようやく原作に突入できますが、またも王道展開が待っていますの
で、ご覚悟ください。

人物設定（前書き）

三章開始にあたり、彰の周り（一応、パーティーでいいのだろうか）についての設定。

性格や明記していないところは基本的に原作通り、だと思われます。

人物設定

瀬野彰

性別：男

年齢：十八

種族：人間（転生者）

大切なものを守るためなら犠牲を問わず、どこまでも冷酷となれる。また、基本的に刹那以外には無関心であることも多いが、刹那に関わる事柄の場合は積極的に首を突っ込む。

根は真面目なため任されたことはきちんとやり遂げる。ただし、それが危害、悪影響を及ぼすものだった場合はその限りではない。彼の世界の中心は刹那である。

刹那との契約により、右目が刹那と同色の赤色で、髪が本来の黒に混じって白色。外に出る際にはどちらとも黒に戻している。

主な戦闘方法

能力である創造により、その状況に適した魔法道具を使用する。使用できる武器はオールマイティー。

戦闘において素手、武器については最強クラス。初めての武器も使いこなせる。魔力と気は無尽蔵。

ただし、純粋な魔法についての才能は皆無。また、生き物の創造も出来ない。

桜咲刹那

性別：女

種族：ハーフ（鳥族）

彰に助けられ、すべてを彰に委ねている。彼女の世界の中心は彰である。

このかは親友、真名は戦友で親友、千雨やエヴァたちは友達。彰とは別の意味で大切に思っている。

彰と気を許したこのかたち以外には関心が無く、態度も素っ気ない。彰との契約により、髪が毛先を残して黒色。外に出る際には黒に染め、目もそれに合わせて黒に変えている。

主な戦闘方法

刀を主体とした接近戦。神鳴流を習うも、我流と混合されてしまいすでに別物となっているが、特に流派の名前は無い。

実践を想定した命のやり取りの中で修行を行い続けたため、殺傷能力は絶大。また、殺人に対する躊躇も無い。

時には翼を使用しての空中戦も行え、無手でも戦える。

所有魔法道具

ブラックホール

近衛木乃香

性別：女

種族：人間

刹那と彰の一番の理解者、というよりもただの天然であり、何も突っ込まない。

彰の助言により魔法については何も知らないふりをしており、演技力はなかなかである。

友達を大切にし、共にいられるならと努力を惜しまず頑張れる心の強い人間。

主な戦闘方法

攻めに魔法、守りに呪術と攻守に優れている。ただし体力に不安が残るため攻めは遠距離から。

治癒も行えるので、補助要員としても動ける。

所有魔法道具

ブックメーカー・ブラックホール・霧の腕輪・幻影のロープ

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

性別：女

種族：吸血鬼（真祖）

呪いによって力を抑えられていたが、彰によって既に登校地獄の呪いともども解かれている。以降は、学園側に力が戻っていることがばれない様に彰から魔力を抑える魔法道具を受け取っている。

彰たちに協力的であり、このかの魔法の師匠を引き受ける対価として週一で彰の血をもらえてご満悦。

ナギの息子が来るまで学園にいるつもりだったが、彰や刹那たちに興味を抱き面白がっている。

龍宮真名

性別：女

種族：ハーフ（魔族）

刹那の相棒で彰の顧客。友人としても戦友としても刹那との相性が良い。

報酬次第で仕事を引き受ける。夜の警備では彰に依頼して、学園側に内緒で週に何度か刹那と仕事をする。

彰に情報を提供するので、自身も裏の情報には詳しい。

主な戦闘方法

原作と変わらず、銃で遠距離から狙撃。ただし、彰から貰っている魔法道具による狙撃もあるので危険度は上がっている。

所有魔法道具

魔力の開門・送還の撃・針の地獄耳・ブラックホール

長谷川千雨

性別：女

種族：人間

認識障害が効かない特異な体質。そのためによく乱闘に巻き込まれたり、非現実を目撃したりと苦勞が絶えない。

魔法の存在を知り、自分で自分を守るために彰たちから修行を受ける。

しかし、彰と刹那の関係とそれに対する周りの反応への唯一の突っ込み要員となつてしまい、別の意味で苦勞が絶えない。

主な戦闘方法

逃走と中距離、遠距離戦。千雨の場合は基本がまず逃げることであり、無駄な戦闘はしない。あくまで自分の身を守ることが第一である。

ただし、避けられない戦闘、または自分以外の何かを守る戦闘である場合は乗り気ではなくとも戦える。

六枚のカードで三十種類の魔法が使える、それらを組み合わせた戦い方をする。

主に、火や水などの属性魔法、速度をあげたりするなどの補助魔法、その場所に変化をもたらす領域魔法とあり、他にも種類がある。

所有魔法道具

カードマジック・ブラックホール・不可視の盾

人物設定（後書き）

あくまで参考程度にお読みください。たぶん、登場回数が多いメン
バー……のはずです。

茶々丸たちは……おいおい、書ければいいなあ。

魔法道具設定（前書き）

この話にて出てくる、主人公が作成するオリジナル魔法道具についての紹介です。

魔法道具設定

共通点

見た目は彰の趣味。リングやブレスレットは、装着せずに持っているだけでも魔力さえ箆めれば効果を發揮できる。

リングタイプ（指輪）

『ブックメーカー』：登録した本の中から必要な項目のみを抜き出して纏めた本を新たに創り出す。蔵書保管庫など、保管庫全体を登録することも可能。

『永久の幸福』：絶対不可侵の空間を創り出す。箱状の空間内にいるものすべてが出ることを望まない限り、絶対に出ることは出来ない。また、外からのどんな衝撃にも壊れることは無く、魔法道具自体を壊しても、箱が消えることは無い。全員が出ることを望めば箱が消滅する。

ブレスレットタイプ

『霧の腕輪』：装着者の魔力、気配すべてを強制的に抑え込み、他人に存在を悟らせなくする。ただし、姿が消えるわけではないので、近距離で出会った場合、影が薄い程度の認識となるので注意が必要。『ブラックホール』：異空間とのゲートを創り、物を収納できるようにする。取り出す際には、取り出したいものを思い浮かべながら魔力を箆める。

『執行の楔』：五本の十字が相手を囲み、発動者の任意、または相手が十字の範囲から抜け出そうとした場合に、強力な電撃を浴びせる。

『不可視の盾』：見えない壁で盾を作り出す。範囲はあまり広くないがその分、強度が高い。

その他形状（補助）

『幻影のローブ』：ローブを羽織ったものの姿を消す。

『顕現の粉』：小瓶に入った粉。対象者のかけられた呪いを上回る魔力を籠めて振りかけることで、呪いを視覚化する。

『断ち切りの刃』：十五センチほどのナイフ。『顕現の粉』で視覚化した呪いを断ち切り、解除するための専用の刃。呪い以外にはただの鈍器にしかない。

『テレポーター』：ビー玉ほどの大きさの透明な石。自分の思い浮かべた場所に一度だけ飛べる。飛んだ後は自動消滅。

『針の地獄耳』：細い針。これを刺した場所から数十メートル範囲内の音を、使用者と針の距離関係なく聞くことが出来る。使用者が回収を望めば手元に戻ってくる。

『ゲート』：掌サイズの水晶体。互いを登録した『ゲート』間の距離を無くし行き来できるようにする。一つの『ゲート』に複数の『ゲート』を登録可能。

『ウイングジャケット』：名前の通り見た目はジャケット。着たものに浮遊能力を付加し、進行方向や速度を足で空気を蹴り調節できる。

『染め櫛』：梳かした髪を望んだ色に変える。効果は二十四時間。

その他形状（武器）

『魔力の開門』：被弾者に寄生し、一定時間、魔力を体外に流出させる。彰曰く、学園長クラスは無理だがその辺の魔法使いなら一発で潰せるほど。

『送還の撃』：B級程度の式神や召喚獣を元の世界に送り返すことが可能。一度使用すると自動的に専用ケースに戻ってくるが、登録された魔力を再度籠めないと使用できない。五発セット。

『カードマジック』：六枚一組のカード。一枚のカードに五つの魔

法を登録できる。登録できる魔法は様々であり、合計三十種類の魔法を組み合わせて使う。ただし、原則的に一枚のカードから同時に複数の魔法を放つことは出来ない。籠める魔力の量、魔法の放ち方で威力などが変わり、呪文などには必要が無い。魔法を登録できるのは彰だけである。

魔法道具設定（後書き）

たぶんこんな感じです。はい、作者もその場のノリで創ってるんで把握してない部分が……あるかもしれません。すみません。増えてきたらまた纏めるようにしていこうと考えています。

転生者の悲しい宿命？（前書き）

ご都合主義です。無理やりです。粗が目立ちます。すみません。

転生者の悲しい宿命？

Side 彰

俺と刹那が麻帆良に来てから一年。今日から刹那たちは二年生になる。

そして、俺は――

「では、よろしく頼むぞ」

「わかりました、学園長」

教師になった。

遡ること、一週間前。刹那たちは春休みに入っていた。

いつものように昼間は店を、空いた時間には別荘で修行とお茶会を。そんな日々を送っていたところに、俺はこの日から学園長が呼んでいることを伝えられた。

「教師、ですか」

「さよう」

まったく、少しも、これっぽちも、行きたくはなかったが、それだと申し訳なさそうに伝えてきたこのかに悪い。仕方なく学園長の元に出向いた俺は、爺さんが言ってきた『頼みごと』に露骨に顔を顰めた。

「麻帆良が人手不足だったとは、初耳ですけど」

「去年まで一年生のクラスを担当してくれていた教師が、どうにも出張が多くてのお。間が悪いことに他の教師たちもクラスや部活を掛け持ちしておって、出張期間は複数の教師でそのクラスを受け持つ状態になっておる。じゃが、それじゃと生徒たちも大変じゃからの、新しく担任になる教師を探しておったんじゃ」

「お断りします」

「ふおっ!？」

長々とされた説明、というかこじ付けのようにも思えるのだが、つまりは俺にその担任をさせたいわけだ。おそらくクラスというのは刹那たちのクラスだな、出張の多い担任というのも、高畑のことだろう。その本人が爺さんの隣で苦笑している。笑ってる場合じゃないだろうに。

しかし、と考える。俺をわざわざ教師にする利益が思いつかない。そもそも俺は教師になれないというのに、この爺さんはなにがしたいんだか。

「客観的な意見から言えば、俺には教師になれない理由があります。教員免許を持っていない、持っていたとしても教師としての経験が無く、担任教師を任せるには不適任。それとは別に個人的な意見を言わせてもらえば、教師をやるうえでの俺の利益が刹那と学校でも会えるということしかありません。それは魅力的ですが、それ以上に今現在のお店で十分な収入がある、刹那とは学校終了後に毎日会っている、わざわざ教師をやる必要性を感じないと否定的な感情を俺は持っています。よって、教師になることはお断りします」

「む、むう……」

「あはは、これは……」

正直、ここまで露骨に拒否している人間を無理にでも教師にしよう

とは思わない。嫌々でやる人間に生徒たちの人生を背負わせるなど、言語道断だ。と、俺は思うのだがどうにも爺さんはそういうわけでは無いらしい。

「教員免許についてはこちらで用意しよう。担任の方も、なるべく負担が無いようにこちらで補佐する。給料の方も今のお主の収入よりも渡すでしょう。どうじゃ？」

「どうじゃ、って……はあ」

一応は礼儀を持とうと敬語を崩さないようにしていたのに、思わず溜息が漏れる。そうまでして俺を教師にしたいのか、と言いたくなつたが、ふと今年の終わりに起きる出来事を思い出した。二年生の三学期、といえば原作が始まる時期だったと、今更ながらに気づき、爺さんたちの目論みが分かった。

「裏についてか」

「……そうじゃ」

「最初に会ったときに言つたはずだ。警備を引き受けるつもりは無い」

「ああ、いや。それは必要ないんだ」

きつぱりと言つた俺に、割り込んできた高畑。視線を向けると、何を思つたか笑みを浮かべた。

「自己紹介がまだだつたね。僕はたかは」

「高畑先生だろう。刹那から聞いている」

わざわざ聞くつもりもなく、で、と俺の続きを促す。

「警備ではないなら、いつたいなんだ。俺に魔法を教えるとも言

うつもりか」

「ふおお、そんなことするわけないじゃろう。お主、エヴァンジェリンは知っておるか？」

「……………噂くらいはな。賞金首だったか」

「そうじゃ」

こう言ってくるということは、俺とエヴァの関係性を知らないということか。ついでに言えば、エヴァの呪いが解けたことにも気づいていないな。まあ、魔力が漏れないように魔法道具を渡してあるから当然か。

「どうにも、最近の彼女に不審な点が見られてのお……………」

「不審な点？」

最近のエヴァ、といえばこのかに魔法を教えたり、刹那と殺し合いをしたり、茶々丸の淹れるお茶とケーキで満足そうだったり、千雨が俺と刹那から逃げるのを鼻で笑ったり、か。

「学園結界の効力で、彼女の魔力は最低限まで抑えられている。にも関わらず、最近の彼女から感じる魔力が少し、増えてきているように感じてね」

「……………あ」

高畑の言葉に、迂闊にも声が漏れた。

「何か知っておるのか？」

爺さんの目が光ったのは気のせいじゃないだろうな。知っているも何も、思い当たる節がある。主な原因は俺で。

おそらく、このかに魔法を教える対価として週一で俺の血を吸わせ

ているのが原因だろう。エヴァに及んでいた学園結界の効力はすでに切つてあるから、魔力が漏れないようにと渡した魔法道具。あれは、効力が及んでいた時のエヴァの魔力まで気配を落とす物だった。

「（創造が甘かったな。俺の血を吸って上乘せされた魔力が、漏れてしまっているのか……）」

そうになると、時期を見て創りなおしたものを渡したほうがいいだろう。今すぐにやってしまうと、勘ぐられる恐れもある。

「瀬野君、どうかしたのかい？」

「……たまに店に来る客の中に、魔力を感じるのがいたからな。それだったかもしれないと、思っただけだ」

「ふむ、まあ魔力を持つのはエヴァンジェリンだけじゃないからのとにかく、そういうわけで少々、不安があるのじゃ。そこで……」

「俺に教師をさせて、エヴァンジェリンの監視をさせたいわけか」

「……察しが良いのう」

「遠回しでもわかりやすすぎるだろう。そんなの、そっちで調べれば良いことだろうが」

「調べておるが、どうにも手がかりがないんじゃないやよ。だからといって、そのまま放っておくことも出来んでな」

「……… 本当の目的は、それじゃないだろうに。」

溜息を押し殺して、爺さんと高畑を見やる。おそらく、ごり押ししなくても俺を教師にしようとしてくるだろう。

理由は、たぶんネギの為か。大方、裏に関わりのある俺をネギの補佐にでもしようという魂胆だろうな。そのためにも早いうちに取り込んでおきたい、と。

そうするとまだ分らないのは、なぜ俺にしたかだな。自分の知らない魔法道具から、俺の実力を過大評価したか、それとも刹那の存

在から俺の力も高いと考えたか。……まあ、俺が強いのは認めておく。

しかし、どうするか。拒否して去るのもいいが、何度も呼び出されないとも限らないし、こうして考えるとやはり『不安』というのは出てくるわけで――

「（あの子どもが来て、刹那と関わるのはなあ。いろいろと騒動も起こしていたような気がするし、それなら傍にいて刹那を守るようにしたほうが……学校で勉強する刹那の姿って、よく考えたら見てやったこと無いし）」

魔法道具で対処できる、といえば出来るのだが、刹那と一緒にいられるということが俺に考え直すように訴えてくる。そうしてようやく、結論が出た。

「……いいだろう。こちらの条件を飲むなら、教師をやってやる」

「ふおっ、本当か？」

「ああ。で、条件だが……一番重要なのを先に言っておく。俺が裏を知っていることを、誰にも話すな」

「ふおっ!？」

驚いたか。まあ、あの子どもの補佐にと考えていたなら当たり前か。反応からして、俺の存在をバラした上で俺を頼らせるつもりだったんだろう。

「学園に存在する魔法教師、魔法生徒、その他魔法関係者。誰にも俺の存在を話すな。ただの一般人としての教師という立場なら俺は引き受けるが、裏に関わる人間としてそちらの事情に関わるつもりは無い。よって、俺に対して裏の依頼や頼みごとをしないでもらう」

「なら、エヴァンジェリンのことも自分は手を出すつもりは無いってことかい？」

「向こうが俺に気づいて喧嘩を売ってきたなら買っが、それ以外は何も。まあ、一般人の俺に対して向こうが友好的な態度を示したなら、俺は俺で普通の付き合いをするが」

「む、う……分かった。いいじやろっ」

渋々、と言った様子で頷く爺さん。あれは、まだ諦めていないな。しかし今それを指摘するのも話を長引かせるだけなので、あえて無視した上で他の条件を告げる。

「あとは、教師としての立場だが先ほどの理由から俺に担任を任せるのは無理がある。教科担任とかならともかくな」

「……では、副担任兼担任代理として高畑君の出張中のみ、クラスの担任をしてもらえんか」

「……それなら副担任だけでいいだろう」

「副担任よりも担任に近い立場じゃよ。それに、副担任は他にもいるからの」

担任に近いんじゃない意味が無い、って言ってもこの爺さん聞く気無いだろうな。拒否は出来るが……仕方ない。

「……分かった。もう一つ、教員免許についてだが」

「それはこちらで用意するぞい」

「いや、いい。その代り、三日後に教員試験を受けられるようにしてくれ。それまでに免許を取れるようにしてくる」

「……………本當かい？」

「嘘は言わない」

ちよっと、ずるはするけどな。言葉には出さず心中で呟いて、それ

にしてもと思う。転生者って、介入したくなくても原作に介入させられるんだろうか、と。
無理矢理すぎる爺さんたちを前に、俺はそう思わずにいらなかった。

それから、冒頭に至るまでの一週間についてだが。特に変わったことも無かったので省略とさせていたきたい。まあ、大まかに言ってしまうえば、三日間はひたすら教員免許を取る為に別荘で勉強をした。ちなみにそのためだけに、魔法道具『書き覚えのペン』を創った。書いたものを絶対に忘れなくする物で、見たり食べたりと迷ったが、勉強らしくしてみた。で、晴れて教員免許を取得し、残りは店や教師の準備、修行と過ごした。せつかくの店を一年で閉店にしちまうのは少し名残惜しいが……暇を見て、再開するようにしてみるか。

そんなこんなで、爺さんから教師に任命された俺は、言われていた通りに高畑のクラスに案内されていた。

「ここが二年A組、君のクラスだよ」

「お前のだろ」

「あはは……」

素知らぬ顔して言ってきた高畑に釘を刺す。

「……早く入れ。担任だろう」

「そう、だね。うん」

ちなみに、わざわざトラップに飛び込んでやるほど俺のノリはよくない。今は回避要員に高畑がいることだし、俺は扉が開く瞬間に合

わせて一步横にずれる。

上からの黒板消し、後ろからの玩具の矢、さらに頭上からバケツに入った水。順当に処理されて、教壇に高畑が立った。

「おはよう、一年と同様に、今年も僕が担任するよ」

途端に沸き起こる歓声。結構、慕われていたのかそれとも単純に馬鹿騒ぎが好きな生徒たちなのか……後者の可能性があるのが残念だ。

「——そんなわけで、出張で僕がいない時に代わりに担任をしてくれる先生がいる」

ぼんやりと考えていると、挨拶やら説明やら終えたらしい高畑が手招きしてくる。何となく、転入生みたいで面倒くさくなったが、開け放ったままの扉から中へ進み、横に並んだ。

「副担任兼代理担任の、瀬野彰だ。このクラスの数学も担当する。新任教師で至らぬ点もあるだろうが、よろしく頼む」

まあ、初対面だしこれくらいでいいはずだ。反応を見ようと生徒たちに視線を巡らせてみる。

「かつ……」

「……なんだ？」

『かつこいいー……!!!!』

耳を刺すような全員一致の叫びと共に、押し寄せようとする生徒たち。一瞬、視線を巡らせ高畑を探せば、避難するかのように窓際にいた。自分でどうにかしろと言うことか、自分の生徒くらい統率してみせろ。

「質問はまとめて行え！！適当に出された質問には一切答えないからな！！」

「はいはい、それなら麻帆良のパパラッチこと、朝倉和美にお任せなさい！！」

生徒たちをどうにか食い止め抑え込むと、そう名乗り出てくるのが一人。朝倉、といえば噂好きの奴か。

どこから取り出したのかマイクを向けてきた朝倉が質問を始める。

「歳は？」

「二十」

「趣味は？」

「読書と何かを作ること」

「White Wingの店長さんとそっくりですが？」

「同一人物だ。いろいろあつて、店を休業して教師をすることになった」

「そのいろいろとは？」

「秘密だ」

「このクラスで気になる人物は？」

「刹那。別の意味ではこのか、真名、エヴァ、千雨」

『おおお～～～』

「名前で呼ぶと言うことは、親しい真柄で？」

「刹那とこのかは子どもたちのところからの知り合い、真名たちはお店に来てくれた時に偶然、仲良くなった」

これくらいでいいだろう、別に嘘は言っていないし。

いい加減に終わらせると高畑を睨むと、苦笑しながらやって来て朝倉を下がらせた。

「じゃあ、この後の日程だけ——」

教壇に立って話し始める高畑から離れ、窓際へ行く。今日は天気が良い。

「（……………ん？）」

ふと、目の前の空いた席を見る。朝倉の隣、誰も座っていない席に、何となく人影がちらついた。

「……………」

左目を閉じて、右目を凝らす。今度ははつきりと、青白い少女の姿が見えた。

少女はぼんやりと高畑を見ていて、俺には気づいていない様子だった。それ幸いと左目を開き窓の外へ視線を向ける。どうやら、刹那と同じになった右目は色だけじゃなく何かしらの効果を齎したらしい。

「（幽霊、だよなあ）」

厄介なものを見つけたと、それだけ思った。

転生者の悲しい宿命？（後書き）

学園長の主張がちょっとというか思いつきり強引になってしまった……。

とりあえず、ネギが来るまでは急ピッチで話が進みますので、皆様振り落とされぬようにご注意ください。

二重で投稿しておりました。ご指摘、ありがとうございます。

こんばんわ、幽霊

Side 彰

教師になって早数か月が経った。俺が思った以上に授業は特に問題も無く進行し、教師としての仕事にも慣れ始めていた。そんなある日、修行の合間の休憩時間に、俺は刹那に問いかけた。

「教室の幽霊、刹那は気づいてたか？」

「幽霊？……ああ、そういえば、そんなのがいたな」

やつぱり見えていたか。俺の右目が刹那と同じものなら、見えたとしてもおかしくないな。

「幽霊？」

なんてことなく答えた刹那の言葉に、千雨が訝しげな顔で俺たちを見てくる。ああ、と頷いて返して、紅茶を一口飲んだ。

「相坂さよ。窓際の一番前の空席に座ってる幽霊だ」

「あー……クラスメイトに、幽霊ねえ……」

「ほえー、そうやったんかあ」

このかは何だか楽しそうだが、千雨の場合はもういろいろと諦めたのか、意識の半分をどこかに追いやっていた。

まあ、この中で唯一まともな人間と言えたが、こつも常識外れに囲まれては、いい加減に諦めもつくだろう。

「でも、うち気づかなかったなあ。なんでやる？」

「靈感と魔力は関係が無いよ、このちゃん。でも、陰陽術で見えるように出来るんや無い？」

「そうやな。調べてみるわ」

どうやら、このかは相坂さよに会ってみたいようだ。

「刹那はどうしたい？」

「私か？……別に、どうとも。今までも、見えていただけで話したわけじゃないし」

「えー、なんで？せっかく同じクラスなんやから、仲良くしようえ」

「……んー」

「別に幽霊など気にする必要も無かろう。所詮、常人には見えぬ存在だ」

「せやけど……」

乗り気じゃない刹那、興味なしのエヴァ。どうにもこのかが不利な状況だが、刹那が興味無いのなら、俺もわざわざ手を出すつもりも無い。

「その相坂とか言う幽霊、いつからこの学校にいるんだ？」

不意に真名が聞いてきて、俺は高畑に渡された生徒名簿に書かれた情報を思い出す。

「六十年くらいじゃないか？よくまあ、席をずっと置いておくなとも思うが」

「幽霊に気づいていて、何の対処もしないということか？」

「そついうことになるな」

「普通におかしいだろ、おい……」

突っ込む気力も無い、といった風に千雨が呟く。麻帆良がおかしいのは今に始まったことじゃないだろう。現実主義はこういう時、というかこの街では大変だな。

「六十年なあ……」

「どうしたの、このちゃん？」

「んー、あんなあ、六十年も一人じゃ、寂しかったんやないかなあ
って」

「ま、それはそうだろうな」

本当に六十年間、周りに人がいるのに誰にも相手にされないんじゃ、それは寂しいだろう。全員から無視されるいじめも同然だ。死んだ幽霊にいじめも何もないが。

「……うち、やっぱり話してみる。一人ぼっちは寂しいもん」

決意したようにこのかが静かに言った。

千雨が遠い目をして、エヴァと真名はあまり気にした風でも無い。俺は刹那を見て、どうする、と首を傾げた。

「……私も行く。あの幽霊が安全とは限らないし」

「まあ、今まで見られてないと思っていたから大人しかっただけ、
かもしれないしな」

幽霊に興味、というよりもこのかの身の安全を心配したか。まあ、忘れられそうだが一応、俺と刹那はこのかの護衛でもあるからな。今のこののなら、護衛の必要も無いと思うけれど。

「それじゃさっそく、明日学校で話してみよ！」

「いやいやちよつと待て!!」

このかの提案を間髪入れずに千雨が止めに入った。

「馬鹿だろ？」

「ええ！？なんでや？」

「クラスの奴らが絶対不審の目で見てくるって。あいつらには見えてないんだから。いや、私も見えないけどよ」

「ああ、それならこれを持っておけ。このかも、わざわざ陰陽術でどうにかしなくてもいいぞ」

「それは？」

「魔法道具『霊視の瞳』。持っていれば幽霊が見えるようになる」

紫の石に紐を通した形だ。とりあえず人数分創って、テーブルに置いた。俺と刹那の分は見えているから除外。

「ありがと、彰君。これで準備は万端やね！」

「ちげえって!!」

意気込むこのかを千雨が引き留める。それを無視して、俺は魔法道具の追加効果について説明する。

「ちなみに、幽霊にこれを渡すと、そいつが実体化する。普通の間になるってことだな」

「はあ!？」

エヴァが持っていたカップを手から取り落したのを、横に控えていた茶々丸がすかさずキャッチしてテーブルに置いた。

それすら気づいていないのか、エヴァは俺を見て驚愕した様子で口を開く。

「なんだその無茶苦茶な効果は!？」

「そうでもないだろ。ようはお前が作る人形と同じだよ。もともと死んでるから成長もしないし、肉体が壊れてもまた幽霊に戻るだけだ。ただ、そいつにぴったりの肉の人形を瞬時に創りだすだけさ」

「……相変わらず、彰の創るものは面白いね」

真名に褒められた。

俺がエヴァに驚かれている間に、千雨によるこのか説得は終わったように、俺は気にせず紅茶を飲む刹那の頭を撫でた。

S i d e 刹那

翌日の夜になって、私たちは学校へと忍び込んだ。彰のテレポーターで一瞬で侵入できるのだから、楽なものだ。

ちなみに、当初は私と彰とこのちゃんだけの予定だったが、このちゃんや千雨さんを引っ張ってきて四人となっている。真名は仕事だ。

「あはは、夜の学校って初めてやわあ」

「なんで私まで……」

楽しそうなのちゃんとは反対に、千雨さんは不機嫌だ。

いま、私たちが歩いているのは私たちのクラスがある廊下だった。教室に直接入ってもよかったのだが、万が一誰かがいても困るので、誰もいない空き教室を選び飛んできた。

「二人とも、霊視の瞳はつけてるな？」

「はいな」

このちゃんが首に下げた石を見せる。千雨さんも無言で頷いた。それを確認すると、彰は教室の扉をゆっくりと開けていく。隙間から中の様子をうかがい、誰もいないことを確認するとするりと中に入り、全員が入ると扉を閉めた。窓際の一歩前、そこにぼんやりと佇む少女、相坂さよがいるのを見て、このちゃんと千雨さんが息を呑んだ。

「ふわあ、ほんまや……」

「マジでいたのかよ……」

驚いた二人が呟いた。それが聞こえたのか、相坂さんがこちらを振り向く。彼女を見つめていた私たちは当然ながら、その瞳とぼつちり目が合った。

「……」

目が合ったことに驚いた顔をした相坂さんが、ふわりとその体を浮かせる。そのままこちらに飛んでくる姿に、このちゃんたちはさらに驚きの声をあげていた。

「あのお……もしかして、私のこと見えていますか？」

目の前に降り立ちじつと見つめてくる相坂さんに、私たちは無言で頷き返す。このちゃんと千雨さんの場合、興奮と驚きで声が出ないといったところか。

「わっ、わあ、わああ！！本当ですか？私が、見えるんですか？私の声、聞こえるんですか！？」

「聞こえてますよ」

「俺たちはお前に会いに来たんだ。嬉しいのはいいから、少し落着いてくれ」

返事をすればさらにはしゃぐ相坂さんに、彰は呆れた様子で言った。それで飛び回るのをやめはしたが、未だ興奮が収まらないようで口が良く回る。

「ごめんなさい、でもすごく嬉しいです。六十年ずっと幽霊やってましたけど、初めて人と話せました！誰とも話せなくてももう寂しくて寂しくて」

「……まあ、普通に六十年何もできずに一人つてのは、しんどいよなあ」

ネットがあるならまだしも、と呟いた千雨さん。どうやらこちらも落ち着いてきたらしい。

「えっと、えっと……なあ、せつちゃん。この場合、初めましての方がいいかなあ？」

「どっちだろう。向こうはいつも私たちのことを見ていたわけだし……」

問いかけるように首を傾げて、相坂さんを見る。にこにこ満面の笑みを浮かべてこちらを見ると、嬉しそうに言った。

「初めましての方が新鮮でいいですね。なので、初めまして。相坂さよです。さよって呼んでくれると、すごく嬉しいです」

「うちは近衛木乃香や、初めまして。んー、じゃあ、さーちゃんって呼んでもええ？」

「もちろんです！あだ名で呼んでもらえるなんて、嬉しすぎて昇天しちゃいそうです」

「いや、そりやまずいだろ」

胸の前で両手を組んで喜ぶさよに、呆れたように千雨が言った。そうすると、隣のこのちゃんに次、と催促されている。面倒くさそうに頭を掻いた。

「……私は、長谷川千雨。苗字でも名前でも、好きに呼べよ」

「はい、千雨さん！」

「……また現実が遠ざかるのかぁ……」

ははっ、と乾いた笑い声が聞こえました。最近の千雨さんは、ふとした瞬間にとても遠い目をしていると思う。もう今更だと思っただけだなあ。

「せつちゃん」

「え？あ……」

このちゃんに覗き込まれて、さよさんの目が私と彰に向けられていることに気づく。

順当に考えれば私たちの番で、私は一瞬、彰に視線をやる。すぐに目が合い、先を促されて口を開いた。

「桜咲刹那です。よろしくお願いしますね、さよさん」

「はい、お願いします。刹那さん」

「瀬野彰だ。知ってるだろうが、さよのクラスも担当してるから、学校では先生と呼ぶようにな」

「瀬野先生ですね。よろしくお願いします」

ぺこり、と頭をさげるさよさん。これで一通りの自己紹介も終わり、さてどうしようかと思う。

幽霊に会う、という当初の目的は達成されたし、なんならもう帰ってもいい。

そう考えていると、さよさんが首を傾げて尋ねてくる。

「あの、皆さんはどうして私が見えてるんですか？今まで、気づいていなかったみたいなのに……」

「あ、それはな。彰君のおかげなんよ」

「先生の？」

このちゃんが笑顔で、首に下げた石を取り出した。

「霊視の瞳、言うてな。これを持っていると、さーちゃんみたいな幽霊も、見えるようになるんよ」

「そうなんですか！？わぁ、凄いですね」

「そやる？」

まじまじと石を見つめるさよさんに、このちゃんが得意げに返す。
はい、ともう一度さよさんが頷いて笑った。

「でも、嬉しいです。明日からは、クラスで皆さんとお話できますね」

さよさんが嬉しそうに言う。それを聞いて、でも、と思った。私はともかく、おそらく――

「いや、それはやばいんじゃないか？」

千雨さんが、反対するだろうから。

「クラスで話すのは、さすがにちょっと無理だろ」

「ふえ？駄目ですか？」

「えー、なんでやちーちゃん」

さよさんがぼかんと、このちゃんが驚いた様子で言った。

「そもそも、私らがなんで夜の学校に忍び込んで会いに来たと思ってるんだよ。クラスメイトに怪しまれないためだよ」

「あ、あー……そうやったねえ。あはは、忘れてたわあ」

やっぱり、このちゃんは忘れていた。千雨さんの言った通りの理由があつたから、私たちは今の時間にここにいるのだ。

明日、学校で普通にさよさんと話してしまえば、わざわざこうして会いに来た意味が無い。

「え、えーと……？」

「……私たちにはさよさんが見えますけど、他のクラスの方たちは見えていないんです。このちゃんたちがさよさんを見ることが出来るのは、この石のおかげなんです」

「あー、なるほど。分かりました」

納得したらしく、さよさんは笑った。けれど、すぐにしゅんと寂しそうに顔をして、けれども仕方が無さそうに言う。

「それじゃあ、他の皆さんがいるときは駄目ですね。ちょっと残念ですけど、でも、こうやって話せる人がいてくれて嬉しいですし、今日はとてもいい日です」

「さーちゃん……」

どうにかしたいと、このちゃんは思っているんだろう。私も、目の前のさよさんを見て何も思わないわけでは無い。

立場は全く違うが、無視された経験は私にもある。私は無視だけではなく暴力もあつたが、どちらも辛いものだ。

「彰……」

珍しいと思う。たぶん、このちゃんも望んでいるからだと思うが、どうにかしてあげられたらと思った。

彰はそれを分かってくれたようで、少し驚いた様子だったけれどすぐに頷いて、さよさんに話しかける。

「さよが望むなら、お前を他の人間にも見えるようにしてやれるぞ」

「え……本当、ですか？」

「ああ。霊視の瞳には、もう一つ効果がある」

「あー！」

このちゃんが思い至ったようで、パツと笑顔になった。

もう一つの効果、エヴァさんに説明していたものだが、このちゃんや千雨さんにもきちんと聞こえていたらしい。

「これを幽霊が身に着けると、そいつの体を創りだすんだ。成長もしない、ただの入れ物でしかないが、紛れもないさよの体になる」

「……………それじゃあ私、普通に皆さんとお話できるんですか…？」

「そつだ。どうする？」

「……………」

即答されるかと思つた答えは、無かつた。さよさんはとても悩んでいる。

私たちの考えとは別に、さよさんはさよさんで考えることがあるのだらう。誰も一言も話さず、ただ答えを待った。

そして、顔をあげたさよさんは、静かに頷く。

「私は、皆さんとお友達になりたいです。お願いします、先生」

言って、彰をじっと見つめている。

彰は新しく霊視の瞳を取り出すと、それをさよさんの首に下げた。胸元に石が光る。

効果はすぐに表れ、半透明に見えたさよさんの体が、ゆっくりと透明度を無くし肉体を得た。

「このか、千雨。見えるか？」

このちゃんと千雨さんに確認する。私と彰では、何もしくとも見えてしまうからだ。

持っていた霊視の瞳を机に置いた二人が、さよさんを見る。さよさんも緊張した様子で、二人を見つめた。

「見えるえ」

「すげーな……」

「……あ」

しっかりとさよさんを見返したこのちゃんと千雨さんに、さよさんの目に涙が溜まっていく。

そうしてついには泣き出した彼女が、それでも笑顔を浮かべて言った。

「あ、ありがとう、ごさいます、先生……」

泣いているさよさんに、このちゃんが笑顔で話しかける。明日からは、さよさんも学校に来れるようになるんだろう。

「ところで、彰」

「なんだ、刹那」

「さよさんって、どこに住むことになるんだ？」

「ああ……そういえば、住む場所が無いな」

ふと思い立って、聞いてみる。協議の結果、さよさんはエヴァさんの家に住むことになった。

その説得をこれからすることになるのだが……このちゃんが張り切っていたし、大丈夫だろう。たぶん。

こんばんわ、幽霊（後書き）

これで一通りそろったかなあ…と思います。

さよは当初、まったく考えていなかったのですが……放っておくのもかわいそうな気がしたので。仲間入り。

次は一気に進んで、ネギを呼んでしまいたい……のですが、さてどうしたものか。

番外：調査報告、触らぬ神は二人いる（前書き）

今回は番外編です。時間を少し戻して、噂好きと称された彼女に登場していただきました。

番外：調査報告、触らぬ神は二人いる

この話は、彰が教師となつて一週間がたったところにまで遡る。

S i d e 朝倉

新しく私たちのクラスの数学担当で副担任の瀬野先生。

不覚にも麻帆良のパパランチ朝倉和美ともあるうものが、あの瀬野先生の重大発言について追及していないなんて……私もまだまだつてことね。

瀬野先生の重大発言、そう、それは――

『このクラスで気になる人物は？』

『刹那。別の意味ではこのか、真名、エヴァ、千雨』

別の意味では！

では、桜咲と近衛たちの違いとはいったい何か……これを調べずして麻帆良のパパランチを名乗ることが出来ようか！？いや、出来ない……！

私はプライドをかけて、瀬野彰と桜咲刹那の関係を明らかにすることとをここに誓う……！

「……くら、おい、朝倉」

「わっ、はい……！」

「……授業中に随分と楽しそうににやにやと笑っていたが……そうか、お前、そんなにこの問題が解きたかったのか」

「え、あゝ、いや、そういうわけじゃ……」

「じゃあ、この問題は朝倉に任せよう」

「う……」

……とりあえず、今日から調査開始ね。

現在、目標は廊下を移動中。どこに向かうんだろう。

私が追いかけているのは、桜咲。実は彼女も謎が多いんだよなあ。いくら質問しても無言で返されるばかりで、情報にかけ。

交友関係は、近衛と龍宮と長谷川とエヴァと茶々丸。一番一緒にいるのを見かけるのは近衛と龍宮かな。でも、桜咲から傍に行くのはあまり見かけない。

ただ、そんな桜咲はふとした瞬間に、どこかに消える。今こうして追跡しているのも、危うく見失いそうになったところを何とか発見できたからだ。

「うゝん、でも本当にどこに行くつもりなんだろう。もうすぐ授業も始まるのに」

そう思い始めたころ、ようやく待ちわびていた瞬間が来た。瀬野先生が現れたのだ。

私はそのツーショットをカメラに収め、様子を見る。何を話しているのかは聞こえない。

と、桜咲が瀬野先生に何か渡している……あれは、ボールペン？それか、瀬野先生が使っている奴だ。さっきの授業で、忘れて行ったんだろう。

「律儀だなあ……」

わざわざ届けに行くとは思わなかった。にしても、瀬野先生がどこにいるのかよく分かったわね。その探索能力は私としてもほしいところ……ああ!!

私は慌ててカメラを構え、写真を撮る。瀬野先生が桜咲の頭を撫でたのだ。

瀬野先生も桜咲も笑っている。瀬野先生は授業も真面目で丁寧で、けれど優しさやちょっとしたノリの良さもあるけど、あまり笑わない。桜咲も、いつも無表情で近衛たちといるときは少しだけ笑ったりするのを見るけど。

二人ともあんなに笑顔になったりするの、初めて見た。なるほど……これは、さらに調査を深める必要がありと見た。

私は二人に気づかれないようにそつとその場から立ち去り、教室に戻る。次は、桜咲の交友関係から情報を集めることにするか。

Side 彰

刹那とは学校であまり接触しない。敢えてそうしているわけではなく、授業の準備や仕事の関係で、時間を取れないからだ。常に一緒にいられるならばそうしている。そういうわけで、今日の前にいる刹那に、俺は歓喜していた。

「ありがとう、刹那」

「いいさ、彰。失くさなくてよかったな」

先ほどの授業の際に、ボールペンを刹那のクラスに忘れていた。それに気づかなかったのだが、刹那が持ってきてくれた。

ボールペンなんかよりも、刹那に会えたことの方が重要だ。俺は感

謝の気持ちを込めて刹那の頭を撫でてやる。気持ちよさそうにする刹那を、抱きしめたい衝動に襲われた。普段なら他人の目を気にせずにするのだが――

「刹那」

「ん？」

「朝倉がくっ付いてきているが、どうかしたのか？」

「……さあな。害はなさそうだから、放っておいた」

「そうか」

朝倉がカメラを構えているところを見ると、俺と刹那の関係でも探っているんだろう。

質問タイムで、刹那とこのかたちを同じ扱いが出来なかった。刹那は俺にとって何よりも大切なものだから、当然だが。それが原因だろうな。

「……まあ、いいか」

探られたところで問題も無い。俺は時間が迫っているのもあって、名残惜しげに刹那を撫でていた手を離れた。

S i d e 朝倉

次の休み時間、私は桜咲と瀬野先生の間係を調べるべく、彼らの友人たちへ突撃取材を決行する。

一人目：龍宮真名

桜咲とよく一緒にいるところを見る限り、瀬野先生との関係も知っているはず。

「刹那と先生の関係？」

「そうそう！で、実際のところどうなの？」

「どう、ねえ……まあ、気になるなら」

「うんうん」

「街での二人を見ていれば、分かると思うけど」

「街？まさか、デートとか！？」

「さあ、どうだろうね」

のらりくらりと躲されて、結局得られたのは二人が街に出かけることがある、という情報のみ。くつ、龍宮、なかなか口が堅いようね。

二人目：長谷川千雨

長谷川も、結構クラスでは一人でいることが多い。でも、桜咲や近衛たちといるところを見るし、瀬野先生とも話している姿もある。前に、激しく突っ込みを入れているところを見かけた……これはきつと、親しい仲に違いない。

「はあ？あの二人の関係って……そんなの調べてどうするんだよ」

「いやいや、これは重要なことよ。瀬野先生は私たちの担任でもあるんだから、先生のことを知るには、ね」

「……（あほらし）」

「あ、ちよつと長谷川ー！！」

逃げられてしまった。あわよくば長谷川の新しい情報もほしかったところだけど……仕方がない。早いところ、次を調べないと。

三人目：近衛木乃香

大々大本命と言ってもいいわね。瀬野先生の話だと、以前から二人と知り合いらしいし、他のみんなよりも二人について詳しいだろう。というわけでさっそく声をかけようと思ったら、近衛が教室にいない。探してみると、廊下を歩いているのを発見して、追いかけて声

をかけた。

「え、せつちゃんと彰君の関係かえ？」

「うん。子どものころから知り合いだったんでしょ？」

「そやねえ。うちが迷子になった時に、せつちゃんと彰君が助けてくれたんよ」

「むむつ、ということは、近衛と会う前から桜咲と瀬野先生は一緒だったってこと？」

「そうや」

これは重大な情報と見たわ。この調子で次の情報を――

「このちゃん」

私がマイクを構えた時、桜咲が後ろに立っていた。気づかなかった私が思わずマイクを取り落しかけて慌てていると、彼女は近衛の隣に立って困ったように頬を掻く。

「あんま、子どものころのこと言わんといてえな」

「駄目やった？」

「駄目やないけど……朝倉さんは駄目や」

「なぜ!？」

きつぱりと断られた。しかも、私が目の前にいるのに。

こ、これは予想外だわ、まさか桜咲自らが邪魔をしに来るとは……。

「……さつきは、後をつけているだけですから気にしませんでしたけど」

げっ、尾行してたの気づかれてる。

というか、こわっ。無表情で睨まれているだけなのに、すっごい寒気を感じた。恐い、凄く恐い。

「私は、他人に自分を詮索されるのを好みません」

「あ、あはは……」

「表面上の私をどう捉えるか、仮にそれを記事にされたとしてどう書かれるのか。そういうのは、何も気にしないんですけど」

「あ、は……」

「ただ、私の与り知らぬところで、私自身を暴き出そうとされるのは、非常に不愉快とだけ、言っておきます」

「……………うん」

頷かないと殺される、というくらいに桜咲は怖かった。

私が頷いたのを見て満足したのか、教室に入っていく桜咲を見送って、私は頭を抱える。桜咲と瀬野先生の関係調査は、思ったよりも難しそうだ。

真実を知りたい、けれど桜咲は怖すぎる。触らぬ神に祟り無しとは、まさに桜咲のことだ。

「どうしよっかなあ……」

「なあなあ、和美ちゃん」

「ん？」

肩を叩かれて振り返ると、近衛が笑顔で立っていた。どうするかな、聞きたいことはまだまだあるんだけど、下手に触れるとまた神がお怒りになりそうだし。

「たぶんせつちゃんも怒らんじゃないかな、三つだけ教えておきなあ」
「お、なにになに？」

怒らないなら、ぜひとも情報を聞きたい。

「一つはな、彰君とせつちゃんは恋人とかとはちゃうよ」

「んー、そっかぁ。その線が一番怪しかったんだけどなぁ」

「あの二人はすごく仲良しやからねえ」

「で、二つ目は？」

「えっとなぁ、恋人やないけど、二人にとってお互いはすごく大事な存在なんや」

「……恋人じゃないけど？」

「違うけど、大事な存在なんよ」

正直、一番扱いに困る情報が出た。んー、なんだろう。歳と性別を越えた親友、とか？

近衛たち以上に仲が良いとか、そういうことなんだろうか。できれば詳しく調査したい部分だけど……。

「でな、三つ目なんやけど」

「うん」

「せつちゃんと彰君について調べるのは止めへんけど、あの二人を邪魔するようなことしたら……うちも、怒るからな」

瞬間、私の背筋を寒気が走った。これ、さっき桜咲と話してる時と同じ……！？

「こ、近衛……？」

「なんやぁ？」

声を絞り出して名前を呼ぶと、近衛は首を傾げて笑った。寒気はもう感じない、けれど思った。触らぬ神は、桜咲だけじゃない。

「あ、授業が始まるえ。急がんと」

「そ……そうだね。うん、急ごっか」

いつものようにほわほわとした笑みを浮かべる近衛に急かされて、私は教室に入る。桜咲と目が合ったけど、首を傾げられただけで何も無かった。

結果としては、あまり記事に出来るだけの情報も集められなかった。調査自体は、これから進めていくつもりではある。

ただ、その際には近衛と桜咲の逆鱗に触れないように注意する必要があるそうだった。

……なんでだろう、私は凄く無謀なことをしようとしているんじゃないかって、思えてならなかった。

番外：調査報告、触らぬ神は二人いる（後書き）

朝倉の口調や性格が掴めていないので、これでいいのか謎が多い…。

普段はあまり怒らない刹那ですが、彼女も怒ることはあるのです。ちなみに、怒らせたら恐いのは刹那と彰、そしてこのかもとても怖いので、取り扱いには注意が必要です。

次からはまた本編になりますので、よろしくお願いします。

怒りと殺意

Side 彰

時間が経つのは思っていたよりも早いもので、もうすぐ三学期を迎える。

「さむ……」

急ぎ足で校舎の中に入り、職員室へ向かう。今度、寒さ防止の魔法道具でも創るかな。形状はコートの方が楽で良さそうだ。

普段なら、朝は刹那と途中で合流して一緒に行くのだが、今日は残念ながらそれが出来なかった。刹那は、寮に戻った後に別の用事で出かけている。

「新任教師……ねえ」

職員室に着き、自分の席に座って溜息を吐く。隣の席に空いた机が置かれていた。

……これは、俺が否応なしに関わるように仕向けているんだろうな。隣の席が先輩だったら、誰だってそいつにいろいと聞くだろう。俺は窓の外に目をやり、寒空の下で走らされているだろう刹那を思う。やっぱり魔法道具は早く創ってしまおう、刹那が寒がっていたら大変だから。

……というよりも、今渡しに行ったらいいんじゃないだろうか。

「そつするか……」

時間にもまだ余裕はあるし、今日の準備は昨日のうちにしてある。会議にさえ間に合えば、それで問題は無いはずだ。そう思っ、俺は立ち上がった。

S i d e 刹那

私とこのちゃんは今、駅に向かって走っている。本当なら彰と学校についている頃なんだが……仕方ないか。

「新しい先生って、どんな人やるね」

「そやね。でも、学園長の知り合いなんやろ？」

「せや」

「それやったら、結構年配やと思うけどなあ」

「んー、でもそうでもないみたいなんよ」

「違うの？」

「うちもよう知らないんやけどなあ」

このちゃんが、学園長より任された新任教師のお迎え。本当なら神楽坂さんと二人で行くはずだったそうだが、私も誘われて着いてきた。

ちなみに、神楽坂さんはバイトが少し遅れて後から合流するらしく、今はいない。別にいなくても問題は無いと思うんだけどなあ。

気づけば駅に着き、辺りを見回す。次の電車はまだ来ておらず、それらしき人影も無い。

「あと三分で次の来るえ」

時計を見てこのちゃんが言った。三分はあつという間に過ぎ、すぐ

に駅から流れるように人が溢れてくる。
ところで、このちゃんに聞いた。

「新しい先生の写真とか無いん？」

「それがなあ、じいちゃんなあんもくれなくて。高畑先生が、背が小さい子どもやって言ってたんやけど」

「……高畑先生も、冗談言うんやね」

「せやね」

「あ、あの！」

「ん……？」

このちゃんと二人で辺りを見回してそれらしき人間を探しながら話している、不意に声をかけられた。振り向くと、眼鏡をかけた子どもが立っている。

大きなリュックに、布でくるんであるがこれは……杖、か。しかも魔力媒介になり得るものだ。

「なにか？」

「あはは、どうしたんや君？この駅には女子中学とかしかないえ？」

このちゃんも気づいているようだが、無視している。まあ、私たちが気にすることではないしな。

にしても、子どもか。まさか、高畑先生が言う冗談でもあるまいし。

「ぼ、僕、女子中学校の新しい教師です！」

「……は？」

「……ええつと……」

困惑。まさか、と思ったがそのまさかとは……このちゃんも珍しく、反応に困っている。

顔を見合わせて、決めた。深く考えれば、面倒なことに巻き込まれそうだし、早いところこちらの用事を済ませて彰の元に行こう。

「先生、でしたか。それでしたら、ご案内します」

「うちら、先生のお迎えに来たんや」

「そうでしたか！」

パツと子どもの表情が明るくなる。一人で来て不安だった、ということか。どうでもいい。

「えっと、僕、ネギ・スプリングフィールドです。よろしくお願いします」

「よろしくなあ」

「……」

歩き出そうとしたら名乗られた。とりあえず無視して、さっさと歩き出した。

「なんですってこのガキー！！！！」

「あわわわわっ！？」

今日は厄日なんだろうか。

学校に向かって走っていたら、当然のようにこの子どもも同じ速度で走って来ていた。

明らかに魔法を使っているみたいだ。あまり詳しくないので何とも言えないが……おそらく、障壁と身体への魔力供給といったところか。魔法は秘匿されるものだと思っていたが、どういってもりだろ

う。

「このちゃん」

「なんや？」

子どもが周りに気を取られているのをいいことに、小声でこのちゃんに話しかけた。

「あまり、関わらないほうが良いと思う」

「んー、せやねえ。うち、魔法を知らないふりしとるしなあ」

「細かい対処は彰に聞いてからにしよう」

「わかったえ」

視界から子どもが消えないように気を付けながら、学校へと向かう。さすがに勝手に動き回することは無いと思うけど、いろいろと面倒くさい存在ではありそうだった。

「あ、おーい。木乃香ー。桜咲さーん」

「あ、明日菜やー」

神楽坂さんが走ってくるのが見えた。彼女にしても、普通では考えられないくらいに足が速い。

うちのクラスは基本的に身体能力や頭脳で馬鹿げているのが多いが、作威的なものを感じるのが否めない。

「あれ、あの人……」

不意に呟かれた子どもの声が耳に入ってきて、嫌な予感がして顔を顰める。子どもの目は神楽坂さんに向いており、とりあえず私とこのちゃんは無関係であるのは分かったが、このまま巻き込まれるの

も嫌だ。

「先生……」

「あの、貴方。失恋の相が出てますよ」

「……はっ!？」

止めようとしたその時、何のためらいもなく子どもが言った。おかしい、有り得ない。

基本的に彰以外に興味の無い私でも、この子どもの行動が恐ろしく常識外れであることくらいは分かる。というか、この子どもの存在自体がおかしいことくらいわかる。

「初対面に、言う言葉じゃないな……」

「せつちゃん、どないしょ……」

そうして起こったのが、激怒した神楽坂さんが子どもに掴みかかるという事態。

子どもが随分と不満げな顔をしているが、自分が正しいことをしたと本当に思っているんだろうか。だとしたら、どうなんだろう。

「……彰に会いたい」

「せつちゃん、面倒やからってこの状態から逃げんというて」

このちゃんに言われて、渋々と目の前の光景に意識を戻す。だが、そう言われてもどうする気にもならない。私には関係の無いことだし、いつの間にか高畑先生も来て神楽坂さんに説明をしているし。とりあえず様子を見ることに徹していたら、魔力の流れを感じて子どもを見た。このちゃんも何気ない様子で視線を向けている。

「このちゃん、どうなってると思う?」

「この様子やと、暴発って感じやなあ……せつちゃん、何とかしてあげられへん？」

「……分かったえ」

どうでもいいけど、まあ、このちゃんが私に頼みごとをしてくるのなんて滅多にないし。私は子どもに掴みかかる神楽坂さんの腕を掴み、後ろに引いた。思いの他、あっさりと神楽坂さんが後ろに引けてしまつて、勢い余つて私は一歩前に出る。

この状態は——まずい。

「せつちゃん！」

「ツクシュン！！」

くしゃみと共に魔力の暴発。おそらく、武装解除。

どうにか気で打ち消すが、生憎とこういう使い方は慣れていない。防ぎきれずにコートが弾け飛んだ。寒い。

「せつちゃん！！大丈夫？」

「桜咲さん！？」

このちゃんと神楽坂さんが走り寄ってくる。子どもは未だ不満そうにしている。

言っておくが、私は確かに彰以外に関心というものを殆ど持たない。例外的にこのちゃんや真名たちは信頼している友ということで、頼みを聞いたり頼ったりするし、悩んでいるようなら多少は力になってあげようと思つたりもする。ただ、それ以外の人間には全く関心が無いだけだ。

けれど、それはあくまで彼らが私に危害を加えなければの話だ。私は、彰に危害を加える人間を許しはしないし、このちゃんたちに危害を加えるとしても許さない。

同時に、私に危害を加えられることも許さない。私が傷つくことは、つまり彰が傷つくことと同義だからだ。

「……殺そうか」

「ああ、殺そう」

呟いた言葉に返ってきた言葉は、子どもの後ろに立つた彰から発せられた。

S i d e 彰

目の前のガキの頭に置いた手に力を籠める。ギリギリと骨が軋む音がした。

「いぎつー!!?」

「『偶然』通りかかってみれば、いったいどういうことだろうなあ」

こんなに怒りを覚えたのは、いつ以来だろう。刹那の夢にあの影が出てきた時かもしれないし、それ以前かもしれない。いや、夢の影は明確に殴ることが出来る対象で無かった分、怒りよりも悔しさが勝ったようにも思う。

つまり何が言いたいかと言えば、俺がこんなにも怒りを覚えたのは初めてだということだ。

「どういうわけか刹那のコートが吹っ飛ぶのが見えたんだが、お前の仕業か？」

「っただあああ!？」

ゴリツ、と妙な感触がした。骨が砕けたか？陥没したか？どちらでも構わない。

痛みに暴れるガキを離さず、俺は力を籠め続けた。このまま頭が碎けて死んでしまえばいい。

幸いにも人の姿は無いんだ。この場でこいつを殺して、跡形も無く消し去ってしまえば、逃げる時間くらいいくらでも稼げる。

「瀬野君、やめるんだ!!」

高畑が止めに入る。右手をポケットに入れている……確か、居合い拳だったか。そんな技を使うのだと、真名から聞いた覚えがある。実力行使も辞さない、か。

「……高畑先生」

「っ刹那君!？」

高畑の後ろに移動した刹那が、その腕を掴んだ。拳を放とうとすれば、衝撃で刹那が吹っ飛ぶだろうな。そんなことをすれば、こいつも死亡確定だ。

ああ、それよりも寒そうだな。このガキを放って刹那にコートを着せてやるうか。

「せ、瀬野先生……」

「彰君、怒ってるのは分かるけど、ちよつと落ち着きいや」

恐る恐るといった神楽坂を抑えて、このかが俺の前に立つ。ガキは唸ることも辛いのか、大人しくなっていた。

「このか、悪いんだけどこのコート、刹那に着せてやってくれ。俺はこいつを殺してしまうから」

「駄目や」

「……このか」

「駄目や。それは駄目。せつちゃんにコート着せるのは、彰君の役目や。この子がせつちゃん傷つけたのは許されへんけど、それは駄目や」

珍しく、このかが怒っている。何に對してだ。このガキを殺そうとする俺をか。刹那を傷つけたガキをか。はたまた別の何かにか。そう思ったとき、このかが俺の耳元で囁いた。

「本当なら、明日菜が巻き込まれるはずやった。でも、うちがせつちゃんに頼んで助けてもらったんや。そしたら、せつちゃんが巻き込まれた。うちにも原因はある」

「……このかも悪いとでも言うつもりか？」

「せや」

「……刹那が殺さないなら、俺も殺さない」

被害者は刹那であり、加害者はこのガキだ。だから殺す。だけど、このかが関わってくるなら不本意ながら多少は考える必要が出てくる。

そもそも、ここで刹那がこのガキに接触すること自体がイレギュラーだ。それも、神楽坂の役目を負わされている。

このかが怒っていたのは、自分に対してでもあったのだろつ。自分が何も言わなければ、刹那が巻き込まれることは無かった。たとえ、神楽坂が刹那以上の被害を被ったとしても。

「彰」

刹那を見る。高畑から手を離し、俺を見ていた。ほっとしているのかから察するに、このガキを殺すのはやめたようだ。

たぶん、このかはガキを殺すなら原因を作った自分も罰がほしいとでも言っただろう。

そう言われたら、刹那は何も出来ないだろうな。刹那は、友達を大切にしている子だから。

「……寒いだろ、刹那」

「ん、ああ……ありがとう」

ガキを離して、刹那に歩み寄りコートを羽織らせる。新しく創りだして届けようと思っていたものだから、サイズはぴったりだ。

冷え切った刹那の手を握り、顔を顰める。早く校舎に入ったほうがいい。

「刹那、風邪をひくまえに行くぞ。このかもな」

「ああ」

「そつやね。明日菜、うちらもいこー」

「え、あ……でも……」

神楽坂が高畑に抱えられたガキを見て、どうしたらいいのか困ったようにおろおろする。

ああ、そうか。刹那たちは、このガキを迎えに行くように言われていたんだっとな。さすがに、頼まれたことを途中で放り出すのは気が引けるか。

「……神楽坂」

「あ、はい」

「そのガキは高畑が運ぶから、とりあえずお前も校舎に入れ。外にいたら、風邪をひく」

「あ……」

促して、歩き出したのを見て俺も刹那たちと校舎に入っていく。高畑が俺を睨み付けていたが、どうでもいいことだ。

怒りと殺意（後書き）

刹那も彰も、互いが一番大事なだけで、それ以外が嫌いというわけじゃないです。

このかや龍宮たちも大切な友達ですので、優しくしますし心配もします。ただ、二人が互いを大事にするのが超越すぎてくらべものにならないだけなのです。

あと、このかもただの天然ではないのです。言うときは言うすごい子なのです。

怒りの結末（前書き）

今回の長めです（おもに会話ですが）。また、ネギがだいぶ酷い目に合っていますので、苦手な方はお気を付け下さい。

怒りの結末

Side 彰

「どういっつもりかのお、瀬野君」

「何がです？」

学園長室に連れてこられた。俺と刹那、このか、神楽坂、そしてガキ。目の前には爺さんと高畑が不満そうに俺と刹那を見ている。

「ネギ君に対してじゃよ」

「ああ。騾は初めが肝心といいますね」

「騾、とな。ネギ君は何もしていないじゃろう？」

「は？」

血管が二、三本切れた。後ろで神楽坂がビクツと肩を震わせて、このかの後ろに隠れたのが分かる。普段はどちらかといえば前に立つタイプなんだが、怯えさせてしまったようだ。このかも、落ち着いてはいるが少し呼吸が速い。

これは、早いところ外に出したほうが良さそうだ。

「学園長、近衛と神楽坂の仕事はもう終わっているでしょう。時間もありませんし、教室に返ってもらって大丈夫かと思いますが？」

「ああ、いや。二人にもまだ話があるんじゃないよ」

「話…？」

おそろおそろ、神楽坂が爺さんの言葉に首を傾げる。

「うむ、ネギ君なんじゃがの、彼が新しく君たちのクラスを担任することは、もう知っておるかの？」

「ええ、っと……はい、一応は」

「それで、こちらに用っていったいなんや？」

「それはじゃの」

このかが急かす。神楽坂も、早くしてくれという風だった。

いつもなら感情を抑えるくらいじゃないんだが……駄目だ。こんな怒り抱いたのが久しぶりすぎて、どう扱ったらいいか分からない。

俺は一人で静かに深呼吸を繰り返した。本当なら今すぐに刹那の頭を撫でたい、抱きしめたい。こんな爺に今更礼儀も何も無いが、一応はとどうにか衝動を抑える。

「ネギ君なんじゃが、明日菜君たちの部屋に住まわせてやってほしいんじゃ」

「はあ!？」

「……………」

突拍子もない申し出に神楽坂が叫んだ。それはそうだ。

そういう俺は、刹那に服の袖を掴まれ動きを止めていた。この爺さんが可笑しなことを言った瞬間に、殴りかかろうとしたのを止められた。

「彰……………」

「……………わかって、る」

殴ったところで困ることは無い、が。刹那としてはこのかを面倒に巻き込みたくないのだろう。

神楽坂が必死で爺さんに無理だと訴えているのを見て、俺はこのかを振り向いた。

「このか、神楽坂は無理だと言っているが、お前としてはどう思う？」

「んー？そうやねえ……なあ、おじいちゃん」

「む、なんぞいこのか」

「冗談、きついわあ」

「ふおおっ！冗談じゃないぞい」

バツサリと言ったこのかに対して、爺さんは笑う。呆れたとしか言いようがないな。

「……教員には教員用の寮があるでしょう。その子どもも教師だと言うのなら、その寮に入るはずでしょう」

「それが、教員用の寮に空きが無くてのお。ネギ君の部屋が用意できておらんのじゃ」

「それはそちらの職務怠慢が原因です。寮が無理なら、学校近くのアパートなりなんなりを用意すればよかった話です。現に、麻帆良内に自宅がある教員は、自宅通勤が許されています」

「まあ、それは確かにそうなんじゃがの。ネギ君は見ての通り子どもじゃ。一人暮らしさせるわけにもいかんで」

「それならそもそも、一人で来ないでください。というよりも、子どもが教員をやる時点でおかしいでしょう」

「ネギ君は英国で大学を飛び級で卒業しておつての、教員免許も持っており。それに、一人で来たのにも事情があるのじゃ」

「事情があるならきちんと説明してください。もっとも、どんな事情があるにしろ、彼女たちの部屋に住まわせることは断じて無理な話ですけど」

「なぜじゃ？」

「彼女たちの部屋は女子寮ですよ？いったいどれだけの女子生徒が住んでいると思っっているんです？そこに子どもとはいえ男子を、そ

れも教師を住まわせて、あろうことが彼女たちにその世話をさせるなんて、保護者の方たちは納得してくれるでしょうか」

「それは」

「少なくとも俺は納得しません。俺は教師であると同時に、刹那の保護者であることをお忘れなく。どんな理由があっても、刹那が住む寮に男子が入るなど許せませんので」

「むむっ……」

出来る限り感情を抑えて、淡々と、客観的な意見と保護者としての俺の意見をぶつける。これを破れる理由が存在するなら、ぜひとも教えてもらいたいな。

「しかし、そうするとネギ君の住む場所がのぉ」

「だからそれはこれまでの期間に用意できなかったそちらの職務怠慢です。住まわせるなら、その高畑先生の部屋でも他の男性教師の部屋でも良いでしょう」

「ふおお、なら瀬野君の部屋で」

「俺は自宅通勤です。自宅に他人を住まわせるわけがないでしょう。というか、俺はその子どもを俺の自宅に入れたくありません。でするのでお断りします」

「む、むっ……」

なにが、なら、だというんだ。こいつらは馬鹿なのか？この子どもを俺に殺させる絶好の機会を与えてくれるということか？

それなら喜んで俺は今すぐにこの子どもを殺してやろう。ああ、でもその前にこのかの説得が必要か。このかは頑固なところがある分、説得は大変そうだが殺っていいというならそのくらいいくらでも頑張ろう。

「彰、このちゃんたちはもう戻っていいと思うんだが」

「……………ああ、そうだな。このか、神楽坂、先に教室に戻って、雪広には少し遅れると言っておいてくれ。あまり騒がないようにもな」

「わかったえ」

「は、はい！」

どうこのかを説得するかという思考の海に溺れていたところを引き上げられて、俺は二人に言う。爺さんたちの許可はいらない。早々に出て行く二人を見送って、俺はさて、と目の前の三人に向き直った。

「その子どもは別の教師の部屋で世話させるってことで、よろしいですね？」

「じゃがのお」

「もし、女子寮に入っていたり、俺の家に来たりしたら、命の保証はできませんが、それでも結構ですか？」

「ひっ！！」

ビクツと子どもが青ざめて身を竦ませる。ああ、でもよかったな、頭が無事で。

たぶん、頭蓋骨の一部が砕けてたと思うんだが、治癒魔法でも使ってもらえたか。本当なら粉々にしてやりたかったんだけどな。

「瀬野君、そのくらいにしてもらえるかな？」

「……………なにがでしょう、高畑先生」

「ネギ君が怯えているのが、分からない君ではないだろう？」

「関係ありません」

「う、あ……………」

このくらいの殺気で怯えるか。まだ、俺は手を出してもいないのに。

「……仕方がないのお。高畑君、ネギ君の部屋が用意できるまで、しばし君の部屋に住んでもらえんか？」

「ええ、構いませんよ。そういうわけで、しばらくよろしく、ネギ君」

「う、うん。タカミチ……」

「ほれ、これでいいじゃろう。だからもう少し落ち着いてくれんか」

偉そうな爺さんを殴りたい。当然のことを、しただけのくせに何を偉そうにしているのか、分からない。

とりあえず、これでこのかが巻き込まれる可能性が低くなる。巻き込まれて目の前で魔法を使われたら、魔法を知らないふりが無理になるからな。

「……それじゃ、時間もありませんので、手短にお願いしたいのですが」

「ふお、そうじゃの。こちらも、確認せんといかないしのお」

「本当に、なあ……そのガキ」

ガキを睨んで、問いかけた。

「お前がさっきやった『悪戯』についての弁解は、あるか？」

話せるように最低限まで殺気を抑えているんだ。言い訳くらい、してみせろ。

Side このか

彰君とせつちゃんを残して、学園長室を出る。彰君はたぶん、これからあの子ども先生に問い詰めるんやろなあ。

せつちゃんのコートが、どうして脱げてしまったのか。おじいちゃんも、下手な言い訳はせんと答えた方が、ええと思うけどなあ……でも、彰君、魔法の話は一切取り合わないやろうな。その状態で、どうやって説明することが出来るんやろ。

「……このか、平気そうだね」

「んー？そやねえ」

そういえば、明日菜はどないしょ。あんなに怒った彰君はうちも初めてやったし……せつちゃんたちの修行で殺気を近くで感じたことのあるうちはまだ平気やったけど、明日菜は普通の女の子やもんなきつと、さっきの彰君は恐かったんやろなあ。

でも、うちとしても明日菜が彰君を恐がったままにいるのは、嫌やなあ。それに、もしかしたらせつちゃんのことも恐がってたりするかもしれへん。ここは、うちが頑張らな。

「なあ、明日菜。さっきの彰君とせつちゃんなんやけど」

「う、うん……」

あからさまに明日菜がビクツと体を震わせた。素直やねえ。

「二人とも、普段はあんな怒ったりせえへんよ。せつちゃん、素っ気ないけど、誰かに怒ったりしてないやろ？」

「そう、よね……うん」

本当は、前に和美ちゃんに怒ってるんやけど、あれは例外や。基本的に、せつちゃんは『優しい方』やから。

「でな、あんなに二人が怒ったの、事情があるんよ」

「事情……？」

「彰君な、立場的にはせつちゃんの保護者なんや。さっきも、自分で言うてたやろ？」

「そういえば……」

「……本当は、あまり話さない方がいいんやけどな」

声を潜めて、ゆっくりと明日菜に話していく。

「せつちゃんな、お父さんとお母さんを知らないんやって」

「え……」

「小さいころに、倒れてたところを彰に拾われて……そのころの彰君も彰君で、お父さんとお母さんがいなかったんやって。それで、子どものころから、二人で生きてきたんやって」

「そ、そんな……」

「ずっと今まで助け合って生きてきたんや。彰君にとってせつちゃんは大切な家族で、せつちゃんにとっても同じで、大切な家族だから、二人にとつてお互いはすごく大切な存在なんや。だから、さつきせつちゃんが、よう分からんけどあんな目にあつて……彰君、せつちゃんが傷つけられたと思うて、怒ってるんよ。」

「……そ、うよね。瀬野先生、そりゃ怒るわ」

「うん。だからな、明日菜。彰君のこと、あんま恐がらないであげてほしいんよ」

「んん……うん。大丈夫、瀬野先生も、桜咲さんも、恐くなんかないわ」

「……ほんま？」

ジッと明日菜を見つめて、聞く。明日菜は心許なそうに視線を彷徨わせて、やがて面目ないと目を伏せた。

「ごめん、やっぱちょっと、恐いかも」

「ううん、かまへんよ。ただ、こんな話聞いた後であれかもしれんだけど、今まで通りに接するようにしてあげてほしい」

「今まで通り？」

「彰君はそうでもないんやけど、せつちゃんな、彰君に拾われるまでちょっと酷い目にあつたみたいで……うちもな、せつちゃんと仲良くなれるまで、凄く時間がかかったんよ」

「そうだったんだ……」

「やから、できれば今まで通りに、少しずつ仲良くなっていけるようにしてほしいんや。突然、わーってぶつかったら、きつとせつちゃん吃驚して逃げちゃうえ」

笑って、少しだけ明るく言う。明日菜が空笑いを浮かべてたけど、そんなん気にせへん。

ただうちは、これからも明日菜が彰君とせつちゃんと、少しでも仲良くしてられるように、頑張るだけ。

「だから明日菜、お願いな」

「……うん、分かった。あと、私……今の話は、あんまり気にしないでおくわ」

「そうしてくれると助かる」

きつと明日菜は、うちが言った通りに今まで通り彰君やせつちゃんに接してくれる。それでええ。

でも、せつちゃんの小さいころとか、うちと仲良くなった経緯とか……ちよつと、嘔吐いてもうた。ごめんな、明日菜。

「それじゃ、教室にレッツゴーや！」

「おー！」

授業までもうすぐ、人のいない廊下をうちと明日菜は走り出した。

Side 刹那

このちゃんと神楽坂さんが出て行った後の学園長室は、殺気に溢れていた。正確には部屋半分、彰の前方に立つ学園長、高畑先生、子どもの三人にしか殺気は向けられていない。ただ、彰が殺気を全て向ければ子どもは話せなくなることがわかりきっているので、全力でその殺気が彼らの周囲に四散されている。

こんなにも彰が怒るのは珍しい。いや、もしかしたら初めてのこともかもしれない。

これまで彰は、彰が怒る原因となる事態は事前に潰してきた。そうなる種は消し、芽が出てもちちに伸びる前に刈り取り、そうして結果、誰も傷つかず彰も怒る必要が無くなっていった。要するに、私を傷つける輩は彰が率先して潰しにかかっていた、ということだ。逆に私も彰を傷つける存在は消していたんだが……大概は、私が気づくよりも早く彰が自分で消してしまう。私としてはそれが齒がゆいが、今は関係が無い。

「で、どうして刹那のコートは突然、脱げたりしたんだ？簡潔に言え」

だからつまり、今回のように私が被害を被る事態は初めてだった。

「そ、それはまほ……えつと……」

魔法、と言おうとしたか。正直、呆れて何も言えない。

案内するときから思っていたが、この子どもは魔法を秘匿するつも

りが全く無いようだ。こっちは魔法の存在を気づかぬ、知らぬで通そうとしているのに、最悪な形で邪魔をしてくれる。隣で彰が苛立つのを感じた。腕を組み子どもを睨み付けている彰に、学園長が割り込んでくる。

「瀬野君、そう意地悪をせんでくれ」

「意地悪？何のことだ。俺は『いっただうして、刹那のコートが脱げたのか』をそのガキに聞いているだけだ」

彰が敬語を外している。そういう時は、裏に関わる時か、少なからず怒っている時。あと、相手に敬意を払う必要を感じなくなった時だが……この場合、最初のを除いて全部だろう。

「その聞き方が意地悪じゃというに……どうしてあんな事態が起きたのか、瀬野君なら分かっておるはずじゃろう？」

「えっ、じゃあ、もしかして……？」

「うむ。ネギ君が考えているとおりじゃよ」

子どもの表情が明るくなる。なぜだ？この状況で、原因であるお前が明るくなれる瞬間など無いと言っのに。

ちらりと彰を見上げると、その瞳は冷え切っていた。視界の下でゆっくりと腕が解かれるのを見て、垂れた右手を掴む。強い力で握り返された。

「彰……」

「契約の穴を突いたつもりか、糞爺が」

契約。たぶん、彰が教師になるにあたって、学園長と交わしたという契約のことだろう。

今現在も進行している契約は三つほどだったはず、そう考えたところ

るで、私の思考を後押しする言葉が子どもから紡がれた。

「貴方も魔法使いだったんですね!!」

契約、彰の存在を裏の人間に話さない。なるほど、確かに学園長は彰が裏を知っていることを言葉として明確に相手に示していない。この場合、子どもが勝手に気づいたただと、言い逃れできるわけか……………くだらない。

段々と、私も苛々してきた。こいつらは、彰を馬鹿にしているんだろうか。

「それなら話が早いや。えっと、先ほどのなんですけど、すみません。くしゃみした拍子に、武装解除が発動してしまっただけです。未熟なもので……………」

「……………学園長」

何を思ったか矢継ぎ早に話し出す子どもを前に、彰は冷静だった。

「『現実』と『おとぎ話』の区別もつかない子どもに、教師をやるのはどうかと思いますが」

「うえ!?!」

言われた言葉に、子どもはこれでもかという程に驚いて見せ、学園長と高畑先生は愕然と彰を見ている。

まさか、知られたからには彰が言いなりになるとでも思っていたのか?だとしたら、救いようのない。

彰が、こいつらの思惑に乗ってやる必要なんて、まったくくないのに。

「瀬野君、何を言い出すんじゃない」

「当然でしょう。魔法使いだなんて、そんな現実には有り得ないこと

を言い出す子どもを前に、俺は親切丁寧に現実を教えてやれるほど、優しくありません。だから、こうして結果だけを言ったんです。妄想と現実を区別できない子どもに、教師は無理です」

「ち、違います！妄想なんかじゃありません！！」

「……彰、あの子どもは何を言っているんだ？」

「俺も聞きたい」

子どもの耳に間違いなく聞こえるように、私は問いかけた。というよりもあの子どもは、私は一般人である可能性を考えなかったのだろうか。私が発言したことで、ようやくその可能性に気づいたのか、口を塞いで慌てている。今更、遅すぎる対応だ。一般的に見れば、あの発言は彰の言うとおり、妄想のヒーローが本当にいると思っっている子どもそのものだ。

どう頑張っても、教師など任せられる存在じゃない。

「それで、その妄想では魔法を使って刹那のコートを脱がせたということらしいが？」

「……そ、それは、その」

「ああ、いいぞ。面倒だし本当は付き合いたくないんだが、思う存分にお前の妄想による説明を試してみせる。それでお前が満足して本当のことを話すなら、一度だけ付き合ってやる」

「う、嘘じゃないです！！」

全く信じるつもりは無いと言われて、やけになったか。子どもは叫ぶようにして説明しだした。

「その、武力解除の魔法で、相手の武器や防具を吹き飛ばす風の魔法なんです。それがくしゃみをした拍子に発動して、それで彼女のコートが脱げてしまったんです」

「……防具、なあ」

……ああ、子どもが墓穴を掘った。

「その妄想の魔法の効果で言う防具って、なんだ？」

「え、それは…身に着けている鎧だったり、そういったものだけです」

「じゃあ、鎧とかではなく普通の服を着ていた場合、それが全て脱がされる可能性は？」

「それはあり得ると思いますけど……」

「そうか……」

馬鹿正直な子どもの答えに、彰が笑う。まあ、確かにあの威力なら、着衣全てを脱がせることが出来ただろう。私の場合、気で反発させることが出来たから、コート一枚で済んだと言っている。それくらい、もちろん彰だって分かっている。

けれど、何も知らないからあえて子どもに確認し、子どもがそれを知っていたことを確認した。

「お前はその魔法で、刹那を裸にしようとしたわけだ。子どもかと思えば、随分な変態だったな」

「なっ、ええっ!？」

「瀬野君!！」

押された烙印に、子どもが目を白黒させる。高畑先生が叫び、彰を睨み付けた。

「いい加減にしないか」

「俺は、子どもの妄想から思った感想を言っているだけだ。妄想とはいえ、そんな魔法を刹那に、女子中学生に放つなんて、潜在的な変態思考であることは間違いないだろう?」

「あれは事故だ。ネギ君が望んで使用したわけでは無い」

「くしゃみの拍子に、というやつか。だとすると、このガキの妄想する魔法使いは、魔法も満足に操れないわけだ」

「……………あくまでも、知らぬで通すつもりかの？」

「知らぬも何も、魔法だなんて現実に有り得ないだろう。こつちこそ、いい加減にしてくれないか？……………子どもの妄想に付き合うのは、もう無理だ」

彰の我慢が限界を迎え、溢れた殺気が三人を貫く。声にならない悲鳴をあげて、子どもがガクガクと震えだした。

学園長や高畑先生の顔にも汗が伝う。一応は実力者なはずの二人にこんな反応をさせるなんて、彰の殺気はすさまじいようだ。

「で、その子どもは結局、刹那に何をしたんだ？悪戯か？手品か？それとも、まだ魔法とでも言い張るか？」

「あ、あ、ば、僕、は……………」

「言え、ガキ」

「あ、うう、うわああああああ！！！！」

子どもに限界が訪れた。突然、叫びだしたかと思えば、ボロボロと泣き出したのだ。それこそ、見た目そのままの子どものように。

「ご、ごめんなさい、ごめんなさい！！」

「ネギ君！ネギ君、しっかりするんだ！！」

「ごめんなさい！！！！」

そうして謝りだした子どもを、高畑先生が必死で宥めている。なんというか、その……………正直、見ていて馬鹿らしくなる光景だった。仮にも教師を名乗るはずの子どもが、こんな大泣きするなんて。

「彰……もう、行かないか？」

「……ああ、そうだな。殺せないんじゃない、これ以上ここにいても意味が無い」

私は彰の右手を引いて、学園長室の出口を示した。子どもがいくら泣き叫ぼうと気にしないが、その泣き声を聞いてやる理由も無い。彰の言うとおり、このちゃんが考え直してくれない限り、今回の件で子どもを殺すことは不可能だし……まあ、子どもは精神的に死んだと思うが。あれ、壊れたんじゃないかな。

「ああ、そうだ。学園長」

「………なんじゃ」

「子どもに言っておけ。教師としても、個人としても、最低限の要件以外で俺に話しかけるな。教師の仕事も、基本は源先生に聞けとな」

「………分かった」

学園長は恨みがましそうな目をしていた。最初から、分かり切っていたことなのに。

退室し、扉を閉める。廊下は静まり返り、遠くの方から微かに生徒の声が聞こえてきた。

授業はとっくに始まっているだろう。無駄な時間を取られてしまった。

「刹那——」

強く抱きしめられる。私もまた彰の背に手を回し、抱きしめた。本当は、もっと早くにこうしたかったんだろう。私も、もっと早くにこうしたかった。服の袖を掴むだけじゃなくて、手を握るだけじゃなくて、彰を抱きしめたかった。

それが一番幸せで、どんな感情よりも勝る幸福を味わえるから。

「彰、あきぶ……」

擦り寄ると、一際強く抱きしめられる。もう少しだけ、このままにいようと思った。

怒りの結末（後書き）

やりすぎました…… ひかれなかが心配です。

とことんまで魔法を知らぬ存ぜぬで通そうとしたら、気づけば主人公の殺意がどんどん増幅…… 正直、この話のネギはこんな目にしか合わないと思います。

…… そろそろ、十五禁にマークを入れるべきか… 物騒な言葉が増えてきますし。

記憶操作

Side 真名

授業が始まって一向に來ない彰と刹那。チャイムが鳴る間際になつて入ってきた近衛と神楽坂の話によると、騒がずに待っているというこらしい。

もちろん、このクラスが素直に言うことを聞くはずもなく、教室はすぐ騒がしい。その騒ぎに巻き込まれないうちに、私は教室の中心から外れ後ろの席へと移動した。同じように移動してきた長谷川がそこにいた。

「……ふむ」

「あ？どうした」

「いや…なかなか、面白いものが聞けたよ」

座つてからしばらく、私は教室とは別の場所の音を聞いていた。もしたら、思った以上に面白い声が聞こえてきた。

「また盗聴かよ」

「ああ。彰と刹那は、学園長室にいるようだ」

「学園長室……？なんでそんなところにいるんだ？」

「新しく来た先生が、刹那のコートを脱がせた」

「………は？あ、いや………そいつ、死んだだろ」

「いや、近衛がそれに関わっていたらしくて、実質的に死んではない」

聞こえてきた声の様子からすると、精神的に死んでしまったのでは

ないかな。

「子どもで、未熟な魔法使いだ。長谷川も巻き込まれないように、気を付けたほうがいい」

「はあ？子ども……労働基準法」

「ここでそんな法律が本来の意味を発揮するとても？」

「……………無いな。ないない」

諦めた長谷川が、心底嫌そうな溜息を吐き出す。彼女は、非現実が嫌いだからね。仕方無いんだろう。

まあ、今日のところはその子ども先生を見ることは出来無さそうだ。今日中に復活してくるとは考えにくい。

「あー……………さよにも言つとくか」

巻き込まれないように。最初は幽霊だなんだと騒いだわりに、長谷川はよく相坂の面倒をみている。もともと、面倒見のいい性格なんだろうな。

その噂の相坂が、ちょうどこちらに向かって来ていた。顔を顰めている長谷川を見て、不思議そうにしている。

「千雨さん、どうかしたんですか？」

「相坂……………とりあえず、説明するからこつちこい」

「はあ……………」

呼び寄せて、説明を始める長谷川をよそに、私はまた音を聞いた。刹那と彰は、まだ動いていないか。

『針の地獄耳』は、未だ学園長室の傍に刺さったままだ。

あの後は一切何事も無く、クラスに行き騒がしい生徒を静まらせ、遅れたことを謝罪し、罪は爺さんにあると明言し、新任教師は明日になると説明し、残りは授業。

学園長室での出来事はこのかと盗聴していた真名が把握していたから、千雨たちに説明するのが省けて助かる。エヴァはこのかから聞いていたらしい。

とりあえず、刹那には魔法道具『反魔の水晶』を渡しておいた。攻撃魔法を跳ね返す水晶で、おそらく武力解除にも問題なく対応できるはずだ。常に首から下げておくように言っただし、しばらくはこれで持つだろう。思いのほか、魔法無効化は難しい。そういや、明日菜しか持たない体質だったし……折を見て、もっと細かく創造しなおそう。

そんなわけで一日が経ち、翌日の朝。職員室で朝の会議が終わり、授業の道具を持ち教室に行こうと思ったのだが――

「あ、あの、瀬野先生」

「……………なんだ」

職員室に入ってきたのは、昨日のガキ。おどおどとしているが、昨日俺にあれだけ言われて話しかけられるとはな……壊したと思っていただが。おそらく、記憶操作でもされたんだろう。どう操作されたかは分からないが、俺のことは『恐い先輩教師』くらいに思わされているんだろう。

「今日から、僕も二年A組を担当することになって、えっと……よろしく願います」

「立場は」

「へ？」

「立場は？あと、担当科目」

「え、えっと、担当は英語で、三月までは教育実習生、です……」

「し、しずな先生です」

……なら、さつさと源先生の所へ行けばいいだろう。

「源先生」

「あら、瀬野先生。どうかしましたか？」

「二年A組の教育実習生のことですが」

いきなり先生にしないのは当たり前だが、教育実習生ということは、ガキは希望する英語

の授業に参加するはず。ただ、問題なのは本来の英語担当の高畑が、今日からの出張でいないということだ。この場合、また別の教師が英語を教えるのだが、今回は誰だ？

「英語担当の高畑先生の代わりは、誰が？」

「ああ…それなんですけどね」

源先生は少し困ったような顔をし、俺の後方で未だ突っ立っているガキを見た。

「その、ネギ先生が英語を教えることになっているんです」

「………は？」

「学園長が、ネギ先生なら大丈夫だと……」

いや、待て。普通に待て。それは、おかしいだろう。

通常なら、教育実習生に授業をさせるにしても、ある程度の勉強期

間があるものだろう。俺もほとんどいきなりの実践投与だったが、刹那やこのか相手に教師の真似事で長いこと勉強を教えていたし、随分前だが転生前は大学生だったんだ。小中高と教師を見てきて、良い教師を見本にしながら俺のやり方を確立していった。

それなのに、たかだか十歳の子どもが、いきなり授業をするというそれは普通に考えれば困惑もするだろう。あの爺、まったく懲りて無かったようだな。

「……学園長の思惑は、俺たちには関係の無いこととしまして。仮にも彼は教育実習生ですし、誰かしら彼の授業を見る人間が必要では？」

「そう、ですね……確か、A組の一時間目は……」
「英語です」

「……担任がいない今、副担任である私たちがつくべきなんでしょうが……すみません、私の方は授業が入ってしまって……」

「なら、俺が入ります。幸い、俺は授業がありませんから」

「よろしく願います」

「いえ」

……今後、俺と源先生の授業を調整する必要があるそうだな。面倒事を増やしてくれる。

そのまますたすと職員室を出て行くと、しばらくしてからガキが追いかけてきた。俺の後ろを歩きながら、何か話しかけようとしているが足を止めるつもりもガキの速さに合わせるつもりも無い俺に話しかけられずにいた。

昨日は、とりあえず誤魔化すために新任教師は明日来るなんて言っただが、本当は来なくてよかった。いつそ帰れ。もう少し壊しておいたほうがよかったかと、後悔した。

S i d e ネギ

今日から初めての授業だ。年上の人たちが相手でもとも緊張するけど、精いっぱい頑張ろう。

本当なら昨日からのはずだったんだけど、到着したばかりで疲れているだろうからと、学園長先生が一日延ばしてくれた。昨日は校舎を少し見た後、タカミチの部屋ですっと眠っていたらしい。

らしい、というのは、僕が昨日のことをあまりはつきりと覚えていないから。たぶん疲れていたんだろうって、タカミチは言ってくれた。きつとそうなんだろうな、一日ぐっすり眠れるくらいなんだから。

ただ、昨日会った先生で一人だけ恐い先生がいる。二年A組の副担任で、担任代理の瀬野先生。

タカミチの話だと、瀬野先生はすごく真面目らしくて、興奮して少し騒いでいた僕はこっぴどく注意されたのと言う。よく覚えていないけど、それで僕は瀬野先生が少し恐い、と思ってしまっていた。瀬野先生も今後注意するように、って言うてくれたらしくて、これ以上昨日の話には触れないようにって言われたけど……やっぱりまだ、怒ってるみたいだ。同じクラスの担当なんだし、仲良くなれないかな。

S i d e 刹那

扉を開けた瞬間に落ちてきた黒板消しが子どもの頭上で一瞬止まったのを彰が弾き飛ばし、すぐに見えない位置で子どもを足で蹴り前に押し出して、子どもが足元の紐に躓き転び後ろからの玩具の矢が刺さり、最後に上からバケツの水でびしょ濡れ。

それが今、目の前で起こったこと。一瞬の間の後、飛び込んできた子どもにクラスは大騒ぎになった。

「えっ、うそ子ども!？」

「うわゝ、ごめんね。新しい先生って聞いたから」

「ぼく、大丈夫？」

子どもを取り囲んで騒ぎ立てる彼女たちから離れ、入口で壁に寄りかかる彰に近寄り話しかける。

「彰、あれは？」

「記憶操作でも受けたみたいで、俺を恐い先生くらいにしか思っていない」

「……なんだ、じゃあまた関わってくるつもりなのか」

「爺さんも、頭が悪い。それに、あのガキもやっぱり馬鹿だ」

「障壁、消してなかったな」

「止まったのは一瞬、そのすぐ後に大惨事だ。全員、忘れていればいいがな」

彰と私がそう願っていた時、後ろでの騒ぎが静まった。見ると、神楽坂さんが子どもを持ち上げて教卓に乗せている。ちらりと見えたその表情が疑っているものだったので、すぐに、彼女は先ほどの不可思議に気づいているのだと分かった。

「ねえ、あんたさっき何したの？」

「えっと、何って……」

「とぼけないで。それに昨日だって」

「あーすーな!ー!」

「うひゃあ!？」

このちゃんが、神楽坂さんの腰をくすぐりだす。楽しそうに笑いながら、いつものようにのんびりと話している。

「子ども相手にいじめは駄目やって」

「ちょ、この、あははっ、やめっ、ちよっとお」

「えい、お仕置きや」

「わひゃ、あははは!!」

身悶える神楽坂さんに対して、このちゃんは容赦がない。ついでに言つと異様にノリのいいこのクラス。周りの人たちまでこのちゃんに便乗して神楽坂さんをくすぐり始めてしまい、収拾がつかなくなつてきている。

「……ん？」

結構なスピードで投げられた丸められた紙。飛んできた方を見ると、千雨さんが苛立たしげに机を指で叩いていた。騒がしいの、嫌いな人だからなあ。

広げてみると、早く何とかしろと書かれていて、彰に見せる。視線を千雨さんに向け、私の頭を一撫でして騒ぎの中心に飛び込んだ。つた。

「もうすぐ授業だ、いい加減に席につけ。このかも、神楽坂をあまり苛めるな」

「はーい」

「たっ、助かった……」

彰の一声ですぐに全員が席に戻る。最初の頃、言うことを聞かずに騒いだ結果、一人ずつ順番に説教をされたせいだろう。無表情で淡々と説教されるのは、ただ怒られるのとは別の意味で辛い。

「……それじゃ、HRを始める。伝達事項は一つ。教育実習生として、今日からこのクラスを担当する先生がいる」

言いながら、未だ呆然と教卓に乗ったままだった子どもを引き摺り下ろして立たせる。教育実習生、か。

「え、えっと、ネギ・スプリングフィールドです。皆さんにまほ…英語を教えることになりました。よろしく願いします」

子どもが魔法を秘匿するつもりが無いことが、よく分かった。そのまま授業となり、子どもが高畑先生に代わって英語を教えるそうだが…黒板に届かないという無様な姿を晒した。クラスには可愛いと喜ばれているが、教師としては駄目だろう。彰は、関わりたくないとも言うように、窓際に寄りかかっている。時折、さよさんと話しているようだった。

「えっと、それではこの英文を…明日菜さん」

「ちよ、なんで私なのよ！？普通こういうのって五十音でしょ？」

「え、でも明日菜さんであ…」

「それは名前でしょ！」

神楽坂さんが子どもにそう怒ると、雪広さんが挑発する。それに乗ってどうにか英文を読み解こうとする明日菜さんだが、苦手なものは苦手らしく、意味が繋がっていない。

でも、頑張るその姿は偉いと思う。だから私は、神楽坂さんがクラスでも好きな方だ。

「明日菜さん、英語駄目なんですね」

笑って言う子どもは、大嫌いだけど。

「先生。今すぐに教室から出て行ってくれませんか」

「え……」

誰が反応するよりも早く、彰は子どもに言った。一瞬、騒ぎ出しそうに見えた教室が静まり返り、彰の様子を伺っている。

子どもだけが、いきなり言われて驚き、ひそかに体を震わせた。

「ど、どうしてですか？」

「うちのクラスに、人を馬鹿にする人間は必要ありませんから。ましてや、それが頑張っている人間に対して向けられる。そんな暴挙、俺が許しません」

「……あ……」

思い至ったのだろう、子どもの顔が青ざめる。なんとなく、次に出てくる言葉の予想がついた。そんなつもりじゃ、というところか。

「ぼ、僕、そんなつもりじゃ……」

「悪気は無くとも、俺たちは教師です。教師は社会人であり、社会人なら自分の言葉に責任を持つてください。ましてや教師が相手にするのは、多感な心を持った子どもたちです。大人のように割り切れず、何気ない一言が子どもにとってはとても重要な場合もあります。その言葉が深い傷を残すことだってあります。何も考えずに、無神経な言葉を言っている立場じゃないんですよ」

「………はい、すみません」

「俺に謝る必要は無いです。どうすべきか考えて、何も浮かばないなら教室から出て行ってください」

後は俺がやりますから。そう彰が言うと、子どもは何度も首を振っ

て、神楽坂さんに頭を下げた。

「酷いことを言ってすみませんでした、明日菜さん」

「あ……いや、いいわよ。うん……」

居心地が悪そうに、明日菜さんが頬を掻く。自分への言葉が原因で、こうも目の前で子どもが怒られるのを見てしまったのだし、そうなるのも仕方ないかもしれない。少なくとも、自身が抱いた怒りといった感情はどこかに消えたようだ。

「で、神楽坂。もう少し英語は勉強しような」

「う……はい」

「大丈夫や、明日菜。うちが教えたる」

「お願い……」

子どもへの態度を一転させた彰の言葉に呻く神楽坂さんに、このちゃんが見えなくなる。一気に、教室の雰囲気は柔らかなものへと戻される。

神楽坂さんが子どもに問い詰めた時といい、今といい、このちゃんが周りをうまく誤魔化していた。じっと見つめると、不意に目があった。こっさりピース。やっぱり、狙ってやってるんだ。

「ありがと、このちゃん」

このちゃんなりに、彰がクラスに悪い印象を持たないように、そして、魔法に通じることがこれ以上、子どもから言われないように、考えているんだろう。

声には出さずに、ただそう伝えた。笑い返された。

記憶操作（後書き）

都合よく誤魔化されたネギがこりずに主人公たちにぶつかろうとします。

このかはいろいろと考えているようです。天然から進化……したのかも知れないですね。

無関心の気まぐれ

Side 千雨

あの子ども先生の歓迎会をするらしい。

面倒だから参加を拒否しようと思って教室を出て行こうとしたら、何故か瀬野を迎えに行く役目を任された。いや、私は帰りたいんだって。

で、どうしようかと思っていたら桜咲も行くと言い出した。教室で準備をするのと、瀬野を呼びに行くの二択しかなかったらしい。

「帰ってもいいか？」

「たぶん、いないのが分かったら寮まで迎えが来ますよ？」

「……あいつらならやりかねないな」

さすがに迎えに来られるのは嫌だ。まあ、始まってもしこいつらと一緒にいれば問題は無い、か。

「千雨さん、行きましょう」

「あー……」

歩き出そうとする桜咲に、ふと違和感。すぐに思い至った。

「……別に、千雨でかまわねえよ？」

「はい？」

「こつちも桜咲って呼び捨てだし。あと、わざわざ敬語で話す必要も無いから」

私が言うのもあれだが、壁を感じる、普段から壁を作ってるのはこっちだけど、一応は、桜咲や近衛は友人だと思ってるから、他人行儀にされると、なんか複雑になる。

「なら、私も刹那でいい」

「そっか。ならそう呼ぶわ」

名前一つで、距離が近くなったような気がする。我ながら現金なものだ。

刹那の話だと、職員室に瀬野はいないらしい。どこにいるのかと思えば校舎の外にいるようで、刹那が道案内をすることになった。瀬野がどこにいるのかどうして分かるのかについては、何も言わない。もうわざわざ突っ込む気にもなれない。

「ところで、どうすんだよ。あのガキ」

「別に何も。こっちに害が無い限りは放置するさ」

「そっかよ……まあ、私は巻き込まれなければそれでいいけど」

「それがいいだろうな。ああ、ただ、十分に注した方が良く」

「あ？」

「秘匿意識が全く無い上に、こちらの予想を最悪な方向に裏切ってくれるだろうから」

「……あー……」

確かに、刹那の言うとおりなんだろうな。聞いただけでもくしゃみで魔法の暴発、一般人（と思ってる）がいる前で魔法の存在の暴露。今日、目の前でやられただけでも、魔法障壁の常時展開に、危うく口を滑らせる。

こつちがいくら注意していても、目の前でそんなことをポンポンやられたら迷惑だ。

「気をつけるわ」

「ああ」

心底面倒くさくなりながら、瀬野がいる方向に向かって進む。通りがかった階段を、両手で本を抱えて危なっかしく下りる宮崎を見つけた。ついでに、その階段を下りた先の噴水で座っている子ども先生も。

「何してんだ？」

「……本来、まだ仕事をしている筈なんだが……いい気なものだ」

担任がいけない間の担任の仕事は、瀬野としずな先生が分担していると聞いていたが、今日からはその仕事もあの子ども先生に回されるはずだろう。疑問に思いつつも、面倒くさそうなので子ども先生は見なかったことにして、危なっかしく下り続けている宮崎を見る。ふらふらとしていて、本当に大丈夫か？

「……千雨？」

「いや……」

少し先に進んだ刹那が振り返る。駄目だ、どうにも危なくて見ていられない。

そう思った瞬間、宮崎の体は大きく揺れて階段の下へと傾いた。ああ、だから言わんこつちやないんだ。

「カードマジック、属性解放『風』」

ポケットに常備しているカードの一枚に触れる。魔力を籠めて、一気に解き放った。

強い突風が吹きつけ、宮崎の体を押し返す。はた目から見たらなんてことの無い、ただの自然現象だ。

「ったく……」

私の柄じゃねえって思っただけだな。

「魔力操作、上手になったな」

「そうか？」

「解放までの流れが本当に一瞬だし、決断も早い。それに、なるべく風に魔力が乗らないように気を付けたんじゃないか？」

「……まあ、な。あのガキも、一応魔法使いだろ？魔法って気づかれても厄介だし、用心に越したことは……」

宙に浮いた本。宮崎が転んだ時に散らばったんだろうが、それが不自然に浮いている。

慌てて子ども先生を確認すると、でかくて目立つ杖を構えていた。これは、私たちがいることが気づかれたらまずいだろう。魔法を見られた、と考えられそうだ。

「動くなよ、刹那、千雨」

肩に手を置かれて固まる。上からふわりと何かが被さって来て、言われた言葉の通りにじっとしていると、子ども先生と目が合った。嫌な汗が流れるが、子ども先生は何事も無かったかのようにほっと安堵の溜息を吐いて、宮崎の元へ走っていった。

「ちよつと……!」

二人が本を拾い集めはじめると、神楽坂が私たちのすぐ横を駆け抜けて行った。そして子ども先生をどこかへ連れて行き、宮崎もまた本を抱えて歩き去る。

誰にも、私たちの存在は気づかれなかった。

「『幻影のローブ改』だ。複数人に使えるように大きくしてみたんだが、どうだ？」

「いいんじゃないか？ 彰」

後ろには瀬野が立っていた。動くな、と言ったのもこいつだ。気配で分かつてはいたが、前兆も無しにいきなり現れたから本気で驚いた。

「どっから現れやがった？」

「ああ、テレポーターで飛んできた。刹那が俺を探しているみたいだったしな」

「……なんだそれ」

「人で場所を指定できるのか？」

「そうだ。ただ、相手の名前や見た目を特定していないと駄目だ。眼鏡をかけているとかだと、世界中にいるから飛べなくなる」

さらりとんでもないことを言いやがった。つまり、いくら逃げようとしても姿形が知られてる私たちは、こいつがその気になったら逃げられないってことだ。

「とんでもねえな」

「あまり使えないけれどな。相手がどこにいるのか、こちらには分からないし、高速で移動されていたら、反応出来ない可能性がある。使い捨てだし」

「十分すげえつての」

もう呆れるくらいだ。

とりあえず、無駄話はそれくらいにして本来の用事を済ませてしまおうと思ったところで、先ほど神楽坂に連れて行かれた子ども先生を思い出す。隣の刹那を見て、首を傾げた。

「おい、いいのか？」

「……なにがだ？」

「神楽坂だよ。あのガキの魔法、見ちまつたんじゃねえか？」

「ああ……別に、放っておけばいいさ」

「わざわざ、助けたのにか？」

昨日、神楽坂を助けたのは刹那で、だからガキの精神破壊だ記憶操作だが起こった。せつかく助けたのに、このまま放っておけば全て無駄に終わる。それが不思議だった。

「別に、私が神楽坂さんを助ける理由は無いからな。昨日、私が助けたのも、このちゃんに頼まれたからだ。そうじゃなければ、何も手出しするつもりは無かった」

「そうかよ。って……あー」

魔力の流れに変化を感じて、その方向を見る。神楽坂と子ども先生の消えた方だ。

刹那も瀬野も本当に興味が無いようで、刹那は歓迎会のことを話している。神楽坂が嫌いとかではないんだろうが、親しい友人でも無いから助ける必要が無いってことか。クラスでの素っ気なさは健在、と。

そう考えて、ふと思う。ならばあの日は、どうして助けてくれたのかと。

話し終えた二人がこちらを向いたのを見て、思い切って聞いてみる。

「刹那も瀬野も、クラスの人間が困ってたからって絶対に助けるわけじゃないんだろ？」

「……随分と唐突だな」

瀬野が首を傾げた。私は構わず、いいからと答えを促す。

「……彰が助けるなら、助けるが。あと、このちゃんとかに頼まれたら、一応は」

「俺も同じだな。刹那が助けたければ助けるし」

「でも、助けないこともあるんだろ？今みたいに」

「助ける理由が無ければ」

「……なら、どうして私のことは助けたんだ？」

今、助けられず巻き込まれた神楽坂の存在を認識して、目の前の二人に疑問を抱く。あの時、こいつらは私を助ける必要はどこにも無かった筈だ。助けられなければ、私はしばらくの間、包帯を巻いて過ごすことになっただろう。

刹那と瀬野は、不思議そうに顔を見合わせた。

「あれは、刹那が助けたがったから助けたんだっただな」

「ああ。まあ、翌日に包帯姿で教室に來られても、何となく後味が悪いと思ったから……でも、そうだな。しいて言うなら」

指を顎に当て、そうして刹那は言う。

「気まぐれ、だな」

私はもしかしたら、とても運が良かったのかもしれない。少なくとも

も、自分に選択肢があるくらいには、自由があつたから。

Side 彰

「そつか……明日菜、気づいてもうたかあ」

「うん。止めたかった？」

「そうやねえ……できれば、止めたかったなあ」

「悪かったな、見逃しちまって」

「せつちゃんもちーちゃんも、悪くないえ」

神楽坂がガキの魔法を見たことについて、このかは残念そうに目を伏せる。

先ほど始まつた歓迎会の中心では、ガキを構う神楽坂の姿があつた。

「望むなら、これ以上関わらないようにすることも出来るぞ？」

「うゝん……それは、ちよつと魅力的やねえ」

神楽坂が魔法無効化を持っていたても、ガキの方に何かすることは出来る。このかがそれを望むなら、出来ないことも無いことだ。けれどこのかは、考えた後にゆっくりと首を振った。

「何も出来んよ。うちは、何も知らないままでいないと駄目やから」

このかは魔法を知らない。その前提条件がある中で、神楽坂に関わることは出来ない。知らないふりで関わろうとしても、いずれは知ってしまう可能性がある。このかはそれを避けなければならぬ。

「あいつとは住んでる世界が違うからな。このかの判断は正しいだ

ろっさ」

グラスを傾けながらエヴァが言う。愉快そうに笑っていた。

「住んでる世界、ってなんですか？」

「覚悟を決めた奴と決めてない奴さ。魔法を知っていても、それが
あるかないかで全く違う」

相坂の言葉に、エヴァはそう答えた。

危険を承知で魔法を学ぶ決意をしたこのかと、何も知らずに魔法に
関わろうとしている神楽坂。エヴァの言う覚悟はそこだろう。

このかは魔法に関わることを決めたくて、魔法を知らないふりを
している。親しい人間が巻き込まれても、このかは自分から関わら
ない。それがこのかの覚悟でもあるのかもしれない。

「でも」

不意に真名がスツと指を指した。全員がその方向を見ると、途端に
呆れやら苦笑いやらが浮かぶ。

「読心術……」

「あんな露骨にやられたら、知らないふりを通すのは大変だろうね」

「あはは…ネギ君、やりすぎやつて」

「このちゃん……何かあったら、すぐに言ってな？」

「わかったえ、せっちゃん」

困り果てて笑うこのかに刹那が心配そうに言った。俺の方でも、こ
のが巻き込まれないように気を付けた方がよさそうだ。

無関心の気まぐれ（後書き）

よくよく考えれば、千雨が助けられる理由はなかったという。自分から行った明日菜に対して千雨が巻き込まれたとか避けられなかったという違いはありますが。それで気まぐれ起こされた、という今暴かれる真実……ひどくつつこまれそうな気がします。

ホレ薬から気づいた（愛情≠依存）

Side このか

購買で新発売というお菓子を食べる。うん、美味しいえ。

「せつちゃんも食べー」

「あ、うん」

隣で読書中のせつちゃんに差し出して、うちももう一本。なんや口ツキのグラデーションチョコ味とかいう名前やった。先っぽから根元にかけて徐々に甘くなっていくんや。

「今日は何の本や？」

「黒縁眼鏡の探偵が事件を解いていくやつや」

「あー……なんやったかなあ。うちも見覚えあるんやけど」

実はせつちゃん、意外と読書家や。彰君が本を読むから、せつちゃんも読むようになったんやて。

休日とか何も無い日は一緒に本を読んだりするって言うてた。最近のは、放課後に彰君を待つてる時に教室で読んだりしてる。修行する日がほとんどやけど、たまには休むのも大切やからなあ。

「アスナさん、アスナさーん」

ガラガラと扉が開いて、振り向いたらネギ君がおった。なんや液体の入った瓶を持って明日菜に駆け寄って行ったけど、いったいなんやろ。

せつちゃんを見ると、無表情で本を読んだままや。でも、警戒してるみたで気配がピリピリしてる。そういううちも、ちょっと嫌な予感がしとった。

「ホレ薬ですよ」

聞こえてきた言葉に驚く。どうしよう思うて、せつちゃんに声をかけた。

「せつちゃん……」

「結界は危険かもしれん。このちゃん、じっとしててな」
「うん」

ネギ君の目の前で迂闊なことは出来んから、せつちゃんに任せて大人しくしてる。明日菜がネギ君にホレ薬を飲ませた瞬間、せつちゃんの気がぶわってなった。

「っ、う……」

気だけやない。僅かやけど殺気も混ざってる。範囲がうちとせつちゃんの周りに止まってるからええけど、冷や汗が止まらん。

視界に入ったネギ君に一瞬だけ、心が高鳴った。でも、すぐに強くなった殺気に押されて萎む。他のみんなに追われて、ようやく教室から出て行ったネギ君に、二人だけになった教師を見回して溜息を吐き出した。

「はあ……」

「このちゃん、大丈夫？」

「うん、平気や。でも、強力やったね、あの薬」

平常時だったら、絶対効果に吞まれてたやろな。ホレ薬も魔道具の一つやし、どうにか魔法が及ぶ前にせつちゃんが気で相殺してくれてたけど……ほんまに危なかった。

「気だけじゃ上手く出来る自信が無くて、殺気もこめたから。このちゃん、無理せんぞな？」

「大丈夫やって。いつも、修行中のせつちゃんたちの殺気を近くで浴びてるんやから。それに、殺気のおかげで動き封じられたから、結果オーライや」

「……なら、よかった」

せつちゃんが安心したように表情を緩める。まあ、とりあえずもう大丈夫やろって思うて、うちも気を緩めた瞬間やった。

「あ……！！」

うちもせつちゃんも、油断しとった。教室になんとかネギ君が飛び込んできて、気配に気づいたうちらが振り向いたのが余計に悪かった。

ホレ薬の効果は、本物や。高鳴る胸に動き出そうとする体。慌てて出て行くネギ君を追いかけようとした。

「つつう……」

押し殺した声に自然と目が向けられた。追いかけようと立ち上がった体はその体勢で止まった。

「せつちゃん——！！！」

「ぐっ……」

鼻こうを攪る鉄の匂い。血の匂いや。

下を見れば、椅子に置かれたせつちゃんの左手の甲に深々と刺さるナイフが見えた。せつちゃん自身の体に隠れて、廊下からは見えな位置。

痛みを堪えるように噛みしめられた唇に、深く刻まれた眉間の皺。流れる血が床に垂れるのを見て、正気に戻った。

「せつちゃん、ナイフ抜いて！」

人払いと魔力遮断の結界を、教室全体に張る。念の為に霧の腕輪で気配を消した。

もしかしたら貫通してるかもしれん、早く治療せな――

「刹那」

低い声。ああ、駄目やね、怒ってる。

振り向いたら、彰君がいた。左手の甲に傷があつて、血が滴ってる。せつちゃんに刺さったナイフを見て、今にも泣きそうな顔をした。

「あ、きら……ごめん。傷、つけた」

「そんなことはいい。このか、治療を頼む」

「わかった」

「刹那、抜くぞ」

引き抜かれるナイフ。傷口から血が溢れてきて、すぐに治癒魔法を唱える。深く見えた傷は、それでもあまり深くはなかった。

「ほな、彰君も」

そのまま彰君にも同じように治癒魔法を唱えて、傷を治す。こつち

も、あまり深くない。

せつちゃんが負った怪我を、彰君が半分負った。二人の契約の効果。彰君はまだ仕事で職員室にいたはずなんやけど、これを見て来たんやろう。せつちゃんが彰君を見上げて、ごめんと謝った。

「なにがあつた」

「ネギ君が明日菜にホレ薬を作ってきたんや。でも、明日菜がそれをネギ君に飲ませて、最初はせつちゃんが気で打ち消してくれたんやけど、出て行ったネギ君が急になんてか戻ってきて……うちは、せつちゃんの怪我見て正気に戻ったんやけど」

「ホレ薬は、魔法の効果で人間の恋愛感情を一時的に高ぶらせるから。それ以上の強い衝撃を受ければ、上書きされて効果は打ち消されると思っただが……痛覚以外に、咄嗟に刺激出来るものが浮かばなかった。すまない」

「……いや、いいさ」

彰君がせつちゃんを抱きしめる。よく見たら、せつちゃんの顔色が悪い。

縋り付くみたいに彰君に抱き着いて、絞り出すようにせつちゃんは言った。

「気持ち、悪い……」

「刹那……?」

「彰、以外に……あんな感情、持ちたくない……」

あんな感情、っていうのはたぶん、恋愛感情のことなんやろう。もしかしたら、一瞬でも効果が及んだのかもしれない。だから、それを打ち消すために彰君を傷つけるって分かってる行為に及んだのかもしれない。

「彰以外、好きに…なりたく、ない……」

思えば、せつちゃんがそういう感情について、話したことは無い。そしてうちには、せつちゃんが彰君に抱いている感情が、そういう感情なのか分からなかった。大切にしているのは分かってても、せつちゃんから『好き』の言葉が、そういう感情を含んで紡がれたことは、うちが覚えている限り無くて。それは、彰君にも同様で。

「俺も、刹那が……好き、だよ」

彰君から、その感情を含んだ言葉を、初めて聞いた。

S i d e 彰

あのガキの処理については後で考えることにして、俺は刹那を連れて家に戻った。仕事については家でやれるものを持ち帰ったが、特に問題は無い。

顔色の悪い刹那の頭を撫で、二人でベッドに横になる。縋り付く刹那を抱きしめて、俺は珍しく混乱している感情に、戸惑っていた。

「（好き、愛している……）」

人間が抱く恋愛感情は、永遠ではない。やがては薄れ、消え、跡形も無くなってしまう。

いつだったか、気づいたところには俺はそんな感情は求めておらず、麻薬のような感情を求めている。その感情に当てはまる名前が俺には分からず、ただその感情で繋がる関係が、依存であることを知っ

た。

そして俺がその関係を求めたのが、元の世界では漫画のキャラでしかなかった刹那だった。頭がおかしい自覚は、あった。

「彰……」

「なんだ？」

「好き」

「俺もだ」

躊躇も無く肯定できる。俺が求めなかった感情なのに。

死に、転生するとなつて、確実に刹那が俺に依存してくれるように、効果的な時間を選んだ。里が襲われ、親が死ぬ。その瞬間に手を伸ばし、捕え、受け入れ、手に入れた。一人ぼっちの刹那は助けた俺を慕う。あとはそれを、俺の望む方に向くように育てるだけだった。計画的な行動。そうして得た、互いに依存する関係。

家族愛が一番近く、決して恋愛感情では無いこの感情で繋がる関係だった。そういう意味での好きは言わなかった。

何よりも強く、絶対に切れない繋がりがりだったから、刹那が誰かに恋愛の意味で好きと言おうが構わないと思っていた。最後には、俺の元に戻ってくるから、別に構わないと。そう、思っていた筈なのに。

「……彰は、迷惑か？」

「刹那？」

「彰がほしいと思う感情がある。でも、それだけじゃなくて……」

縋る手に力が籠る。頭を撫でた。

……そう、思っていたんだ。刹那が誰かを好きになつても構わないと。そんな想いよりも、俺が刹那に抱いた想いのほうが強く、絶対だったから。だから、その想いよりも弱い想いは、抱かないと思つた。抱きたくないと思つた。……抱けないと、思つた。

「彰が好きだという想いも、私にはある」

全てを捨てて刹那だけを求め、互いに依存しあえる相手を求める俺は、狂っていると思っていた。だから、そんな感情を抱けるほど、まだ正常だったのかと。そう、思ってしまう。

俺も刹那も狂っている。このかたちも認めるほどに、とっくの昔に狂ってる。でも、まだ狂い切れていない部分もあった。

「俺も、刹那が好きだ」

欲しいと思った。でも気づけばそれだけじゃなかった。好きだと思っ心もあった。

刹那が誰かに好きだと言ってもいいと言っていたのは、実際には正確ではない。最後に戻ってくる事が分かっていた以前に、刹那が俺以外にそんな感情を持たないと、知らず知らずに思っていただけだった。

「刹那が欲しくて、それとはまた違う感情が、俺にもある。お前が好きで、仕方がない」

名前の無い狂う程に大きな感情と、好きだという感情。二つとも、俺たちの中にあつた想い。

「刹那が好きだ」

「私も、彰が好き」

認めてしまえば、何も変わらない。俺たちは互いを求めるし、互いを傷つける奴を許さない。どちらかが失われることを、絶対に許さない。何も、変わらない。

ただ、交わす言葉と、籠める想いが一つ増えただけだった。

愛情<依存の考えは変わらない。けれど、愛情≠依存でもあった。別の感情同士、でも同じように抱ける想い。今になって、それを知った。

「ずっと一緒にいて、彰」
「いるさ。ずっと、一緒に」

抱きしめあって、眠りにつく。俺たちは、何も変わらない。変わることは、無い。

ホレ薬から気づいた（愛情 $\neq$ 依存）（後書き）

とりあえず、二人のイチヤイチャラブラブ常時バカップルは変わりません。

騒動の翌日、朝のこと

Side 彰

刹那と共に学校に来た途端に、呼び出された。私も行くと言ったが、ご丁寧に一人で来るようにとのお達しだ。こっちはこれから授業の準備があるというのに……。

構わないと言つても刹那は譲らず、俺を一人で行かせることを拒否した。前回、爺さんらが俺を利用しようと考えたのが原因だろう。刹那も、あいつらが嫌いということだ。

とりあえず、刹那には学園長室の前で待機してもらうことにした。我慢できなければ入ってきて良いと言つてある。刹那の頭を撫でてから学園長室に入ると、爺さんと高畑の二人。ガキは、いないのか。

「（いたら殺したんだがなあ）」

残念だ。非常に残念だ。昨日の刹那を不快にさせた罪と、それが原因で刹那に自らを傷つけさせた罪、償ってもらわなければならなかったんだがな。とりあえず、殺す方向で。

「で、用事はなんだ。俺は忙しい」

敬意を払ってやる意味など、もはやない。刹那にあんなガキを近づけたんだ、こいつらも許せる存在ではない。

「まあ、そうカリカリするんじゃない。実はの、お主に頼みがあるんじゃない」

「……内容は」

「ネギ君を見逃してくれんか」

俺を見る爺さんの目は睨むに近い。というより、関わるなどでは無く、見逃してか。つくづく、こいつらは俺を馬鹿にしているようだ。

「それはつまり、昨日の一件について俺は手を出すなと?」

「そうじゃ。そして今後も、ネギ君については見逃してくれんか。

彼は将来、立派な魔法使いになる」

「俺には関係が無いな」

あのガキがどんな存在だろうと、俺には無関係だ。重要なのは、ガキが俺たちに危害を加えるか否か。加えなければ、目の前でどれだけ面倒事を起こそうと無視することは出来る。俺たちを巻き込んだから、終わりなんだ。

「あのガキは刹那に随分と不快な思いをさせたし、それが原因で刹那は自分で自分を傷つけなければならぬ状況に陥った。許すわけが無いだろ」

「じゃが、こちらも困るんじゃよ……ネギ君をまた、前のような目に合わせるわけにはいかんのじゃ」

「彼はまだ子どもで、いろいろと学んでいる最中なんだ。彼を成長させるためにも、協力してくれ」

「だから、俺には関係が無いと言っている。俺は、どんな理由や事情があろうとも、結果としてガキが刹那に危害を加えたことを許さないと言っているんだ。お前らの思惑も願いも望みも、俺には一切の関係が無い」

とりあえず、俺にあのガキのフォローをさせようなんて真似はやめただけ褒めてやるが、後は全て駄目だ。結局は、刹那を傷つけたガキを俺に許せと言っているわけだからな。

「ガキは許さない。間違いなく殺す」

「……なら、仕方ないのお」

爺さんがわざとらしく溜息。何か、策があるのか。

「ネギ君に危害を加えるなら、刹那君たちの退学もやむをえん」

——この爺、最悪だ。

Side 高畑

僕も学園長も、後悔していた。けれど同時に、未だ期待もしていたんだ。

後悔は、瀬野君をネギ君に近づけてしまったこと。期待は、瀬野君がネギ君に協力してくれること。

彼は強い。溢れないようにしているけれど、その身に宿す魔力は、僕が知る中で最も大きい。彼が身に着ける魔法道具は、僕も学園長も知らない物だ。彼がどこでそれを手に入れたのか、興味が沸く。彼がネギ君に協力してくれたなら、欲を言えばパートナーや、師匠となってくれたなら、どれだけ心強いだろう。彼は教師としての仕事も完璧にこなしている。教師としても、魔法を知る者としても、彼がネギ君に協力することは大きな力だ。

誤算は、彼が全く裏に関わろうとしなかったことだ。おかげで僕たちは、彼の確実な力を見ることが出来ずにいる。

それは刹那君にも同様で、彼女の力もどれほどのものか分らない。だが、昨日僕の後ろに立ち腕を掴んだ彼女から、強さを感じた。間違いなく、彼女は強い。

どうにか関わりやすい立場に置いたが、彼は全てを知らないことにしてしまった。それどころか、ネギ君を壊してしまいかねない。本来なら、すぐにでもネギ君から離すべきだろう。けれど、どうしても期待を捨てきれない。ネギ君に及ぶリスクと、ネギ君が強くなるメリット、天秤にかけて、未だメリットに重きがいく。出来るだけリスクを減らし、メリットを得る機会を設けるために。僕たちは瀬野君に頼んだ。見逃してほしいと。それは取り付く島も無く彼に拒否されたけれど。僕も学園長も、諦めるつもりは無かった。

「ネギ君に危害を加えるなら、刹那君たちの退学もやむをえん」

瀬野君から滲み出る殺気に、服の下で冷や汗が伝う。本当に、恐ろしいよ。

彼にとつて刹那君が大切なのは分かっている。その名前をこの場に出すんだから、これは賭けだと言ってもいい。彼が僕たちの頼みを聞いてくれるか、否かの。

「ガキに手を出せば、刹那に被害が行くと？最悪な脅し方をしてくれるな」

「ふおお、すまんがこちらにもそれくらいには本気ということじゃよ。ネギ君を見逃してくれるだけで構わん、聞き入れてはもらえんかの？」

「……勘違いしているようだが、俺はあのガキが何をしようと、気に留めるつもりは無い」

「そうなのかい？」

初日から既にネギ君に悪印象を持っているようだった。てっきり目の敵にでもしたのかと思っていたが、そうではないらしい。

「目の前で魔法をぶつ放そうが何をしようが、俺は俺たちに危害が来ない限り、何もしない。見ないふり、聞かないふり、気づかないふり、なんでもするさ。誰が好き好んであんなガキを気にしなければならぬ」

「……ならば、昨日の事だけで良い。ネギ君を見逃してくれんか」
「無理だ」

今後は分からないが、それなら昨日の一件だけでも、彼が許してくれれば。ネギ君の安全は保障される。今はそれだけで十分なんだが、彼は首を振るばかりで許してくれそうも無い。

「どうしてもかい？」

「あのガキを許してやる理由がどこにある？刹那に傷をつけたんだ、その罪は償うべきだろう」

「……君の言葉を聞く限り、確かに原因はネギ君にあったようだが、刹那君は自分で傷をつけたんだろう？そのあたり、酌量の余地は無いのかな？」

昨日の一件は、ネギ君がホレ薬を作ったということしか実は把握できていない。それによって生徒たちに追いかける姿は見ているが……刹那君の姿は無かった。彼の言葉の通りだとすれば、ネギ君は直接的な危害は加えていない……はずだ。

瀬野君から溢れる殺気が増す。一瞬、目の前が暗くなったように感じてしまった。これ以上は、限界かもしれない。

「……ガキに罪は無いと？」

「そうは言わんよ。じゃが、もう一度、ネギ君にチャンスを与えてやってはくれんか？彼が君たちに直接的な危害を加えぬよう、こちらにも注意するのだな」

「……たとえ間接的だろうと、被る被害によっては殺す。今後も

必要以上に俺たちに関わってくるなら壊さない保証は無い。直接的な被害の場合、問答無用で殺す」

「あまり、手荒な真似はせんでほしいんじゃがお」

「なら、あのガキをどこかに監禁でもしておけ。俺たちに見つからないようにな」

心底嫌そうに、面倒くさそうに、彼は言った。許した、というわけでは無い。どちらかというと、もう関わりたくないような、そんな風だった。

Side 刹那

彰を待ち始めて数十分。何度か、中に入ろうかと思ったけれど、扉に手をかけてやめた。部屋に入る前に彰が言ったことを思い出したから。

「刹那を、あいつらの前に出したくない」

それを彰が望むなら、私は待とう。気配からするに、彰が怒っている以外、問題は無さそうだったから。昨日の事に関しては、私はあまり思い出したくない。

あの子どもに一瞬でも抱いた感情。それが気持ち悪くて仕方がない。また同じことをするようなら、あれはすぐにでも消してしまおう。ようやく出てきた彰に駆け寄り、見上げる。頭を撫でられ、気持ちよくて目を細めた。

「悪い、待たせたな」

「いいさ。それより、疲れているみたいだが、何があった？」

「ああ……いや、悪あがきというか、往生際が悪いというか、諦めが悪いというか……あいつらと話すのが、疲れたただけだ」

「……平気か？どうにかしようか」

「放っておけ。関わるだけ面倒だ」

歩き出す。とりあえず、彰が言うなら放っておこう。あまり酷いようなら、勝手に始末すればいいだけのことだ。

「なあ、刹那。刹那は、このかたちをどう思う」

「このちゃんたち？」

「ああ」

話していたことと、関係があるのだろうか。

「友達だと思っているが？」

「一緒にいたいとは思うか？」

「彰ほどそうは思わないが……いないとなると、少し面白くなくなるな」

「そうか……」

彰は何か考えている様子だった。何を考えている、首を傾げると、面倒くさそうな様子で言う。

「あのガキに手を出すなら、刹那を退学にするそうだ」

「……なぜ？」

「さあな。脅しなんだろうが、刹那は義務教育中なんだがなあ……気づいていないかもしれないな」

「だとすれば、相当の馬鹿だろう」

にしても、私を彰の脅しに使ったのか……今すぐにでも戻って、殺

してしまうべきかもしれない。戻ろうかという思考は動きに現れ、少し遅くなった私の歩みに気づいた彰が振り返り、首を振った。

「別に放置でいいだろう。あいつらを殺したら、学園にいるのも難しくなるしな」

「私は別に、彰がいるなら構わないが？」

「このかたちといえるの、多少は気に入っているんだろ。友達は大切にしておけ」

「……うん」

頭を撫で回されて、気分が落ち着く。彰は、思いのほか友情を大切にする。最終的には私がいればそれでいいにしても、そこに至るまでに発生した絆を、無下にしたりはしない。

だからこのちゃんたちを彰とは違う意味で大切に思う気持ちを、彰は絶対に否定しない。むしろ、それを肯定する。

「とりあえず、あのガキは無視。関わるな。もしも何か直接的な被害が及んだ場合は、即俺に知らせろ。……殺しても構わないが」

「わかった」

私もあまり関わりたくは無いし……このちゃんが巻き込まれないように、気を付けよう。神楽坂さんが向こうに付いたなら、自ずとこのちゃんの近くで騒動が起こる可能性もある。

「……そろそろ、時間もやばいな」

腕時計を見て、彰が舌打ち。彰は朝から会議があるし、急いだ方が良さそう。

「走ろう、彰」

「ああ」

走り出して、ちらりと彰を見上げる。目が合って、手を引かれた。朝から面倒事も多いが、彰といられるのが、私は一番好きだ。

騒動の翌日、朝のこと（後書き）

ネギを排除すると話がどうにもなくなるので、いかにネギを殺さずに主人公の怒りを収めさせるかを考えます。ので、双方の言い分におかしなところがあるかと思われませんが、目を瞑って下さると助かります。

とりあえずネギ、直接的被害を刹那たちに与えなければ死なずに済みそうだから、がんばれ。

無駄な争いはする必要無し

Side 彰

人を呪わば穴二つという言葉がある。相手を呪えば自分も呪われる、みたいな感じだとして。

呪って呪い返されるなんて馬鹿な真似をするつもりは、無い。

「（形状は……ブレスレット。対象は登録者三名で、効果は、装着者に登録者が危害を……物理攻撃、精神攻撃、その他理由による怪我を与えた際に、その登録者に装着者へ及んだと予想される苦痛を十倍にして与える。登録者以外にこの効果は及ばないものとする）」

小さな石を嵌め込んだ細身の腕輪。これでいい。

「刹那」

「ん……終わったのか？」

「ああ」

ソファで読書中の刹那の隣に座る。本を閉じて寄りかかってくる刹那を引き寄せ、左手を取った。白くて細い、綺麗な手だ。

「彰？」

「……明日からは、これを着けておけ」

「どんな効果なんだ？」

「あのガキと爺さんと高畑が危害を加えようとしてきたら、相手に十倍返すする」

「そうか。わかった」

話ながら、試しに左手首につけてみる。サイズは大丈夫だな。ブラックホールと一緒に付けることになるが、違和感があるか聞いてみると問題は無いようだ。それならいい。

今日は仕事も修行も終わって、この後の予定は風呂に入って寝るだけ。どうしようかと考えて、刹那に服の袖を引っ張られた。

「どうした、刹那」

「これ、やってみたいんだ」

「ん？」

これ、と指されたものを見る。刹那が読んでいた本の表紙で、女が男に膝枕していた。俺が持つてる本じゃ、無いな。

「こののか？」

「うん。面白いからって」

「そうか」

表情から察するに、面白かったんだろう。満足そうだ。

刹那の希望通りにソファーに横になり、刹那の足に頭を乗せる。未だ制服を着替えていない刹那はスカートで、視線を少しずらすと白い足が見える。見上げた刹那は、とても嬉しそうに笑っていた。

「これ、いいな」

「気に入ったか？」

「ああ。彰の顔が、よく見える」

真上と真下から見上げる体勢なので、俺からも刹那の顔がよく見える。確かに、これはいいかもしれない。

そっと刹那の手が俺の髪を梳き始めた。髪の間を擦り抜けていく指

の感触が気持ちいい。いつもとは逆の立場で、俺がされる側で刹那がする側。刹那を撫でたり抱きしめたりするのが好きだが、こうしてされるのもいいな。刹那も、満足そうだし。

「お風呂に入るまで、こうしよう」

「ああ」

刹那の言葉に頷く。俺としても願ってもないことだ。

そのまま互いに動かずのんびりと過ごして、一時間ほど経ったところで風呂に入ろうと席を立った。いつもと違う立場も、気持ちがいい。

ガキが来てから五日目。隣の席で仕事をするガキを一度か二度しか見たことが無い、がそれはどうでもいい。

授業も無く、仕事も急ぐものは無い。刹那は授業中だと、コーヒを飲んで一息ついていたら、源先生に声をかけられた。

「瀬野先生」

「源先生……どうかしましたか？」

「あの、A組の体育の授業なんですけど……」

話を聞くと、担当教師が急用で来られなくなったらしい。なら代わりの教師が行っている筈だが……あのガキに、それを頼んだようだ。源先生も、代理とはいえ一人で授業を任せて良いのか迷っているようだ。担当も、あのガキでは無く俺か源先生に言えば良いものを。余計な手間と時間がかかる。

「俺が行きます。今日は、屋上でバレーの予定でしたね」

「ええ…すみませんが、お願いできますか？」

「まあ、あのクラスの体育は随分と体力を使いそうですから……」

頭の方は差が激しいが、運動能力はいつも並みか並はずれなんだよなあ。悪いのも少しはいるが。同じ女でも、あまり運動が出来るようには見えない源先生が相手をするには厳しいだろう。先生も、そう思ったから俺に言ってきたんだろうし。

「……刹那に何かあったら、どうやって殺してやろうか」

呟きつつ、屋上への階段を上り始めた。

Side 千雨

はあ、馬鹿らし。んでもってさむ。

寒空の下、薄着で走り回る奴らを見て呆れ果てる。よくまあ、あんな不利な条件で勝負しようと思ったな。そもそも、私らが勝負する必要なんて全く無いってのに。

「わあゝ、皆さん、頑張れー」

「さよ。わざわざ応援しなくてもいいっての」

「でも皆さん頑張ってますし。このかさんも参加してますから」

参加していないのは、極少数。私と刹那、龍宮、エヴァ、茶々丸、さよ。さよも最初は参加したがったが、一応、長期入院中で退院したが未だ体力に問題あり、という設定なので、断念させた。実際、さよは運動能力が高いわけでは無いし、あの騒動についていける保

証は無いから、別にいいだろう。

近衛は、まあ神楽坂も参加してるし、こういう騒ぎには乗っかるタイプだからな。今回ののは、馬鹿らしいが魔法は関係ないし。ただ、刹那が良い顔をしなかった。必要以上の面倒事に近衛を巻き込ませたくないかったみたいだが、宥められて私らと一緒に大人しくしている。

「ってか、本当に寒い……」

ジャージ上下を着ていても、寒空の下で動かずにじっとしていると体が冷えていく。なんでわざわざ外で体育なんだよ、おかしいだろう。でもってなんで刹那たちはそんな平気そうなんだよ、畜生。恨みがましく刹那たちを見ると、刹那にちょいちょいと手招きされた。

「なんだよ」

「寒いんだろ？」

また手招き。誘われて一步近寄ると、途端に暖かくなった。よく晴れた春の陽気というか、何となく眠くなる心地というか……というよりも何故だ。

「魔法道具『暖かな空』だ。外は寒いからと、来る前に彰に渡された」

「……つまり何か？お前らはそれのおかげで全く寒くなかったと？」

「千雨だけ範囲から一步ずれてたんだ」

「言えよ！！」

おかしいと思っただよ、龍宮だけじゃなくてエヴァまで刹那の傍にいるからな。私だけすごい損したみたいじゃねえか。

「だから、こっちに来いと言ったじゃないか」
「もつと早くに言っただけだったよ！」

あー、くそ。

S i d e 彰

屋上の扉を開け、その光景に思わず嘖然となった。来る前に一応にと持ってきたコートの使用割り当てを見る。この時間、ここを使用するのは二年A組で間違いが無い。

「どういう状況だ、これは……」

「高等部の生徒が乱入してきた」

扉のすぐ横にいた刹那が答える。乱入か、それなら追い出せば済む話なんだが……なぜ、ドッジボールをしているんだか。さらに説明を求めると、千雨が引き継いだ。

「昼間に、うちのクラスの何人かと高等部の連中が遊ぶ場所のことで揉めたらしくてな。それは高畑の奴が収めたらしいが、高等部の連中が気が済まないみたいで、このコートを使用してレクリエーションだとかをやりに来たんだと。で、先に使用していたのは自分たちだっていう主張をしてきた」

「言いたいことは色々あるんだが、高等部がここにいる経緯は分かった。ドッジボールをしている理由はなんだ」

「神楽坂さんを筆頭に、挑発に乗った方々で揉め事が起きたところを、ネギ先生がくしゃみで魔法を暴発させ、皆さんが呆然となったところにスポーツで勝利した側にコートの使用権を与えることを提

案いたしました。高等部のの提案によりスポーツはドッジボールに決まり、今に至ります」

「これが始まってから経過した時間は」

「十二分四十八秒です」

「わかった、ありがとう」

千雨と茶々丸の説明に、頭を抱えなくなる。つまり目の前で行われていることは、A組にとって必要のないことだ。こっちに非は無く、向こうに非があることなのだから。騒動を大きくしたのは、あのガキだが。

携帯を取り出し、電話帳を表示する。電話する前に、茶々丸に問うた。

「茶々丸、今の向こうの本来の授業時間は？あと、授業場所」

「検索いたします。あちら側は教室にて自習時間です」

「わかった」

手早く電話をかけ、相手にこちらの要件を伝える。すぐに来るだろう。

俺はその前に、この事態を収拾するべく、騒動に向かって歩き出す。本当に、余計な手間ばかり増やしてくれたな、あのガキ。

深く息を吸い、叫んだ。

「そこまでしろー!!」

「っえ、瀬野先生……?」

「全員、その場から動くな。ボールを置け。騒がず静かにしろ」

苛々しながら次々と指示を出せば、一応は大人しくなるA組。高等部の奴らも、さすがに教師に怒鳴られて騒ぐほど馬鹿では無いか。

「この状態になった事情は聞いた。まず、高等部……コートの使用割り当ては、確認したのか？」

「それは……」

「今の時間のコートの使用权は、二年A組にある。そもそも、高等部には高等部専用のコートがあり、そちらもきちんと割り当てが決まっている。特別な許可が下りない限り、お前たちがこのコートを使用する権利は最初から無い。また、お前たち本来なら教室で自習のはずだな？」

「な、なぜそれを!？」

「確認してあるし、お前たちの担任にも連絡済みだからすぐに迎えが来る。教室を抜け出して、中等部に余計なちよっかいを出しに来たことも知らせてあるからな。今後は、こんな馬鹿なことをしないように」

「お前ら!!」

タイミングよく、高等部の教師が屋上に怒鳴り込んでくる。青ざめる高等部の連中にすぐに教室へ戻るよう指示を出すと、教師の男が頭を下げた。

「すみません、うちの生徒がご迷惑をおかけしました」

「いえ、こちらもすぐに対応できず申し訳ありません」

本来なら、十分以上も時間を無駄にしないで済んだんだ。俺が最初に対応したわけで無いとはいえ、互いに謝罪し合い丸く収める。教師が急ぎ足で去るのを見送り、とりあえず高等部の方はこれで問題ないと安堵した。問題はもう一つ残っているが。

「先生」

「は、はい……」

恐る恐る、怯えた返事が返る。近づいてこようとしない態度に苛立つが、それを指摘するのも無駄に思えた。

「今回の件は、こちらに正当性があつたことが分からなかったのか？」

「そ、その、先に使っていたのは、向こうでしたし……」

「こっちは授業で使用するんだ。自習中の遊びで使用する向こうより、優先されることくらい、分かるはずだろう」

「あ、あうう……」

「それをわざわざスポーツで使用权をかけて争うなんて、馬鹿なことにもほどがある。騒動を大きくしないでもらおうか」

「すみません……」

しょんぼりするガキは早々に捨て置いて、生徒たちを見る。怒っているのが分かるのだろう、誰一人視線を合わせようとしない。このかだけは、困ったように笑っていたが。

「その様子だと、自分たちの対応が間違っていたことは分かっているようだ」

ちらほらと頷く姿が確認できる。全く反省していないわけでは、無いようだ。

「こちらに正当性があつたなら、譲る必要は無い。今回のように、相手の挑発に乗って、わざわざこちらの正当性を捨てる必要も無い。誰も主張しなかったのか？」

「いや、最初に明日菜が言ったんだけど……」

「向こうが聞く耳持たずだったし……挑発に乗っちゃったし……」

「売られた喧嘩を全部買っていたらキリが無いだろう。今回ののは買ってやる必要の無い喧嘩だしな。こちらの正当性を主張して向こう

が聞く耳持たずなら、今後は俺や他の『大人』を呼べ。説教するから」

「はい」

「それじゃ、説教はここまでだ。残り時間は、そうだな……」

時間を確認する。授業時間も半分くらい使ってしまったているし、これだと、バレーみたいな少人数のチームで何度も試合を回すのは無理か。

「時間も無いし、バレーの予定を変更してこのままドッジボールにする。まあ、遊びみたいなもんだから、チーム分けは好きにしてい。ただし、人数はきちんと公平に分けるようにな」
「やったー!!」

あちこちで喜びの声があがる。まあ、授業として動くのと、遊びとして動くのだと、気分も違うのかもしれない。チーム分けは勝手にしてくれるから、俺はとりあえず少し離れた場所で待つことにした。

「ずいぶんと珍しいことだな」

「エヴァ。何のことだ」

「坊やの事さ。普段の貴様なら、もっと潰しにかかるだろう?」

エヴァが隣に立って問いかけてくる。まあ、別に逃げ出すくらいにやってしまってもいいんだが……。

「生徒の授業時間をこれ以上削ってまで、あのガキに説教する価値は無いな」

「ほう……」

「で、お前は参加しないのか?」

「遊びなのだろう?なら、ここで見学するのも自由だと思うがな」

「……一応、授業中の遊びなんだがな」

まあ、さっきので疲れて参加しないのもいるだろうから、大目に見よう。そう思ったところで、エヴァとは逆側に刹那が立った。見上げてくる刹那の頭を撫でる。

「寒くなかったか？」

「ああ。ありがとう、彰」

「いや」

寒くなかったなら、それでいい。授業終了まで、俺は刹那たちとのんびりと過ごした。

無駄な争いはする必要無し（後書き）

感想より、ネタ拝借いたしました。ありがとうございます。

主人公はその場で作成可能ですので、とりあえず刹那にだけ。反魔の水晶と合わせれば魔法防御は万全です。

千雨がいることでなんとなく場が和まされる気がします。なかなか重要ですね。

ある日の休日の彼女たち（前書き）

千雨とさよの口調が迷子になりました。

ある日の休日の彼女たち

Side 千雨

日々の非常識に悩まされる、ある日の事。言っておくが、珍しいものでもなんでもない、ただの休みだ。日曜日。あの煩いクラスから解放される日。あの子どもが来てからクラスの騒々しさが倍増するわ、目の前で魔法ぶつ放されるわ非常識な行動されるわで散々だ。……ヤバ、あの子ども思い出さただけでまた痙攣が。瀬野や刹那と会ってからは非常識に突っ込んだから、落ち着いてきていたんだが、また再発してきやがった。

「今日はお休みだしお買い物に行ってくるよ〜ん！新しいお洋服のお披露目もするから待っててね！」

気を落ち着かせて、キーボードを叩いた。私のスタンス、裏の世界……安全な方の裏の世界でトップを取る。そのために日々の更新と新しく出てくるネットアイドルの調査やファンサービスなどなど、常に努力を重ねている。

ちなみに、今書いたのは本当の事だ。この後は買い物に行く。正直、街中に異常が蔓延っているから、あまり関わりたくないんだが……売ってるものは、性能が良い上に安いと魅力的なんだよな。むかつくけど。

「と、そろそろ時間だな」

時計を確認して、準備していた鞆を持って部屋を出る。実は私一人では無く、もう一人連れがいるんだ。

寮を出て五分ほど歩き、アーケードの入口で少し待てば、すぐにそいつがやって来た。

「千雨さん、お待たせしました」

「いや、別に待ってねえよ」

走ってきたのはさよだった。普段は一人で買い物に行くんだが、昨日そのことを話していたらさよが自分も行きたいと言ってきた。まあ、別に困ることも無いから、こうして一緒に行くことになったわけだ。

「最初はどこに行くんですか？」

「パソコンのメモリ強化するからその手の店の梯子だな」

「……？」

さよの頭上で疑問符が飛び交っているのがよく分かる。こいつは、機械類に滅法弱い。同年でのジェネレーションギャップとか、面倒すぎる。

「……いろんな店に行くから、とりあえず着いてくりゃいい」

「はい」

そうして私の買い物は始まった。隣でさよが基本は笑顔で、時折もの珍しそうにあたりを見回すのを見て、一発、頭を叩いておいた。田舎から来たガキかお前は。

普段よりもゆっくりとしたペースで、私の買い物は終わった。さよが興味を示したものに立ち寄りながらだったせいなんだが……まあ、

いいか。お昼過ぎ、体力的には余裕だが……騒がしいのに疲れてきた。

「あ、千雨さん千雨さん」

「あー？」

「あのお店、可愛いですね」

言われた店を見る。ネットで見ただ店で、ウサギのぬいぐるみが窓際に並んでおかれていた。『ラビットカフェ』、確か店内にウサギのぬいぐるみを並べているんだったか。

「ウサギさんとっても可愛いです」

さよはウサギが気に入ったみたいだが……どうすっかなあ。あの店、味は良いってネットでは言っていたが、結構な人気店の筈だ。主に女子の客で。

「（中は中で騒がしいんだろうな……）」

ちらりとさよを見る。ウサギに釘付けだった。

無視して行こうと思えば行けるんだけど……あー、しょうがねえな。

「あそこでちょっと休むか」

「は、はい！！」

バツと私を見上げて、さよが満面の笑みで頷く。子どもみたいに喜んで走っていくさよを追いかけて、私も店内に入った。大量のウサギのぬいぐるみが、出迎える。

店の中は案の定、女性客でいっぱいだった。待たされずに席に案内されたのは、運が良かったな。

「メニューをどうぞ」

「どうも」

「ありがとうございます」

幸いにも案内された席は壁際の二人席だった。女性客の座った席に挟まれる、なんてことにならなくて安心する。

「あ、千雨さんこれ可愛いですよ」

「お前、可愛いもの好きだな…」

「はい！」

良い顔で頷かれた。ちなみに、さよに言われたのは、ウサギの形をしたホットケーキ。お子様用だけど。

メニューをいったんさよに独占させ、考える。見た目可愛いカフェの割に、ご飯ものも豊富だった。まともに昼を食べるか、ケーキとかで小腹を満たすか。ネットアイドルという身分なので、体のラインには気を使う。どうするかな。

「さよは決まったのか？」

「んー、どれも美味しそうで……」

さよもまた悩んでいるらしい。とりあえずメニューを眺め、黙考する。

しばらく二人そろって悩んだ末に、ようやく決まった。

「んじゃ、私はこれ」

「私はこれにします」

私が頼んだのはワッフルと紅茶のセット。さよはラビットパフェ…

…見たところ、普通のチョコパフェだな。どこがうさぎなんだ。

注文を済ませ、私は先に運ばれて来た紅茶を飲みながらさよと話す。

「さよは、あんま買い物に來たりしないのか？」

「え？」

「いろいろと珍しそうにしてたろ」

「あー、そうですね。普段はエヴァさんのおうちで茶々丸さんとお料理とかしてますし」

「……料理？」

「そうですね。でも、私はお食事では無くて、お菓子を作ることが多いですけど」

意外だった。普段、さよが料理してるところなんて見ないから……ああ、でも修行の合間の休憩中に出されたクッキーとか、やけに美味かったんだよな。その辺で売ってんのよりも美味くて、近衛たちにも好評だったような…。

「まさか、お茶請けもお前が作ってんのか？」

「いつもじゃないですけど、クッキーとかはそうです。ケーキは今練習中なのでもう少し待ってくださいね」

「……材料とかは誰が買ってた？」

「茶々丸さんですよ。必要な物は買ってきてくれるので、お出かける必要が無くて……」

「それで家にこもってばかりってことかよ」

「あはは……」

思わぬ趣味とその腕前を知って驚いたところで、注文が運ばれて來た。

「お待たせいたしました。こちらのパフェの方はサービスでぬいぐ

るみを差し上げておりますので、お一つお選びください」

「わっ、本当ですか!？」

キラキラと目を輝かせて、さよが店員の持ってきたバスケットに入れたれた小さなウサギのぬいぐるみを見る。手のひらサイズの小さいもので、白いウサギの首に色違いのリボンが結ばれていた。

真剣な眼差しで楽しそうにウサギを吟味するさよを眺めつつ紅茶を飲んでいると、にこやかに笑った店員が話しかけてくる。

「お連れの方も、よろしかったらご一緒にお選びください」

「……私か？」

「ええ、どうぞ」

思わぬところで指名されて、飲みかけていた紅茶に咽かける。どうにか飲み干してから問えば、にこやかな笑みのままで頷かれた。どうしようかと思ってバスケットを見る。結構、可愛いんだよねあ。

「……んじゃ、せっかくだし」

普段なら断るんだけど、なんとなく。目が合った気がするウサギを取った。薄い水色のリボンのウサギは、やっぱり可愛かった。

「可愛いですね」

「……だな」

黄色のリボンを巻いたウサギを掌に乗せて、さよは嬉しそうに笑っていた。

料理も美味しかったし思わぬ土産も手に入ったことで、割と満足しながらカフェを出る。この後の予定は特になし、普段なら帰るところだ。

「千雨さん、この後はどうするんですか？」

「私の用事は終わったしなあ……さよ、行きたい場所とかあるか？」

「え、私ですか？」

頷く。まあ、せっかくいるんだしさよに付き合ってもいいだろう。午前は、ほとんど私の目当ての場所に行つてばかりだったし。にしても、私の性格も変わったよなあ。前なら誰かに付き合うなんて考えなかったのに。

「んー、特に行きたい場所も無くて……適当に歩き回つてみたいですね」

「なら、興味ある場所見つけたら寄つて行きゃいいだろ」

「はい！」

目的も無く歩くつて言つても、麻帆良は広いし、とりあえず中心部を回るくらいでいいか。他はまた今度行けばいいだろうし、さよの様子からするにこの辺りだけでも十分に楽しんでいそうだ。よくよく外に出ないんだなこいつ。私が言つのもあれだけど。

「わあ、凄いですね」

「あ？」

不意にさよが何かを見つけて声をあげた。すごいって、何がだよ。さよが見つけたものを私も見る。乱闘があった。

「……いやいやいやいや」

おかしいだろ、なんで乱闘してんだよ。しかもこんな街中で結構な大人数でとか、アホだろ。つつかこれ、このまま進んだら巻き込まれフラグじゃねえか。ふざけんな。あーもうなんで休みの日までこんな目に……。

「さよ、別の道行こうぜ」

「あ、待ってください、千雨さん」

回れ右をして引き返すことにした。思わず早足になって、少し遅れてさよが追いかけてくるのを確認して足を止める。まあ、これだけ離れりゃ巻き込まれたりはいないだろう……って、マジか。またか、またなのかよ。

「さよ！」

「ふえ？」

ああ、止まんな馬鹿！！

さよの後ろから男が飛んで来る。飛ぶって時点でおかしいが、たぶん誰かに吹っ飛ばされたんだろう。それはどうでもいいが、このままじゃさよが下敷きになる。舌打ち一つ。

「（突風で押し返すには無理がある、人目がありすぎて盾を使うのは怖い）」

それなら、と右手でポケットに入れたカードに触れる。

「カードマジック『幻影』『速』」

二枚のカードに魔力を籠める。『幻影』は精神攻撃の魔法で、相手

に幻を見せることが出来る。ただし、多人数に使用する場合の魔力消費はでかい。その範囲内にいる対象分の魔力が必要になるからだ。『速』は私に対する補助魔法で、言ってしまうえば足を速くする魔法だ。

『幻影』で私とさよの周りの奴らに幻を見せる、見せたのは花火だ。一発だけ頭上に花火が上がったように見せて意識を上に向けさせ、その間に『速』でさよまで走る。で、今度はさよの手を引っ張って最初に私がいた位置まで戻る。これでよし。

「はわわわ……」

「おーい、さよ。大丈夫か？」

「だ、大丈夫です」

殆ど飛ぶ勢いで引っ張られて目を回すさよ。後ろで男が地面に落ちて、頭上を見上げていた周りの奴らの意識がそちに戻される。範囲指定がちょっと甘くて広めに取っちゃったせいで、消費された魔力が半端ない。一気に脱力感が襲ってくる。

「千雨さん、ありがとうございました」

「あー……怪我ないなら、いい」

足が速いくらいこの街じゃ何ともないのかもしれないけど、できれば誤魔化したいしな。さよも無事だったし、まあよかったと思えば……あー、でもやっぱり結構つらい。

「さよ、どっかで休もうぜ。疲れた」

「そうしましょうか」

心配そうに見てくるさよに引かれて、私たちはそこから立ち去った。

「ふう……」

部屋に帰ってきて一息。あの後、近くのカフェで少し休んでからまた歩き回った。二度目の乱闘騒ぎに巻き込まれることは無かった。買ってきたものを机に置いて、だらしくベッドに倒れ込む。静かな部屋はやっぱり落ち着くな、麻帆良ももう少し静かになりや楽なの。

「……まあ、いいか」

いや、よくはないけど。考えるのもだるくなりそうだ。

でもまあ、さよと出かけたのは悪くなかったかもしれない。誰かと出かけたの自体、久しぶりだったけどな。

鞆に入れてたウサギのぬいぐるみを取り出して眺める。思わぬ土産が手に入った。

「さて、と……」

起き上がり、パソコンの前に座る。さっそく更新といくか。パソコンの横にうさぎを置いて、私はぐっと伸びをした。

ある日の休日の彼女たち（後書き）

この小説の千雨は、トラブル吸引体質も併せ持っているのかもしれないです…ね。乱闘騒ぎに遭遇してます。

常識を重んじる千雨は、魔法を使うときは人目に気を使います。バレないようにとても頑張ります。苦勞人ですね。

面倒見のいい性格ということで、さよのお世話をすることが多いというか、なんとなくさよも千雨に懐いているようです。そんな予定はなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1908r/>

依存者の望み

2011年10月18日10時56分発行